
ペテン使いは言霊遣い

タナカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペテン使いは言霊遣い

【Nコード】

N9946V

【作者名】

タナカ

【あらすじ】

少し捻くれた男子高校生、虚室対戯。そんな彼の特技は『嘘』。嘘つき、大法螺吹き、詐欺師、詭弁師、ペテン師…、親友には敬意をもって『ペテン使い』などと呼ばれている。そんなある日学校裏の森の中でのんびりしていると、幼女が空から降ってきた。言葉と言霊の戦い。それと嘘つきな高校生の物語。

Prologue 俺と嘘と降ってきたもの

なんというか、人に恥じてしまう人生を送って来た。少なくとも、誰かに誇れるものとは言えやしない。

恥の多い生涯を送って来ました。

例の人間を失格された物語を引用すればそうなるのだろう。

まさにそれ。俺にとって誇れやしない、恥の多い人生は、まさに失格されるべきだろう。まあでも、人間なのだから仕方ない、と例の作者と違い割りと楽観的に考えるのだから俺はまあマシなものだ。余計性質タチが悪いのかもしれないが。

友達…、親友といえるのだろうか、そいつが言う俺についてのよく言う言葉を使えば、

「君の話はいつも論理とかすっ飛ばしな法螺話ほらだよねー。ある意味尊敬するよー。」

やけに間延びした口調で言われた。

失礼な。けれど言い返せない。そうなのだ。俺は何を隠そう、天性の嘘つき。

法螺話ほらはお手の物、言い訳だってお茶の子さいさい。その上口も達者で口喧嘩には負けやしない。揚げ足取りも得意で、殴られる寸前まで相手を怒らせたりできる。

まあ、親友によくやりすぎだ、と怒られるけど。

嘘。これが一応俺の日常の行動の中にどすんと座り込んでいる。

親友からは敬意をこめて『ペテン使い』などと不名誉な名をつけら

れているが、まだまだある。

大法螺吹き。^{おおぼろ}詐欺師。ペテン師。詭弁師。嘘つき。

…悪口だとは思わないようにしているさ。正直呼ばれ方はどうだっていい。

まあでもそう呼ばれるだけの实力はある。…實力といえるかは知らないけど。

だって俺は嘘つきだって有名なはずなのにそれでも引つかかるんだぜ？親友にはなぜか通用しないけど…、それでもそれ以外は簡単に俺の嘘^{ペテン}にかかる。

俺の最大の特技。もう才能だって言えるんじゃないだろうか。褒められることはないのだけど。

言葉は強い。それは簡単に人を惑わし、感情を左右できる。剣であり、盾であり、鎧だ。だから俺は嘘をつくし、やめるつもりは毛頭ない。だって嘘は俺の日常であり、一部なのだから。

とりあえずでも、嘘を除けば俺は普通の一般的な高校生だ。

超能力が使えるわけでも、魔法が使えるわけでもない、いたって日常的にいる、高校生だ。…嘘を除けば。

性格は自分で言うが微妙。成績は国語が優秀。高校一年生の、健全な男子高校生。

虚室^{こむろたいぎ}対戯。それが俺の名前だ。

よし、もう一度言おうか。俺は虚室対戯、一般的な男子高校生、である。

面倒事は嫌いだし、人助けなんて自分に利益のあることしかやらない、一般的の少し性格の悪い捻くれた男子高校生、だ。

嘘ばかりで褒められる人生でもなし、面倒事はお人よしの、ヒーローみたいな、いかにも主人公のような奴がやればいいんだ。

そう、例えるなら今の状況。

「……………」

普段ならぺらぺら動く口もこのときはひくひくと、頬を痙攣させるばかりだった。

さて、なんなのだろうかこれは。

…一言で言うのなら、

美少女と呼べるべき少女が落ちてきた。

……だめだ、妄想の激しい人間だと思われそうだ。俺はいたって健全です。ただ、これしか言えないのはどうしてだろうか。

ちなみに言うがここは学校。まああまり小さい子供が入り込まない場所だろう。

そして、ついでにその少女の様子について一言。

傷だらけだった。

…一応言うが俺がやったんじゃないぞ？ いじめ、かつこ悪い。ましてや小さい子供をだなんて。

まさか虐待？ いや不良が？ いや、どこかの変態が…、と、俺は立ち尽くしてぐわんぐわん考える。

犯罪の臭いがした。なんせ目の前の少女は頭から血を流しているのだ。

そして、それがちょうど俺の上に落ちてきた。

妄想でも幻覚でもなく、現実だ。

さて、どうしてこうなったのかと言うと、話は数時間前に遡るのだ

が

⋮
。

Episode 1 ペテン使いの優雅な日常とその崩壊

嘘：事実でないこと。また、人をだますために言う、事実とは違う言葉。偽り。^{いつわ}「をつく」「この 話に はない」

校舎の裏で、カツアゲしている不良とされている気弱そうな少年の間に入り込む少年がいた。

琴羽野高校第一学年2組所属、虚室対戯。それがその少年の名前だった。^{ことばの}

「なんだよ、正義の味方のつもりか？」

口元を歪ませてさも悪役の典型的なタイプのように笑う不良A。かなり古いタイプのような気がするそれは、どこぞのアニメのキャラのように髪がモヒカンだった。

絶対学校で浮くだろうその風貌に微かな悲しさを覚える戯対。あなさ、それ全然イケてないから、と言う言葉を飲み込む。

「生憎そんなもんじゃないですけど、そいつ俺の連れなんでとりあえず穏便にすましてほしいなあ」と

「ああ？友達思いなこった」

俺の連れ、と戯対が指す少年、今絶賛カツアゲされ中な端渡代夜^{はわたりしろや}はたいぎー、と情けない声を上げている。

ああこいつじゃなかったら無視してたはずなのに、と対戯はため息をつく。いわゆる親友？と呼ぶべきだろうか、その代夜をただ歩いてただけなのに見つけて、代夜にも同様に見つけられてしまった。ここで助けなかったら後からぐちぐちと言われて、精神的に痛い

ころをこいつはついてくるかもしれない。この親友は対戯にとって侮れない存在なのだ。

そのうえ、この代夜は、面倒くさがりの戯対がどうにもほっとけない人間だったりする。

「あー…、あんたさあ、高三だよなあ」

「はあ？それがなんだよ」

「不祥事による学業停止制度って知ってるか？」

一瞬ぱかん、と不良Aの笑っていた口の動きが止まる。

「その名の通り不祥事を起こした学生への特別処置っていうところか。最近お偉いさんが決めたらしいんだけどよ、近頃いじめやそういう類での自殺やら事件が流行ってるだろ？そういうのって今問題になってるよな。いじめ、暴力、強奪、リンチ、…カツアゲだってなあ。このくらいどうってことないだろ、って思われるようなことにも学校ってのは敏感になってるんだよ」

「はっ、」

びっくり、と不良の顔が強張るのを戯対は見逃さない。

ビンゴ。その異常に目立つ風貌や、どうにもひ弱そうな代夜を狙ったところ、その上ここは校舎裏で人通りも少なく目に付きにくい。

そして第一にこの不良Aはピアスも何も、体に穴を開けるようなものは使用していない、と言う点だ。

つまり見かけだけの臆病者。怖がらただけで、避けられることに優越感を感じるタイプ。

どうせ自分より強いものには媚び諂って、弱いものには偉そうになる。けれどその実、自分に不利なことがあつたら迷わず逃げる人間だ。

この学校は髪型に関してはかなり寛容だ。なんていうか、校長が自

分が染めたいばかりにいいんじゃない？というような理由らしい。あの意味尊敬するが。

つまり、この目の前の不良Aは、寛容な校則をいいことに髪形は好き放題やってるだけ。けれどそれ以外はノータッチ。無駄な装飾具なんてつけてきていやしない。でも髪形については、内申に影響しない、ということは、

この不良Aは停学や退学についての畏怖を感じている可能性がある、ということだ。

その対戯の予感当たり前、学校、という単語を出すとあからさまに不良Aの空気が変わるのを感じた。

わかりやすつ、と内心で戯対は突っ込む。けれどそんな感情を表には出さず、あくまでにつこりと笑ってみせる。

「学校の不祥事ってさ、学校のせいにされるじゃん？それって結局学校の不利益になるわけよ。そういう問題がかなりあるからさ、さすがに学校側も躍起になるだろ？つまり不良行為っていう生徒の勝手な不祥事のために、自分たちが迷惑かかるだなんてありえねえだろ、みたいな話なんだよ。わかるだろ？それならどういうことになるかさ」

「な、なにが…」

「つまり誰かによつて被害を受けた生徒が、先生に、学校側の人間に泣きつけばどうなるか。被害を受けてどう感じたか、肉体的にどうなったか、心境的にどうなったか、精神的にどうなったか、そのせいでどう追い詰められたか。考えてみるよ。近頃の高校生って案外ガラスのようなもんなんだぜ？簡単にヒビが入っちゃう。そんなガラスを使い続けたらどうなる。いつかはぶっ壊れるんだよ。そしてその後始末のために手を傷つける人間もいたりすんだよな」

なあ、と対戯はにっこり笑って朗らかに歌うように言いあげる。

「停学と退学、どっちが好み？」

+ + + + + + + + + + +

「不祥事による学業停止制度、なんての僕聞いたことないよ」

呆れた目で言ってくる代夜に、むっと口を尖らせる対戯。

助けてやったのになんだその目は。非難げに見つめれば慌ててばつが悪そうに逸らす。

「んー…ありそうだと思っただけだな…」

「少なくとも僕の記憶の中にはないよ」

「あ、ならねーわ」

あっけらかんと、言っただけのける対戯。

「どうせ嘘だし」

そう言った目の前の少年にやれやれ、と代夜は首を竦めた。

虚室対戯の特技は『嘘』、だ。

二枚舌ならぬ三枚舌。怒らせ惑わせ怯えさせ、感情操作はお手の物。嘘だと疑う連中も騙される。ついたあだ名は数知れず。嘘つき、大

法螺吹き、詐欺師、詭弁師：エトセトラ。

この目の前の親友からは敬意を持って『ペテン使い』などと呼ばれる。皮肉だとわかつてはいるが。

「…まあ、さ。助けてくれてありがとね。助かったよ」

「おお？素直に礼言うのか。めずらし」

「僕は君みたいなた邪鬼とは違うからね」

「天邪鬼って…それは違うとおもうんだけど」

「違うのかい？」

少なくともそんな可愛いもんじゃねえよ、と戯対は言つと代夜は母親のように優しく笑った。

ああもう、この笑い方は嫌いだ、と、舌打ちしながらそっぽを向いた。

「ん…そろそろ昼休み終わると思うよ、戻ろうか」

「いや、俺はいいや、保健室にでも行つたつて言つといて」

「…もう、対戯ったら…」

しょうがないなーと、やや間延びした口調で言つと、ううん、と一つ背伸びをしてからとことと校舎の入り口に向かって歩いていった。

途端に静寂がふわり、と浮かび上がるように対戯の周りに落ち着いた。

校舎裏は小さな森のようになっており、あまり人が近寄らない。なんにせよ高校生なのだ。冷暖房完備の校舎にいるほうがいい。まあ中にはそれこそ子供のように屋上や校庭を駆け回るものもいるが、大抵この場所には来なかった。

だが対戯はそんなこの場所が好きだった。薄暗くはあるが、葉と葉の間から零れ落ちる光が優しい陽だまりを作り、緩やかにボールを被せるそこは、どこかしら特別な場所に見え、たびたび対戯は訪れる。

そのせいで代夜と不良Aのあの場面に出くわしてしまったわけだけど。

「ふわぁ…」

大きな欠伸を一つし、かさかさと草の生えた道をのんびりと歩く。森をちよつと歩いた先にはちょうどいい広々とした空間があり、そこに小さなベンチが置いてあるのだ。

初めて見つけたときには汚れていたが、わざわざ雑巾を持ってきて綺麗に拭いたのだ。それはもう隅々と。

そのおかげでか、それは綺麗な光沢を放ち、座って申し分ないものになった。それに森とそのデザインが不自然のなくくらいにマッチしていて、どうにも絵になる。

その場所に寝転がって過ごすのが対戯は好きだった。だから今回も行こうとした。それだけ、だった。

…確率はいくつだろうか。偶然にしてはありえないことだった。もしくは、これを運命というのか。それとも神様が『あ、これおもしろそうじゃね?』みたいなノリで引き合わせたのか。どっちにしろ言いたい。ふざけるな、と。

気づいたのは、がさつと葉と葉に掠れる音だった。風とは思えないような音だったので、鳥でもぶつかったか?と何の気なしに上を向いた、瞬間顔に衝撃と共に暗闇が広がった。

「んなっ！！！？」

いきなりのこととて反応も出来ずに後ろに倒れこむ。顔と背中に同時に衝撃。痛っ、と悲鳴を上げようとしたが、顔の前にある柔らかい何かにその音が阻まれる。

なんなんだよ、と起き上がりながらその顔の前にあつた重くて柔らかいものをどかす。そしたら、

傷だらけの少女だった。

「……………は？」

まあすぐに反応できないのはいうまでもない。

一応言うが、これは危ない妄想でも夢でもない。実際痛みはあつたのだ。そして幻覚でもない。現実であつて、リアルタイムで起きていることなのだ。

けど対戯の頭の処理速度が追いつかない。

少女が空から降ってきた。

ちようど自分の上に。

傷だらけで。

……………だめだ、わからない。

「あの、だいじょーぶ、です、か？」

頭の中が真っ白で、混乱なまま、一応問いかけてみる。少女はうう、と身じろぎ、息もしていたので、死んではいないらしい。それにはほつとする、が、おかしいことがある。

いや、それは当たり前前の疑問なのだが、なんで少女が空から降ってきた？ということ。

木登りでもしてたのか？と空を見上げてみるが、ちようど対戯の上

の部分には、葉っぱは固まっているが登れるような枝はない。その上ここは高校だ。普通の小学生程度の子供が入ってくるようなところでもない。

どうしようか。

「…ほつとくか」

出たのはなんというかまさに最低と言つべきその言葉。

傷だらけにしたの俺じゃないし大丈夫だろ、とあえて自分本位の考えでその場を立ち去ろうとする。

死んでるわけじゃなし、生きてるのだ。それなら平気だろ、と軽い気持ちで考え、幼女を自分の体からどかす。けれど地面の上もどうかと思つたので抱き上げベンチの上に寝かせた。

呼吸も安定してるし、傷もそれほどでもないだろう、と観察した結果を機械的に脳内に並べ、その場を立ち去ろうとする。

面倒なことには関らないほうがいい。平穩が一番なのだ。自分の人生に大きな岐路なんて必要ない。

幼女の眠るベンチを背にし、歩き出そうとした、その瞬間、
ばさり、

鳥の羽のような音が、天高くから聞こえた。

天高く？そう考え不審に感じた。

空を飛んでる鳥の羽の音が聞こえるような大きな鳥なんていたか？少なくとも、都会には、雀やカラス、時々ツバメが関の山だ。

なのになんだ今の羽の音。

対戯の耳にはノイズのような、ごみ箱をあさるような、不快を感じさせるような羽の音が、確かに聞こえた。

異質だと、何かが直感的に伝えていた。

現実的ではないと、伝えていた。

振り返ってはダメだ。振り返ってはいけない。本能のようなそれはアラームを鳴らしながら危険だと知らせる。

そうだ、そうだよ、さつさと戻ればいい。代夜に言ったように保健室へ行ってしまうばいい。あそこの先生とは案外仲良いから大丈夫だ。振り返らず、何も気にせず、現実の中で生きれば良い。それが一番だ。それが良い。そうじゃなきゃいけない。現実的に。日常に平凡に。

あの女の子は？

「……つたく！」

生きてれば良い、生きている、それならほつとけばいいんだ。けれど嫌な予感がした。嫌な予感ほど良く当たる、と誰かが言っていた。

考えてみたら、その嫌な予感には嫌な伏線もあった。

なぜ、幼女が空から落ちてきたか？

なぜ、鳥の羽の音が聞こえるのか？

ありえない。まるで妄想だ。けれど直感的に残った予感は相変わらず警報を鳴らしているし、それは止みそうもない。心臓がばくばくと耳の奥でいやに響き続けている。

ありえないだろ、現実的に、考えて、そんなの、まさか。

対戯は振り返った。

そして、その空に見た。

異形の、鳥を。

「っ……！！！！！！؟؟？」

それこそ幻覚じゃないか、と思う。ありえない事態が目の前で発生して、起こっている。この現実。見慣れた現実、混ざる異物。その鳥は、鳥とはいえなかった。その羽は大人二人分の体をあつさりと覆うくらいあり、その体も2mを超えている。

普通の鳥ではありえない、言うなれば化け物。羽は朱色に染まり緑色の鬘を生やしている。目は金色でぎよろりとしており、嘴は剣のように鋭い。

妖怪が現代に甦りました、的な？ありえない、ありえないありえないありえない。

叫び声を切れかけた理性で必死に堪える。頭の中はパニック寸前だ。まだぎりぎりですべて保っているのは、半ば予想できていたからだろう。まあその予想を軽く飛び越えてしまうものだったのだが。

その鳥はばさばさ、と羽を振りながら地面に降り立とうとしてくる。その視界に入っているのは、多分、ベンチで寝かせた
女
の子。

どうする、と自問自答する。もし助けようとしたとして、自分に何が出来る？所詮ただの高校生。すごいパワーとか、超能力とか、そんなの持つてゐるわけじゃない。ただのペテン使いでしかない。鳥に会話なんて出来るものか。

ありがたいことに鳥は戯対には気づいていないようだった。ただ、真っ直ぐに幼女を狙う。まだ幼い、傷だらけの小さな女の子を。別に家族でもなんでもなく、ただ自分の上に降ってきた迷惑なものじゃないか、あんなの気にせず逃げればいい。最初はほっとくつもりだったんじゃないか。全部夢にして忘れてしまえばいい。夢だ。ただ自分は森の奥に入ろうとして、それをやめて保健室に行つて、寝た。それだけだ。それだけなのだ。幼女が降つてきてもいいし、変な鳥も見えていない。だから逃げろ。見捨ててしまえ。忘れろ。忘れろ。忘れろ。

女の子は、生きてるのに？

「ああもうなんだよくそおっつ！！！」

半ばやけくそのように大声で叫びながら対戯はベンチの方へ駆け寄り、その幼女を背負う。鳥はいきなり視界に入ってきた対戯に一瞬だけ動きを止め、それから起こったようにクエーッ！！と鳴いた。生きてるなら、ほっとけばよかった。

でも、その生きてるものが、殺されてしまつかもしれないとしたら？
あまのじゃく
天邪鬼、なんて親友に言われてしまった意味がなんとなくわかった気がした。

結局甘いのだ。生きてるのはいい、死ぬのはだめ、と両極端に位置づけしたつもりなのに、その中間に関しては自分が不利になることを選んでしまった。

ふざけるな、ちくしょう、ありえねえ、なんなんだよ、これ。

鳥は木々が邪魔だったのか、降りてくるのに時間がかかったことが幸いして、背負う時間は簡単に確保できた。だが、鳥が地面に足をつけた途端、そんな安心は打ち消される。羽ばかりに氣をとられていたが、その足は大きく普通より太い。そのため、走るスピードが半端なく早かった。

「ちくしょう飛べるダチヨウだあれっ！！！」

ものすごいスピードで駆けてくる鳥に似た化け物は、対戯に向かってくる。多分追いつかれたら、死ぬ。そんな恐怖を頭の中でぐるぐると回しながら、それでも逃げる。

女の子を落としてしまえば良いじゃないか、と何度も思ったが、そんな考えとは裏腹に体は動かない。

逃げるために対戯は校舎とはさらに反対の、森の深い場所へ自分が走ってることに気づいた。しまった、と思う。校舎の方に行けたのなら、助けが呼べるかもしれない、そう思いながら、あれ、とふと

考えが過ぎる。

こんな大きな鳥に、どうして誰も気づかない？

え、と思った。そういえばそうだ。こんな大きく、異質な鳥、普通なら誰か気づくはずだ。あの不快な羽の音だって。気づかないのはなんでだ？あれ、じゃあ、

なんで俺は気づけた？

おかしい。おかしすぎる。空から降ってきた少女。異質な鳥に似たもの。そしてその異常に気づかない者。

こんなキャパシティが崩壊するくらい非現実的なことが起こってるのに、それなのに今学校では平然と授業が行われてるし、相変わらず平和な街だし、変わらず世界は回る。

異常すぎる。なんだよこれ。

「あ、れ…、なん、じゃ、ここは…、背景が、移動、してある…」

寝ぼけたような声が不意に後ろから聞こえた。なんだか年寄りが使うような言葉を使う少女に、違和感を感じつつも、おいっ、と対戯はその少女に向かって叫ぶ。

「今、でっかい鳥の化け物に追いかけてんだよ!!」

「およ？へ？え？あれ？なんじゃ、これ？え？」

「なにパニックってんだ！俺が一番このありえねえ状況に困ってんだ！お前知ってんだろなんか！なんか言え！」

「む、なんという乱暴な言葉遣いじゃ！ぬし、私を古くから由緒正しき言霊遣いの名家、万葉家の行く行くは当主となりしこのやどり

になんという乱暴な言葉を使うのじゃ！」

「ああもうそんな言葉言ってる暇あったら後ろ見る後ろ……！」

まったくなんなのじゃ、と言いながらしぶしぶ背負われながら後ろを振り向けば、途端体をぶるりと震わせてきやあつと可愛らしい叫び声をあげながら対戯にしがみついていた。途端に言葉の一つ一つに溢れていた自信に似たような声は、怯えの色を含ませたものに変わる。

「な、なんなのじゃあれは……？とつとつと、鳥かのっ！？あ、あああそうじゃあれは私を攫った憎き鳥！怪鳥江蛾留^{えがるた}侘じゃっ！！あああぬし！もつとはよう走れ！追いつかれてしまっではないか……！」

「無茶言っな！なんだよ偉そうに！お前は姫かなんかか！」

「ううううう、なんじゃなんじゃなんなのじゃあ……こ、このままでは食われてしまっ……」

泣きそうな声で言ってくるやどりと名乗った少女。確かに対戯の足はすでに疲れのためにスピードが遅くなっている。鳥に似た何かはクエーッ……と叫びながら相変わらずのスピードで走る。

「ぬう……仕方ない、一般人相手に気が進まんが使っしかないか、のう……」

ぼそり、とやどりが相変わらず泣きそうな声で何かを呟いた。対戯は特に気にせず、森を掻き分け走る。幸いこの森の中は熟知していた。ただ好きなだけじゃないのだ。どこに障害物になりそうなものがあるのか頭の中にしっかり入っている。以前切れた不良に追い回されたときもここで上手くまいた。あの鳥相手に通用するかはどうかわからないが。

「ああくそ、足は速くてよかったああ……！！！」

「ぬし、ぬし、」

「なん、だよっ……！」

ふ、とやどりが顔を戯対の近くに寄せた。耳元に息が微かにかかる。何だよ、と文句を言おうとした、そのときだった。

「『もつと、速く』」

耳に何かが入り込んだ気がした。声ではない、何かもつと別の力がえ、と聞き返す前に足の力が一瞬抜けた。え、と焦りかけた瞬間、足に変な力が湧き上がった。

「ぬなっ！！？」

『もつと速く』、その言葉通りに走るスピードが格段に速くなった。驚いてる間に、鳥に似た化け物を引き離していく。

呆然となっている戯対の背中中、やった成功じゃっ！とはしゃいだ声をあげる幼女がいた。

「な、なんだよこれっ！？なんでいきなり足が速くなってんだおいっ！？これ俺のせいじゃないぞっ！？」

「なんてことはない、ぬしの体に私が告げたのだ、もつと速く走れ、とな！」

「はあ！？意味わかんねえ！言ったからどうなるってんだよ！」

「ぬっ！？ぬしは『言霊』を知らんと申すのか！？言霊と言うのは言葉による力、声に乗せ力と為すもの、じゃ！常識じゃろっっ！？」

「そんな常識俺の近くにはねーよっ!!」

言霊、とか言葉による力、とか後ろでぎゃんぎゃん騒ぐやどりの言葉を聞き流しながら、対戯は走り続ける。幸いに、偶然に、走る速度が上がったおかげで、鳥に似た何かをなんとか引き離せた。

後ろをちらりと振り返っても、あの派手な色は見えない。森の中ではあの色が目立つ、から、ないと思えばないのだろう。

逃げ切れた、と感じ、微かに息を吐く。このまま校舎のほうへ行こう、さすがに建物の中には入って来れないはず、だ。それから警察に電話して、このやどりと名乗った女の子を引き渡して、それでもうオサラバ、だ。忘れよう。この女の子も、あの鳥も、それで日常の始まりだ。これは夢だった、そう思おう。
速く、速く、はやく。

ばさりと。

「…っ！？ぬし、上じゃー!!」

「…んなっ!？」

迂闊だった。走ることが出来たって鳥は鳥。当たり前のように空を飛ぶ。体より大きなその二対の羽で、人間には出来ないことをやってのける。

鳥の支配せしは空。

それを領域として、生きる。

「これは…やばい、な…」

「や、やややばいとはっ！！？そんな、食われてしまうのかっ！？ああいやじゃああああっ！私はまだ死にとうない、私は万葉家の当主となるべきものぞ！ぬぬう…私の言霊がせめて、物理的な力を持つものならいいのじゃがあああ…！！」

「暴れるな叫ぶな！！だいたいさつきからなんだよ『言霊』って！」

「し、知らんとなっ！？言霊とは、言葉に宿りし力じゃ！それくらいのこと知らんのかこのあほんだらっ！」

「ああああもうつっせえ！！！それよりあれどうすんだよ今にも襲い掛かってきそうだぞ！！」

「ふにやああああっ、助けて葉桜あああああっ！！！！！」
「葉桜って誰だよ…」

限界がきたのか、やどりはとうとう泣き出してしまった。いや、今まで泣いていないほうがすごいかな？と思う。まだまだ子供なはずだ。そう考えれば、この子はまあ、頑張ったのだ。

だからといって、この場がどうにかなるとは言えないが。ちくしょう、ここでまさかのエンドか？ありえねえ。

ありえねえ。

ありえなさすぎる。

今日初めて会ったよく知らない少女と一緒に死ぬ？ふざけんな。なんでこんなところで心中なくちゃいけないんだ。

死にたくない。

死にたくない。

「……ぬし、私を置いて逃げろ」

「……は？」

一瞬意味がわからなかった。

やどりは相変わらず泣いているし、声だって喋り方は偉そうだが、声は弱々しい。

なのに、

「多分、あやつの狙いは私じゃ。私が走れば、やつだって追いかける。ぬしはここまでようやってくれた。もうよい。礼を言う。私を置いて逃げる」

ぐず、と鼻を囁る音が聞こえた。

あーはいはい、狙いはやっぱりこいつだけってことか。ならこいつを置いていけば俺助かるじゃん。

最初からそうすればよかったんだよ、だいたい人助けなんて俺らしくない。

嘘だけついてればいいんだ結局。俺らしいことを俺らしく俺がそうやればいい。

たった、それだけなんだよ、それだけ、そう、それだけ。

「…そうか、ならそうさせてもらっぜ」

びっくり、と確かにやどりは震えた。けれど何も言わない。悲痛な意思を固く貫いている。

馬鹿だな、対戯は思う。馬鹿すぎる。

「……教えてやるよ、やどり。俺のあだ名をな」
「…ふえ？」

「俺はペテン使いさ」

対戯はやどりを背負う力を緩めるところか逆に強める。え？え？とやどりは動揺したように目をぱちくり、とさせる。

さて、と対戯はこちらに狙いを定める鳥の化け物に視線を向けた。

こいつに俺の嘘が通用するか。

なんてことはない、と自分に言い聞かせる。

俺はペテン使いなんだぜ？

皮肉を交えたその名を、嘘つきのその名を、今こそ俺はここに出す。死ぬのは怖い。死にたくない。痛いのだって嫌だ。逃げたい。

なのに体はそうは動かない。後ろに背負った小さな子供を守ろうと動く。

死ななければいい。生きてるなら、いいんだ。

だから、守る。死なないように、死なせないために。

対戯は、空にその羽を広げ、ぎよろりとした目で見つめてくる化け物の鳥を見つめる。

体より大きな羽。発達した足。狙うのはやどり。そしてここは森の中。

見つける。導き出せ。その答えを。どうすればいい。考えろ、考えろ、考えろ。

ペテン使いの名に恥じぬよう。

「…御覧に入れて見せましょう、ペテン使いのその力」
「え……」

優しく、対戯は微笑む。

「騙してやるよ。あの鳥を、な」

Episode 2 怪鳥にペテンを

「ば…ばかか！ぬしはばかか！！」

背負ったやどりが泣きそうな声で、いや実際に泣きながら叫ぶ。

「『言霊遣い』でもないぬしがどう勝つと！？無茶じゃ！はよう私を降ろせ！ぬしのような一般人に守られとうない！！」

「あーはいはい、黙れ黙れ。ってか言霊遣いつてなんだよ…、職業？つたく意味わかんね…だいたい『ぬし』、じゃなくて俺の名前は虚室対戯だっつーの」

「たいぎ…？つてそうではなく！そうではなくて、私が言いたいのは…！」

「うるせー、ガキはおとなしくガキらしくしてればいいんだよ」

「ガキ…っ！？」

ガキではないっ！と怒り出したやどり。はいはい、と対戯は相手をせずに、返事だけをする。

やっぱり子供だな、と少しだけ安心したように息を吐く。

ぎよつとしたのだ。あのとき、『私を置いて逃げる』と言った、あのとき。

驚いたと同時に、恐ろしくもなった。

ほっとけなく、なってしまうくらいには。

「お前はガキだよ」

「なっ！また…っ」

「だから、おとなしく守られとけ」

そう言うと、ふええ？、とやどりは一瞬すごく驚いたような顔を
して、それから恥ずかしそうに両頬を赤くした。

ああ慣れねえ、と対戯は思う。

子供は子供らしくあればいいと思う。けれどそれは自分の見てい
ないところで勝手にやればいい、などとも思う。

勝手に生きて、勝手に笑ってればいい。それを平和というのならそ
うなのだろう。でも、自分が関わる理由がどこにあるという。

こんなの、俺のキャラじゃない。

なのに、この手を離せない、だなんて。

対戯は出来るだけ時間を稼ぐために走っていた。いくら鳥の化け物
が空で自分たちを視界に捕らえていたとして、実際に捕まえなくて
はどうしようもない。

その場合どうなるのか、食われるのか、引き千切られるのか、決ら
れるのか。嫌な想像が頭の中に過ぎつて、それを打ち消すように足
に力を込める。

時折背中からやどりの声が聞こえるが、そんなの気にする余裕なん
てない。

頭の中をフル回転で、自分のすべきことを考えた。

『嘘』。自分の持つ最低で最悪で醜悪で劣悪で、最大の武器。自覚
はしてるからあまり煩く言われたくないけれど、少なくとも最も惨
めな武器。

それが、人助けのために使われるとか。馬鹿みたいだ。そう思いな
がらも、必死に考える。

考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考えて、考え
て、考える。

相手は鳥だ。言葉なんてもちろん通じない。

けれど言葉だけが嘘を作れるわけじゃない。

俺を誰だと思ってる。嘘で紡ぎ嘘で絵を描き嘘で歌い嘘で奏でるペテン使い。

憎まれ嫌われ疎まれたって、嘘を吐き続けて、そんな俺が、鳥くらい騙せないわけがない。

怖がるな。恐がるな。何一つだって畏れるものはない。

お題は揃った。鳥と森とやどり、ここから生み出すものは？

「…やどり、お前、走れるか？」

「へ？」

「耳を貸せ、俺が今から言う内容をしっかり聞け。チャンスは一回。この賭けに乗るか乗らないかはお前次第だ」

「ど、どうということ、じゃ？」

「そういうことだよ。お前の選択で決める。リスクのややある逃げ方、ノールスクの逃げ方、それと、…ハイリスクでの倒し方。お前が望むのを選ぶ。ちなみに走るってのはハイリスクの方だから」

「…倒せる、というのか？」

「わからねえからハイリスクって言ったんだよ。失敗したら終了。勝つか死ぬか。それだけだよ。あー…なんだろう俺。達観しすぎてきたんだけど。今のテンション怖い…、なんかこの状況悪夢に見そうだね。怖くて仕方ねえくせに、なあ」

「対戯…」

「どうする？俺はどれでも構わない。あの鳥むかつくから騙してやりたい。だからなんだっていい」

「…ぬし、は…」

やどりは何かを言いかけたが開いた口を、閉ざした。しばらく黙り込み、考えるように目を瞑る。それから、開く。

おずおずと、とても言いたげに、先ほどの偉そうな態度を引っ込めて、小さく、呟く。

「あの鳥を、倒したい」

対戯は微笑む。

「了解、お姫様」

鳥はクエーツ！！と高く雄叫びをあげながら、空をくるくると旋回する。森の中をその鋭い目で自分が狙うべきものを探す。

万葉家の次期当主となる万葉やどり。それを攫うため鳥はいた。

そして、いざとなったら殺せ、という命令も鳥の中に存在している。それだけを考え鳥は探す。浚うべき、殺すべき、ものを。

他の事を何一つ考えず、ただ自分の遂行すべきことを。

『主人』の言葉に従い、『主人』の『言葉』の意のままに、『主人』の願いの通り、『主人』の望むことを。

それが鳥の化け物の存在する理由なのだ。

怪鳥江蛾留侘えがるたそれがその鳥の名前だった。鳥の姿を為して、鳥ではなき物。怪鳥。

「うわああああああっ！！！！！！！！！！」

びっくり、と自分が狙うべきものの叫び声が甲高く空にまで届く。大きな首をぐるりと回し、その声の出所を探す。

ちようど木々の境目に、微かに見えるその姿。攫え。できなければ殺せ。『主人』の命令が江蛾留侘を動かす。

ばさり、と朱色の羽を大きく広げ、体を下のほうへ向ける。ちょうど斜めになった辺りで、羽を仕舞う。やどりへと真っ直ぐ向かうように。

今度こそ、仕留めるかのように。

羽を仕舞い斜めにしたその体は、重力に従い落ちると共に、空気抵抗を少なくしそのスピードを速くする。

鋭い嘴で狙うように、方向を多少修正しながら風を切りやどりへと向かう。

ちょうど向かった先は、対戯のお気に入りのベンチの近く。攫え、殺せ、攫え、攫え、殺せ、攫え、殺せ、攫え、殺せ、攫え殺せ攫え殺せ攫え殺せ攫え殺せ攫え殺せ攫え殺せ。

「俺流ペテン術うつつうつつ！！！！」口が駄目なら体で行動」！
「」

ベンチの影に、それは、いた。

いきなりの乱入者に鳥の焦点はそちらに合う。ちょうどやどりを追っていた視界の真ん中に立たれて、化け物の鳥の単調な思考回路が混乱する。

一瞬だけ、鳥の体が揺らいだ。対戯はきつ、と鳥を睨みつけながら、その動きを見極める。

「俺流ペテン術、『どんな相手でも観察すべし』！！」

化け物の鳥はやどりを狙ってきた。それはやどり自身も入れている。初めて見たときも鳥はやどりだけを視界に入れて、対戯のことは見向きもしなかった。

つまり自分の存在は鳥にとってどういうものなのか、と考えた。

邪魔な存在？殺すべきもの？必要のない？考えてみたが当てはまらない。それで、考えて考えた末の結論。

鳥にとって自分の存在はないものとされている。

見えているいないの問題じゃなく、鳥にとって対戯はそこらへんの石ころと同様の存在だということ。

つまりどうでもいい。それだけ。

かなりむかつくような結論だが、ちょうどいい、と対戯は思う。

それだったら無理矢理自分の存在を認識させればいい。

石ころだって投げられればそれ相応の反応を人は返す。当たると痛いし、時には傷つく。それに人だって殺せる。

もし眼前に取るに足らないはずのものだったものが、存在を認識すらしていなかったものが現れたら、どうするか。

もちろん、慌てる。

「クエーッ！！」

「黙れええええっ！！！！」

怪鳥江蛾留侘は大きく口を開けて威嚇する。邪魔だ、どけ、消えろ、とでも言うように。

その嘴で対戯を食いちぎらんと言わんばかりに対戯に襲い掛かった。きつと化け物の鳥にとって自分は弱くて脆いものにしか映らないだろう。

だけど言いたい。石ころ舐めんな。

「それでも、喰らええええっ！！！！」

言葉通り、文字通り。その鳥に向かって、投げ込んだ。

取るに足らない路傍の石を。認識すらされない石ころを。

その、大きく開かれた口に向かって。

投げられた石は上手い具合に鳥の口の中に入り込む。その石はがき

ん、と嘴と嘴の間に挟まり、口を閉められなくする。

いきなり起こった不測の事態に、鳥はバランスを崩し、対戯のすぐ横を通り抜けて地面に激突する。

嘴の石を取ろうとするが、取れない。じたばたともがくがぴったり嵌ったそれは少しも動かなかった。

対戯は急いで重いベンチを引きずって、鳥の足の上に倒す。今度は鳥はクエーッ！と叫びながら足もじたばたさせた。

「チェックメイト」

やりきった、とでも言いたげな顔で額の汗を拭う。

石を外そうと地面に嘴を突き刺したり横に振ったりしてる鳥は足のことには無頓着だ。

ダチヨウのように発達している足を無防備に晒しながら、ひたすら自分のしなくてはいけないことのために嘴の石を取ろうとする。

足を封じてしまえばその朱色の翼を羽ばたかせても足に置かれたものが邪魔で飛べない。かといってその翼ではベンチをどかすことさえできない。

「俺流ペテン術、『騙しならぬ騙し討ち』」

完璧だ。やりきった。てか疲れた。すぐくテンションがあがっていったんだな、と自分でも思う。怪物相手に嘘つくとかまじありえねえ。どんだけ頑張ったんだ俺。久々だこんなに疲れたの。怖くて死にそうだったのに一時のテンションまじすごい。意味わからないこの状況でここまで出来るだなんて、ペテン冥利に尽きる。

「…やどりー、そこで何突っ立ってるんだ。さっさと来い。これどうにかしてくれ」

「ど、どうにかと、何を申すのじゃああ！ー！」

木の陰に隠れて怯えている幼女一名。

「そ、そこでまだ動いておるのじゃぞっ！？怖いに決まっておろう
！」

「あーまあそりやそうだよなあ……でも俺もどうすりやいいかわかんねえんだ。え、なに、処理しろってか？無理無理。」

「ふにゃ あああ葉桜 あああつ！！！」

だから誰なんだその葉桜って。

そうやって泣いて叫んでもその葉桜さん？とやらは来ない、

「やどりさまああああああっ……！！！！！！！！！」

⋮

「つてか来たあああああつ！！！！？」

声が聞こえたがぶんぶん、と周りを見ても人影が見当たらない。え、あれ幻聴？と対戯は思ったが、不意に嫌な予感がして、上をむけば、そこには黒髪でポニーテールの女が。

「空から降ってくるの流行ってんのかよっ!？」

思わず突っ込んだ。いや突っ込むべきだよなこれ。

内申パニクリながら空から落ちてきた女を見る。女は対戯の上に落ちてくるでもなくすたつ、と優雅に地面に着地する。

それから頭上で括られた長い黒髪をふあさつとかきあげながら立ち

上がる。どうやら年上のように、大人のような雰囲気が漂っている。ちなみに言つと美人だ。

首元まである黒いシャツにジーンズを履き、背中には長い棒らしきものを布に包み背負っている。

どうにも落ち着いたような雰囲気がある人で、それで…、

「やどりさまああああこの葉桜、心配で心配で…ああああああ怪我をしていらつしやるのですね、なんていうことを…やどり様の美しくも柔らかである肌を傷つけるなんてなんということでしょうこの葉桜がいながらにしてこんなことになるうとはああああ真に申し訳が立ちません現当主様になんと言えいいのかこの葉桜もう腹を搔つ捌いて…！！！」

…うん、幻想抱いてたよ。もちろん、さっきあんなに叫びながら落ちてきた人が落ち着いた雰囲気があるわけじゃないか。気づいてた、けどなんだよこれ。キャラが痛すぎる。

ふっと暗い笑みを浮かべながら対戯はテンションの違いすぎる二人を見つめる。

葉桜というらしい女は叫びながらやどりに掴み掛からん勢いで半泣きで捲くし立てる。一方のやどりはやどりが来てくれたことに喜びながら安心しつつも若干引いていた。

「せ…切腹はしなくてよい。そ、それで葉桜、頼みがあるのじゃが…、」

「はいっ…！この葉桜、やどり様のためならなんなりと…！」

「あれ、どうにかしてほしいんじゃ」

あれとは？と振り向いて、初めて気づいたような顔で化け物の鳥を見た。

「こ、これは怪鳥江蛾留侘！！？そうか、これがやどり様を攫ったんですね……！！ああこの憎き鳥の分際でやどり様に触れるとはいったいどういう見で……んっ！？」

そこで葉桜の視線が対戯に向いた。いきなりのことでびくつと肩を震わす。

「あなたですか」

「へ？」

「やどり様を攫ったのはあなたですかって聞いてんだよこの野郎！！！」

「まさかの予想外に俺巻き込まれたっ！！？」

いやいやいやいや何言ってくれちゃってんのこの人、と慌てていると葉桜は背中の中の長い棒をその背中から降ろし、布を取った。そこから出てくるのは鋭利な刃。

なきなた
薙刀。

それを、対戯に向けてくる。
ええええ。

「ストップストップ！！俺何もしてねーから！！人攫いとかしてねえし、幼女に興味がある危険な性癖もってねえから！！」

「何を！！やどり様に対してそういう目で見れないというのか！！」
「お前怒ってるところ違くなってる！？」

完全に周りが見えなくなってる葉桜に、対戯は後ずさりながらも説明しようとするが、聞き入れてもらえない。

先ほども死ぬかどうかの瀬戸際だったのに、今もそんな状況に陥っている。今日は厄日か？と泣きたくなる。

「ちょ…、葉桜！…！」

「お下がりくださいやどり様！！この葉桜が、この不埒な悪党をぶった切ってやりましょう！！」

やどりの言葉も聞かず、間違った敬語を使いながら薙刀の刃を向けてくる葉桜。え、これ俺ピンチじゃね？とか思いつつも、体が動かない。

というか、むかついてくる。

命賭けて鳥を騙しぬいてやったと思ったなら今度はやどりの従者っぽいのか？冗談じゃねえ。

まあいいか。

自分本位の行動がそもそのキャラだ。遠慮することはない。

「あ…のさあ、あんたって馬鹿？」

「は？」

人助けなんて柄にもないことしたばかりに刃なんて向けられてさ。これでも危険だったんだよ。それなのになんで怒られる必要があるって憎まれる必要があつて殺される必要があるわけ？

くだらなくてうざりたいし面倒くさい。

確かに俺は嫌われるべき人間だけどさ、これでも必死に守ろうとしてたんだぜ？子供の癖に大人ぶってるあの小さな少女を。

嫌われるくらいなら構わねえさ、でもよ。

「…もし、それで俺を刺したとして、その光景をやどりに見せる気か？」

「っ！！？」

「やどり様やどり様言ってるくせにお前はちつとも何一つ考えていないな。怪我とか攫われたとかその事ばかり連呼するくせに肝心なことはちつともだ。少しは思わないのか？攫われて怯えただろう

が外れていたんだ。

やばいどうするか。いつもはぎりぎりで止めてたりするけれど、今回のそれはそれも出来てない。

うつわー…、どうするか。

「わ、わたし、は…わたしは、そんな…！そんなんじゃない…！！！」

「あー…わかった、なら早くやどりのところに行つてやれ。それとあの鳥どうにかしてくれ」

「わた…しは、わたしは…！そんな、わたし、は…！」

「あ、やべ、聞いてないわ、これ」

微かに沸き起こる罪悪感。さすがに女を追いつめて喜ぶようなサデイストではない。むしろ紳士的でありたいと思つてゐる。…嘘だけどこれは本気でぶち切れてその薙刀で切られるんじゃないか、と思うとなんだか気分が沈む。怖いというより、さっきまで上がつていたテンションが下がる感じがした。どうするか。

「…う、」

「う？」

「うわああああああんっ！！！！」

……え？

……えええ？

大人っぽかった雰囲気打ち消し、葉桜は耐え切れなくなつたとも言いたげに酷く大きな声を上げて泣き始めた。

えええええ、これ、かなり予想外なんだけど。

「すみませんすびばせんんん、わ、わだじのぜいでええええっ！

「!!」

「あ、あんた大人の癖になに泣いてんだっ!!」

「わだじまだじゅうざんざいでずううっ」

「まさかの俺より年下と言う新事実っ!!?」

嘘だっ!!?こんなさつきまで大人の色气的なのを出していたのにつ
!?身長だって俺より高かったはずなのに…、ちくしょう。

「あ、あの…葉桜…」

いつの間にかこっちへと来ていたやどりが、対戯の足にしがみ付き
ながら泣き喚く見た目年齢20歳の13歳に対しておずおずと言う。

「あのな、来てくれて私は嬉しかったぞ?だから、その…泣かない
で、欲しい」

「やどり…ざま…?」

「葉桜は、美人だから、笑ってて、ほしい…!!」

顔を真っ赤にして、例のあの偉そうな態度をおくびにも見せずに葉
桜にそう言うやどり。

ああこの子根はいい子なんだな…、と対戯はほのぼのとした気分にな
った。

……ん、でも、

「ってかお前ら何者なんだよ…」

従者みたいなのを引っさげた次期当主とかなんとか言うやどり。

背中に薙刀を背負った20歳に見える13歳。

そして今もなおじたばたとしてる化け物の鳥。

そろそろ誰か説明してくれ、と、抱き合っているやどりと葉桜を半

目で眺めた。

Episode 3 言葉とその力

「真に、申し訳ございませんでした…」

そう言うて、正座の状態で地面に手をつき、深々と頭を下げる葉桜。

「いや、そういうのいいから…」

そしてそれをうんざりした顔で止める対戯。

傍から見れば高校生相手に大人が何やってるのだという話だがいかんせんさつきまでの内容がアレなのだ。まとめると、幼女が落ちてきて化け物の鳥もやってきて倒したら見た目20歳の13歳が降ってきて…。

あやべ、意味わかんねえ。

それから、いきなり切れて、薙刀をこっちに向けてきた葉桜に、対戯が逆に切れた拳句、大泣きされ、この状況に移る。

「やどり様のお命を助けて頂いたのにそうとも知らず私はなんて失礼なことをしてしまったのでしょうかああもうこうなったらこの腹搔っ捌いて…！」

「癖みたいに切腹しようとするなっ！？俺性格良い方じゃないけどそこまで極悪でもねえからっ…！」

「ではどうすればいいというのですか…！」

「どうもしなくていいから落ち着けええっ…！！！」

めんどくせえ！！こいつすぐめんどくせえ！！

説明を求めようとしても目の前の女は本気で天パっているようだっ

た。責任取るための切腹？そんなグロいもの見せるな！！対戯は頭が痛くなってくるのを感じた。
もうやだなにこれ。

いつその帰ればいいと思うのだが、どうにも説明をしてくれないと気持ちが悪い。

あの化け物の鳥のことや、やどりのこと。どうにもおかしすぎるこの状況。

「なーやどりー。これどうにかしてくれよ…」

「は、葉桜は、真面目すぎて時折爆発するんじゃない？…そんなときになったら、私でも手がつけられん」

「まじかよ…」

これじゃあ話が進まないじゃないか、とこちらの方が泣きなくなつた。

確かに先ほどはイラついた。いきなり刃物を向けられるとか、はあ？意味わかんねえ、ふざけんな、とか思ったが、さすがにそれを引きずる程でもない。

…殺されそうになつたくせに引きずらない対戯も対戯なのだが。だから別にもう謝られなくても構わないし、逆にそこまでされるのも居心地が悪い。

真面目って難儀だな、とため息を吐く。

ん？さてよ、と対戯は思う。逆にこれを利用すればいいんじゃないか？

「…つまり、お前は何か罪滅ぼしをしたい、というわけか？」

「…！！はい！！そうでございます」

いよっしゃビンゴオオオオオッ！！！！内申でガッツポーズをとりながら、対戯はさらに言葉を紡ぐ。

「俺としてはもうどうだって構わないからさ、正直何もなくていいんだけど、お前がそこまで何かしたいというんだったら俺も考えなくはないな」

「ほ、本当でございますかつ!!」

「ああああ、もちろん。やっぱり罪悪感つてのは苦しいものだからな。わかるさもちろん。だから俺は別になんだって構わない…けれど、考えてみるとやっぱりどうしても聞きたいことがあるんだよな」

「はい!! 私でよろしければなんでも!!」

やったかかった。隣でやどりがジト目でこちらを見てくるのは気のせいだとしよう。

かなり嫌な言い回しだったのに葉桜は心底キラキラした目で対戯を見てくる。そこで確信した。

真面目だけじゃなく異常に純粹だ、この子。

「まず、あの鳥の化け物はなんだ？」

未だ放置され続けてる化け物の鳥を指差しながら対戯は尋ねる。鳥はもう疲れたようでぐったりと地面にへばりついていた。

ああ、と今更思い出したかのような声を上げる葉桜。

「はい、あれは怪鳥江蛾留侘えがるとです。古より言霊遣いいにしえことだまの従者として付き従ってきたものなのです。ですが最近はめつきり数も少なくなってきました。どうやらこいつはやどり様を狙うものの仕業で、無理矢理言霊で思考回路を遮断し、やどり様のことを考えるようにさせてしまい、その上での命令、でしょうね。あ、あなたにも見えたのはやどり様に触れたからでしょうやどり様にかかっていた人から認識させなくなる言霊の影響を受け、あの江蛾留侘と同調してしまっただけですね」

「は、おい、ちょっと、ちょっと待て」

今なんて言った？はあ？言霊ちょっと待て、確かにそれはやどりも言っていたけども、どういうことだ。今、真面目な話だよな？

「も、もしかして厨二病患者とか…？」

「はい？それはなんの病気でしょうか？」

「いや、なんでもない、はは…。あ、あのさ、その…言霊って、なんだ？」

「知らないんですか？言霊は、言葉に宿る力。発した言葉通りに現実とする力、ですよ？」

「いやいやいやいや、待て、待てよ、なんだそのファンタジー？いやファンタジーと言えるのか？っていうか何だよ、言霊って。」

「へ？ん…なんていうか、私たちは『言霊遣い』ですから、使えて何もおかしくはありませんよ？」

「っ…！？」

どうにも嘘をついているようにも見えなかった。かといって、頭がおかしくなったようにも見えない。

あくまで普通に普通に日常的に、葉桜は話している。

どういうことだ？言霊？いや、ちょっと待て、思い出せ。そうだ、あの時も…

『もつと速く』

「……………っ！！！！！！？」

マジか？マジでか？確かにあの言葉の後に、俺の足は不自然に速くなった。

偶然でもなんでもなく、あの言葉のせいでは？

言霊？

「…お前たちは…何者だ？」

「何言ってるんですか？言ったでしょう？」

「言霊遣いですよ」

「っ……………！！！！！！！！！！」

まじか？まじなのか？これを俺は信じるべきなのか？

さも当たり前のように言ってくる葉桜。自分たちは言霊遣いだと言霊を遣うものだ。

ありえない。この現代にそんな変な能力的なものがあるのか？けれど、否定したくとも心当たりがありすぎる。

「対戯、どうかしたのか？」

「やどり…、俺のキャパシティそろそろダウンしそつだよ…」

「きゃ、きゃぱしていい？」

「ええと、言霊遣い、ですか…、あの、それ、どういう職業ですか」

「…なぜに敬語になるのじゃ？職業と言うよりは…言霊が使える者を言つのじゃが」

「スキル系統かよおい」

すぎる？と首を傾げるやどりをうさぎみたいだな、とほのぼのと思いつつも、現実的にありえない話のせいで、思考が拡散し、現実逃避の方向に逃げ込む。

超能力とか、霊能力とか、それに近い言霊遣い。

ありえねえ、と頭の中で繰り返し呟く、が、冷静な思考がこれは本

当のことだ、と静かに答えを出している。

認めなくてはいけない。聞いたのは対戯自身なのだから。

はぁー、と大袈裟なため息をひとつつき、頭をがしがしとかく。深く考えないようにしよう。どうせもう俺とは関係なくなるんだ。

「まあ、信じるにしても、なんか頭の中ふわふわしてるよ…、ところでその言霊遣いってどうやったらなれるもんなんだ？やっぱ血筋？みたいなもんか？」

「ぬ？違うぞ、本来人間と言うものはもともと言霊というものが使えるものじゃ」

「へ、どういことだ？」

「例えば、『頑張れ』と言うと、頑張りがなくなる。『ありがとう』と言われれば嬉しくなる。『ごめんなさい』と言えば許したくなる。これだつてももとは言霊の力じゃ。優しい心は言葉にだつて乗る。対戯の言う嘘だつて言うなれば言霊と似ているようなもんじゃ。ただ、言霊と言う概念を自覚しておれば、私の言ったように肉体を強化することや、物理的に何かをしたりすることも可能じゃ」

「物理的？」

「炎を出したり水を出したり…、」

「それもはや魔術じゃね？」

そう言うことやどりは魔術に例えるなぞ心外じゃ、とでも言うように頬つぺたを膨らました。

失礼に値するあたのか。基準がわからない。

「…ん、ちょっと待て、概念を理解すればなんか、そういう変なの使えるんだよな」

「まあそうじゃな。言霊の存在を理解してしまえば、言霊遣いとして資質があるものは使えるぞ？」

「俺概念理解しちゃってね？」

.....。

「そっぴやそうじゃな」

「ですな」

「予想以上の反応の薄さっ!？」

「まあ、かといって一般人にはそう使えるものでもないしか。余程のことが無い限り言霊を発動させたり使いこなすことなどありえん。安心しててもいいぞ？」

「まあ、言霊という概念と言うものを知らなくても、最初から素質ある人は無自覚無意識に使えたりしますから…、そういうのも無いらしいし大丈夫でしょう」

「…んなら、いいんだけどさ」

どことなく腑に落ちない点があるが、まあいいでしょう。さっき決めただろ、深く考えるなって。

自分に言霊などと言うものが出来るとも思えないし、ただのペテン使いでしかない俺にはそれを使う理由も無い。

一般人なのだから。自分は。

「…ところであの鳥はどうすんだ？」

「ああ、江蟻留侘は万葉家に持ち帰り、刻まれた言霊を解除します。操られていただけなので、元を正せばちゃんと気の優しい鳥になりますよ」

「あのカラーで気の良い鳥、か…、まあいいけど。ついでに聞くけど、万葉家…って？」

「万葉家はやどり様の実家…、言霊遣いとしての名家です。やどり様はその次期当主で…、そのせいで狙われることも多々ありますが…、あ、ちなみに私は楠木葉桜くすのきはなと申します。楠木家は代々万葉家に仕える身なのです」

「いわゆるぼ、ぼでーがーど、だなー！」
「ボディーガードっていいたいのかそれ」

ああもうなんだかどつと疲れた、気がする。

頭の中がパンクしそうだ。聞いた量じゃない、その内容のせいで、思考が回らなくなる。

言霊。

ああもう意味わかんねえ。わかるけどわかんねえ。

ふらふらと対戯は近くの木に寄りかかる。それから腕を組んでぎゅつと目を閉じた。

整理しようと思う。まずは言霊の存在。これは実際に体験した上で聞いたのだから信じるほかない。疑いたくても疑う理由も無い。非科学的だ、と切り捨てることも出来ない。

現実を起こっている。これは信じる以前の問題なのかもしれない。

あの鳥だって、その言霊遣いのことを考えれば、そうおかしくないことなのかもしれない。だって言葉で何かが動くらしいあいづらの世界の中にいたって不自然でもなんでもない。非現実的なことに非現実なことは、同じでなくとも混ざり合わないわけでもない。

理解しなくてはいけない。そうだ、理解しろ、それから。

全て忘れてしまえば良い。

「あー、もう大体わかった。もういいだろ、帰れ」

「帰れ：！？いえ、私はまだ：！！」

「罪滅ぼし的なのは十分だから。俺はもうだいぶ満足したよ。やどり怪我してるんだろ？帰って治してやれ」

精一杯の、人のよさそうな笑みを浮かべてみる。すると葉桜は瞳を潤ませて、酷く感謝したような顔を浮かべてきた。

対戯は内心でたじろぐ。先ほど酷いことを言ったという自覚はあるが、目の前の少女はそれを自覚しているのだろうか。純粹すぎるの

は少し恐ろしい。

嘘つきを信じてもいいことは何も無いのに。

「あ、あの、対戯……」

「ん、どうした？」

「いや、その……ありがとう、な」

「っ、」

やどりは柔らかに微笑んで、そう、言った。

「……うん」

対戯はつい曖昧な返事を返す。やどりは訝しげな顔をしたが、すぐに笑顔に戻り、葉桜に行こうか、と手を取りながら背を向けた。葉桜ははい、と笑いかけながら、鳥のほうに近寄り、なにやらぶつぶつと呟いている。それからベンチをどかし、嘴に挟まった石を取る。すると鳥はばたばたと羽ばたきながら、やどりには見向きもしないで飛んで行ってしまった。

それから二人は歩き出す。ときたま振り返りながら手を振るのを、対戯はぼーっとした目で見ていた。機械的な動作で振り返す。

やどりたちの姿が見えなくなるまで、対戯は立ち尽くしていた。先ほどの台詞を、頭に反響させながら。

先ほどまでの騒がしさは消え、元々の森の静寂さが戻る。

「……また、ありがとうって、言われた……」

ぼつり、と零れるように呟く。

二回目だ。今日代夜にだって言われた。それなのになんだろっ、この違和感。

頭に不愉快な反響音と共に繰り返し再生される、その声がなぜか頭

の中にしつこく留まり続ける。
たった一言なだけなのに。

「なんか気持ち悪い…」

さっさと全部忘れてしまおう。頭をがしとかきながらそう決める。自分には自分の日常があるのだ。今日たまたま介入してしまっただけで、本来ならば知ることなかった立ち位置なのだ。

知るだけ知って後は忘れる。無かったことにしてしまう。卑怯だろうか。でも、どうだっていい。俺の世界は俺だけのもの。そう、それだけなんだ。

+++++

「へえ、なるほど…虚室対戯、ねえ」

見知らぬ女が対戯を屋上から見下ろしていた。大人として成熟した色気の漂う風貌の女は、面白いものでも見るように口元を歪めてにやり、と笑う。かつ、と革靴の音を響かせてくるりと背を向け歩き出す。

「いいもん見つけた。あれは面白い。対戯…、大疑ねえ、良い名前だ」

あれ欲しいかもなあ、とくつくつと喉を震わせ笑う。細められたサングラスの奥の眼には怪しげな色と共に鋭さを持った何かの暗い光

が紛れ込んでいた。

「嘘つき嘘吐き嘘憑き…嘘は憑いてまわる。過去も未来も現在でさえ。それをほぼ才能でやってみせる、…面白い。面白い面白い面白い。あれ、買えないかな。あたしだったら作り上げてあげれるのに」

傍から見れば意味不明な言葉を口から吐き出して、またにやり、と笑う。

「作りあがっていくというのも、それもまた一興、か」

そう言った顔は、酷く楽しそうで、ぎらついた瞳を隠そうとせず、懐からタバコを取り出して、火を、つけた。

+++++

「言霊？」

帰り道に言霊って何かわかるか、と聞くといきなりどうしたの、と代夜は不思議そうな顔をした。

まだ幼さが残る顔ですんな表情をされると、同い年かたまにわからなくなる。

「いやいや、別になんでもないよ、ただちょっと聞きたかっただけ」

下手に嘘をつくとその親友は簡単に見破ってしまうので、言葉を濁

すことで踏み込ませなくする。

たまにこれ心読んでるんじゃない？と思うくらい鋭いときがあるが、こうすればその鋭さのあまり踏み込めない事情だと特に聞いてこない。

そんな代夜を内心ではすごいな、と素直に思っていた。

案の定、多少ジト目で見つめてきたくらいで、何も聞かなかった。

「言霊とは、日本において言葉に宿ると信じられた霊的な力のこと。言の魂と書いて言魂とも書く。声に出した言葉が現実の事象に対して何らかの影響を与えると信じられ、良い言葉を発すると良い事が起こり、不吉な言葉を発すると凶事が起こるとされ、祝詞を奏上する時には絶対に誤読がないように注意された。結婚式などでの忌み言葉も言霊の思想に基づくものである。日本は言魂の力によって幸せがもたらされる国「言霊の幸はふ国」とされた。…以上」

「さすが人間辞書。いや、辞書人間？」

「どっちでもいいよ…」

「いやいやお前記憶力もう異常だぞ？なのにテストじゃわざと悪い点取るからな。お前なら満点も楽勝だったのに」

「えらく僕を褒めるね…、それにご機嫌だ。いいことでもあったの？」

「…は？ご、ご機嫌？俺が？」

「そうそう。なんだか嬉しそう。そうでなきゃ僕を褒めないよ。…あれ？なんか自分で言って悲しくなってきたんだけど」

うーん、と悩みだした代夜を尻目に対戯は考え込んだ。

ご機嫌？嬉しそう？どうして？思い当たる節といえば先ほどの言霊遣いやらなんやらのことだけど、そこに嬉しいことなんてあったか？対戯は本気でわからなさそうに首を傾げる。

幼女が降ってきて、変な怪物がやってきて、戦って、倒して、そしてまた変な女が降ってきた。あれ、おかしい。いいことなんて一

つもない。

…やっぱり機嫌よくないんじゃない？

「対戯はさー天邪鬼だかねー」

「…は、また言うか。いいかげんやめろそう言つの」

「ツンデレのがいい？」

「……天邪鬼で」

「天邪鬼はねー、本心とは逆のほうを言っちゃう妖怪なんだよ」

「知ってるけど…は？俺別にそんなことしてないぞ？」

「対戯はねー悪いことに気持ち的にも嬉しいはずのことを嫌なことだと考えちゃうんだよねー」

「どういうこと、だ？」

「さらに自覚なし。もう悲しすぎるよなんかー」

「はあ？」

意味わかんねえ殴るぞお前、と睨みつけながら言つと、きゃーこわーい、などと茶化された。

へらへら笑って代夜は謝る。が、嘘だ、とか冗談だ、とかは言わない。対戯はわかっていた。こいつは正直なだけ、と。

正直者は本当のことしか言わない。ただ言えない事は隠すだけだ。その分代夜は自分とは正反对だ、と思う。

なんだかむかついたからばかり、と対戯は代夜の頭を殴りつけた。いったあ、と情けない声を上げる代夜。

ふん、と対戯は怒ったような顔で代夜より先に進み始める。待ってよあ、と弱々しい声が後ろから降ってくるが、無視だ無視、と振り向かず歩いた。

そんな時、だった。

ばたん、と何か倒れる音が対戯の耳に聞こえた。思わず振り返ると、

そこで、なぜか代夜が倒れていた。

「…は？」

転んだのか、と思いきや、なぜか起き上がらない。

どこか調子が悪かったのか、と慌てて駆け寄ろうとしたときだ。

「『近づくな』」

声は違うはずなのに、どこかで聞いた響きだと、思った。
瞬間、体はがちり、と鎖で雁字搦めで縛られたかのように動かなくなる。

「っ…!？」

この感覚に、どこか、覚えがあった。
体の内部に違和感。どこかがぎち、と締め付けられる。動けない。
足も、手も。動くのは口だけ。
これ、は。

「お前だな？俺の江蛾留侘を邪魔しちやってくれたのは」

口調は軽いのに粘着質を纏わりつかせた声で、対戯の目の前に現れたのは、金髪に、顎に髭を生やしたパツとみて柄の悪そうな男。口調とのそのギャップに一瞬背筋が凍った。

にこにこと口元だけで笑いながら、ステップのように足で軽く跳ねながらやってくるそいつは、得体の知れないもののような気がする。

「困るんだな、勝手に邪魔してくれちゃあ。せつかく上手い具合に
いったのに、わざわざ俺が来なくちゃなくなっただろう？ど
う、責任、とつてくれるんだ？」

やばい、これはやばい、本気でやばい。頭の中の警報がフル稼働で
鳴り続ける。一步一步近づいてく男は、時計の針のように力チコチ、
とカウントダウンをしているようだ。

もちろん向かうのは死。

なんだよこれ、俺また命の危機？とふざけて考えてみる、けれど笑
えない。

どうするんだ、時間を稼げ、俺。相手の動きを、少しでも、

だめだ、無理だ、そんなの、こんな、状態で、

もう無理だ、このまま殺されるんだ。そう、思った、対戯が本気で
そう思った、ときだった。

「うあああああつ！！！」

だん、と男の体のバランスが崩れる。倒れてたはずの代夜が男に体
当たりを食らわせていた。

対戯は半ば呆然としながらその光景を眺める。

「対戯、逃げよっ！！こいつなんかやばい！！」

そういつて代夜は大戯の腕を掴み、駆け出す。いとも簡単に体は動
いた。

どうして、と思う。なんで、動くんだ？走りながら頭をフル回転
で動かす。

言霊であの男がやったのは体を固めたのではなく動かなくさせると
いうことだったら？

つまり一時的に体の動きを止めるが、それは自分の意思で動けなく

するだけであって第三者による何かの衝撃で動けるようになるのではないことなら。

「お、前倒れてたんじゃっ…!？」

「なんか頭にぶつけられて倒れたけど気を失ってない!!ところであのヤバイ人誰!?知り合い!?またなんか変な嘘ついてちよつかいかけたのっ!？」

「んなことしてねえよ!俺だって初対面だつての!!」

気を失ってなかった?はて、と思う。倒れただけならあの言霊の声が聞こえていたはずだ。そのせいで動けなくなつて、ここまで駆け回ることなんてできなかったんじゃ。

もしかして、あの言霊は対象を設定しないとできないんじゃ?そう、ふと思う。標準を合わせるように設定しなければ、言霊の効果を相手に浴びせることができない。現に代夜は動いていた。

それに代夜に対しては頭を殴って気絶させたということは『言霊』と言う存在を、先ほど知った俺にはともかく、一般人の代夜に対してはあまり知られなくなつた、ということ?

考える。この現状を打破する方法を。あいつは追ってくる。どうすればいい?

どうすれば、いい?

「『速度を上げ突き抜ける』」

がくん、と代夜の体が揺らいだ。

いつの間にか代夜を対戯が引つ張る形になつていたので、思わず自身もバランスが崩れる。

「……え？」

掠れた代夜の声が、ただ疑問の音を小さく漏らした。
世界がスローモーションのように崩れていく。目に映るのは、地面
へと倒れていく、代夜の体と、
赤い、鮮血。

「し、ろや？」

わからない。意味が、なにも、わからない。
崩れてく風景がいやに現実味を帯びている。嘘だ。全部これは嘘な
んだ。そうだろ？そうじゃなきゃ、なんなんだ。警報が、鳴り止ま
ない。危険、危険だと。
崩壊、後悔、崩れて、崩れて、崩れて、何も、そんな、嘘だ、こん
なの、壊れて、壊れ、て。

「あ、ははははははははっ！！！！当たっちゃったな、簡単に人って
死ぬもんなあ？パチンコ玉でこれだ」

なぜ男は笑っているのだろうか。人が倒れたのに。血を流している
のに。

今にも、死んでしまいそうだった。なのに、どうして、平然として
いられるのか。

警報が、アラームが、頭の中に響くのが止まない。

「たい、ぎ…、」

弱々しい声が、代夜の口から漏れるように溢れる。

「っあ、しろや…、」

「はや、く、」

「え？」

「はや、く、に、げて…」

がん、と、対戯の頭の中の警報が、叩き壊される気がした。男の笑い声と代夜の口から漏れる今にも途絶えそうな息。狂ってる。こんなの、おかしい。

こんなの、間違ってる。

「あ、」

こんな風に、回る世界も、

「ああ、」

それを受け入れてる奴らも、

「あああ、」

それを日常と、ごまかしてきた、自分も、

「ああああ、」

全部、

「あああああ、」

間違ってる。

「あああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!」

だったらもう、こんなもの、壊してしまえばいいか。

叫びを止めた対戯が、ふらふらと、前へと歩き出す。

面白そうに口元を歪ませて笑っていた男は、不意に気づく。怒りや悲しみよりも先に明確な、殺意を目の前の少年が出していることに。

「なんだ、その顔は、お友達に穴あいてそんなにショックだった？
そうかごめんごめん。でもさ、彼のほうが悪くないか？俺の邪魔を
して、こんな……こと……、」

喋っていた口が不意に、止まる。

ぱちり、と男は対戯を見た。それから顔を歪ませる。

眼は虚ろながらもひたすら男を映し出し、無表情ながらも、殺意の
溢れ出すその姿。

普通の高校生には出せるものとは到底思えなかった。そこまでの
友人が大事だったのか？とつい考える。

男にとって、そんなものはどうだって良かったのだが。

「代夜は、巻き込まれるはずじゃ、なかった」
「ん？」

「俺だけなら、まだ、良かった、けど、お前は、間違えた」

かつり、と一歩踏み出す。

それからゆっくりと、対戯は口を開いた。

Episode 4 繋ぐ縁

端渡代夜という少年は、良くも悪くも、対戯とは正反対な人間だった。

嘘つきと正直者。これだけの違い、これだけの大きな違い。

正反対の癖に、居心地が良かった。逆の存在の癖に、酷く落ち着くその場所。親友と名づけるべきなのか、これまで唯一、対戯が守らなくちゃいけないと、思ったその人。

背筋をぴしつとして歩くくせに、つついたらすぐに壊れてしまいそうで、酷い言葉を吐けばすぐ泣いてしまいそうな顔のくせに、いくら、どんな言葉を吐いても、彼は顔を少しも歪めることなく、飄々と笑ってみせる。

ある意味それは、対戯にとって必要な存在だった。彼だけは何をしただって一変わることはない絶対的に、対戯にとっ一存在しなくてはならないものだったのだ。

だから、今のこの状況を対戯は、理解してはいけないと思っていた。唯一絶対、変わることのないと断言できる目の前の少年から、鮮血が溢れ出し、その存在の終焉を迎えることなど、あつてはならないからだ。

そう、あつてはならない。

けっして、あつては、ならない。

「ははは、なんでそんなにキレてるんだ？おいおい、今は自分の命の方が危ないんだぞ？まったく、そんなにお友達ゴツゴが楽しいわけか？近頃のガキにしたらいい方なのか？」

「……」

「まあなんだっていいさ、こちらとも本来の目的があるんでね。お前が助けた女の子を俺たちのところへ持ってこなくちゃいけないわ

けよ、わかる？お前のせいで台無しになった計画が、さ」

「……」

「だんまり決め込むわけ？まあいいさ。俺たちはお前が邪魔だって踏んでる。なんたつて言霊遣いでもないお前がああ江蛾留侘を倒したつて話、かなり話題になつてゐるんだよ。これでもし、あいつがお前に興味か何かを持って……いや、これから死ぬ奴に聞かせる話じゃないな」

「……」

「最後まで何も言わないのか？ふん、なら、せめていい悲鳴でも聞かせてくれよ、俺だつてすぐ向かわなくちゃいけないからな。恐怖のどん底にでも落ちて悶えながら、死ぬよ」

「……が」

「……ん、」

「格下が」

ぴたり、と男の動きが止まる。

対戯の口から、温度のない言葉が次々と溢れ出す。

「弱者には強気で戦いに望むか、典型的な下っ端だよなお前。どうせならさっきのパチンコ玉で俺たちが気づかれないうちに殺せばよかったんだ、なのにお前はわざわざ俺の前に出てきた。それからグダグダと喋りやがつて、自分が優位に立つてゐるからつてそんなに余裕を振りかざしてさ、そんなの俺は見てもなにもすごいと思わねえよ、冗談じゃねえ。それほどまでに自分の力を誇示したいか、格下風情が」

「……なに、言つてんだ？そんなこと言える状か？」

「黙れ。代夜、……関係ない一般人巻き込んだ拳句どういふつもりだよ。狙うのが俺だけならまだ良かった。それなら、まだ良かった。むかつくけど、イラつくけど、俺だけなら、まだ、良かったんだよ」

「はっ、…意味わからない、ね。それはお前の責任でもないといえるのか？」

「ああ俺のせいだ。俺が変なことに関わったからこうなった。俺のキャラじゃないことをやって、俺は何やってたんだろうな。…でも、こいつは、代夜は、何も関係なかった。俺一人だけ、関わったのに、なんで代夜まで巻き込まれる必要があるんだよ、どうして、」

「ごちゃごちゃうえせえな…、そんなにお友達と一緒にいたいんだったら、すぐに俺が送ってやるよ。あの世にだけどな」

口元をひくひくとさせながら、あくまで余裕の姿を変えようとはしない男。だけれど対戯の言葉はかなり男の怒りの線に触れていた。けれどそれをおくびにも見せずに、男はにやり、と笑ってみせる。今すぐにでも殺してしまいたい衝動に駆られていたが、それでは面白くない、と頭の中で誰かが囁いた。

恐怖でひたすら甚振ってから、残虐な方法で殺してしまおうと。

「くだらない」

「…ああ？」

「お前の攻撃なんか、俺に効くもんか」

「本気で言ってるのか？それは」

「本気で思って何が悪い？」

「…馬鹿が」

男はポケットから小さなパチンコ玉を取り出す。それを空に放り投げて、掴む。

最初は肩を狙ってやろう。次は腕、足、腹、だ。

痛みに耐え切れなくなり、自分に泣きながら跪いて許しを懇願してくれば、その頭を踏みつけてやろう。

そう考えればあまりの愉悦に口元がにやつく。

パチンコ玉の標準を対戯に合わせた。それからぴん、と弾く。

「『真つ直ぐに突き抜ける』」

力と成りし人の言葉。残酷な人間は冷たく人を文字通り『傷つける』言葉を吐く。

何も知らず、何もわからず、ある意味それはもつとも純粹な感情。だからこそ、ここまで非道になれる。

放たれたパチンコ玉は真つ直ぐ対戯を貫くために発射され、勢いよく向かう。

このままでは代夜と同じように、体に撃ち込まれてしまうだろう。けれど対戯は避けようとしなかった。ただ、すべて抜け落ちてしまったように、ぶらりと虚ろな目のままでいるだけ。

けれど、ただ、ぽすん、と。

「……………え？」

パチンコ玉が対戯に当たっても、貫かれることも無く、鮮血を溢れさせることも無く、ただ重力に従って、落ちた、だけ。

「…は？」

慌てて男はポケットからパチンコ玉を取り出し、対戯に向かって言葉をつきながら投げつける、が、何も先ほどと変わらず、ぽとんと落ちる。

何回も投げても。

何度言葉を紡ごうと。

玉は、届かない。

「どういふことだ……っ！？なんで攻撃できない！！！」

男に焦りの色が見え始める。慌てながらポケットに手をつ突っ込むが、もうすでに使えるものは無くなってしまっていた。

攻撃が、当たらない。いや、当たってはいるのに、傷一つつけることが出来ない。

「……言っただろ？」

酷く落ち着いた声で。色も光も感じられない空虚しか存在しない声で、対戯は、ただ呟く。

一步、踏み出して。

「と、『止まれ』え!!!」

⌈
:
⌋

止まらない。

「な、なぜだっ！？なぜ止まらない？なんで、『止まれ』……！！！！」

「お前の、」

[illegible]

「お前の、」

一步、また一步。言霊が確かに対戯に響いてるはずなのに。それなのに、何一つも対戯はそれに従わない。

狂ったように言葉を吐き出し続ける男。言い知れない不安が内部に暗雲のように広がり始めた。
にんまり、と初めて、酷く感情の感じられない顔で、形だけ、笑う対戯。静かに、呟く。

「『お前の攻撃なんか、俺に効くもんか』、ってな」

ただ、一言だけ。
それだけだった。

「は…？」

けれど、男を絶望させるのには、十分だった。

「こと…だま…だと…？」

「さあ」

「お、お前、普通の、人間なんじゃ…？」

「普通の人間だろ。言霊遣いだって、所詮人間だ。汚く、穢れて、壊れて、狂って、愚かで、イカれて、崩れた、…愛おしき、人間だ」
「…っ!？」

恐怖。目の前の、ただの少年のはずの対戯に、酷く重い恐怖を男は感じた。

言うならば黒。深いその色の中に引きずり込まれていくような、闇ほど優しくもない、『黒』。

虚ろな、光を消したその瞳はただ冷たく男を見下すように見つめる。冷たく、冷え切った、何も灯さない瞳。

ペテン使いは許さない。自分の大切なものを傷つける奴は。

嘯いてあげましょう。嘘さえも真実にしましょう。
ペテン使いは許さない。何一つだって、許さない。

「…さて、どうしようか？」

「は、」

「刺して絞めて斬って抉って千切って？いで潰して壊して崩して、
どうされたい？どれだけやってやろうか？お前が望んでたんだよな
あ？残酷な殺し方。お前がやりたかったこと、全部俺が代わりにお
前にやってやるよ。それこそ、バラバラのぐっちゃぐちゃになるま
で」

「お、お前みたいにガキに出来ると思ってるのか…！？」

「出来ないとも思ってるの？愚かな言霊遣い」

「…っ！？」

こいつは本気だ。男は思う。

本気で自分を殺そうとしてくる。一般人が。ただの、一般人に。な
んなのだ、この不安は。恐怖は。絶望は。自分は言霊遣いではない
か。言葉により力と為し、強く在るそれ。なぜ、なのだ。自分は強
い。選ばれた存在だ。なのに、なぜなのだ、なぜ、なぜ？なぜ自分
は、一般人であり、普通でしかない、ただの高校生に、こうも、畏
怖しているのだ。自分は強い。強いのだ。それなのに、なぜ？

男は気づかぬうちに一步後ずさっていた。その瞬間、バランスが崩
れ、体の力が抜けて地面に尻餅をつく。

冷えた、軽蔑しきった視線が男を貫いた。ぐわんぐわんと、男の揺
れる視界の中、対戯が、ゆらり、と歩み寄ってくる。

やめろ、やめてくれ、お願いだ、許してくれ。男は必死に喚くが、
対戯はまるで聞こえてないとも言つように歩みを止めることはな
い。

男との最初の場面のよう。死ぬまでの、時計の、針のように。単
調に。確実に。迫る。

恐怖や緊張などが交ざりに混ざって、男はパニックを起こしていた。死ぬ、死ぬんだ。死ぬ。死んでしまふ。なんなんだこいつは。死ぬ。化け物か？死ぬ。言霊遣い相手に。死ぬ。ここまで。死ぬ。するなんて。死ぬ。

自分の下半身が濡れていると気づかず男は泣きながら叫ぶ。ただ対戯は冷たい眼でそれを見るだけ。

「格下が」

冷たく、そう、呟いた。

+++++

「まったく、あのおっさん、俺が代夜のためなんざにあんなになると
思いかなー…」

「え、それ、酷くない…？結構僕大怪我なんだけど。あのままだっ
たら出血多量で僕死んでたよ。まあでも結局僕を見捨てず助けてく
れたもんねー」

「最後にあんな台詞吐かれて逃げたら俺ヘタレになっちまうだろ。
お前なんざどつてことねーよ」

「うわ酷い…。まあ照れ隠しだつて知ってるけどさ」

「お前が眠ってる間俺死ぬかと思ってたんだぞ。まあ、ぎりぎりだ
つたけどさ」

「そつえばいったい何してたの？あのおじさんって誰？」

「覚えてない。知らねえ」

「対戯い…」

腹部が血だらけの代夜を背負い、対戯は病院に向かって歩いていった。代夜の打たれたところは、急所を外れていたので一命を取り留めていた、のだが、さすがに顔は青ざめていて、時折顔を顰めていた、一言も痛い、と漏らさなかった。

とりあえず、目覚めた代夜の言葉に従い止血して、今に至る、と言うわけだった。

あの男は倒れたまま縛り付けて口にガムテープを端って放置し、警察に不審人物を捕まえましたと匿名で電話をしていた。

「ねえ、対戯」

「ん？」

「ありがとね」

「…」

「僕知ってるよ。対戯はさ、本当はこう言われるの苦手なんだよね」

「…苦手？」

「うん。知ってる…、と言うより、わかるんだ。僕は嘘が、わかるから」

「…」

「天邪鬼っていうより、対戯はさ、自分にも嘘ついちゃうから。だからさ、僕がどれだけ感謝しても対戯はなんにもわかってくれないっての、僕は知ってる。だからさ、あんまり、言わないようにしてた、けどさ。これまでも」

「…」

「でも、たまに思うんだあ。それって寂しくないかって。今日不良に助けて貰ったとき、僕、『ありがと』って言ったでしょ？そのとき、対戯、どんな顔してたかわかる？…泣きそうな顔してたんだよ？」

「まじか」

「まあ僕にしかわからないだろうけどね」

「……」

「ありがとう、対戯」

「……」

「あの時だって、どの時だって、僕は君に感謝してたんだよ。今しか言うときがないから、こういう時じゃないと君は聞いてくれないから」

「……ん」

「あ、素直になった」

「お前の恥ずかしさにしんどくなって血吐きそうだったところだ」

「酷っ!?!」

「ひどくねー」

「ええー……」

軽口を叩きあいながら、病院への道をゆっくり歩く。速く歩いてしまったときに、傷が痛むのか微かな呻き声を上げていた。出来るだけ傷に負担がかからないよう、歩く。

ふと見上げた空は、むかつくらいに雲一つ無い。本日は晴天なり。くそつたれだ。

「ねえ対戯ー」

「んー?」

「何もさー、聞かないけどさー」

「……」

「気をつけてね」

「……俺たまにお前がわかんない」

「人の心がわかる人間なんていないよ。僕だってそれで齒がゆく思うときがあるさ。でもさ、それでも気づくことだって、あるかもしれない」

「…」

「こういつとき対戯あまり喋らないよね…。僕意識飛ばさないように必死だったのに」

「お前が喋るから俺は喋らないの。人のせいにすんなボケ」

「うっ、やっぱ対戯酷いなあ…。やっぱ影で対戯はツンデレだって広めるか」

「…地味に嫌なんだけど。俺そんな萌えステータス頂いたことはございせんが」

「いやいや、需要はあるかもよ？嘘つきで意地っ張りで皮肉屋の上でツンデレ。案外女子に受けるよ？そういうアニメキャラも多々いるとして」

「そういう乙女ゲー要素を俺に入れると？女子相手に甘い言葉を囁けと？それこそキャラじゃねえだろ」

「うっん、そういうのじゃなくてツンデレを全面に押し出すことのがいいな…。ほら、よくあるじゃん。『お前は眼を離すと危ないから俺の傍にいろ』、的な？」

「いや無理。ていうかどっちかって言えばツンデレは女子だろ。金髪ポニーテールで真面目っ子。『男子！掃除しなさい！』みたいな子」

「んー、僕は素直になれない幼馴染系で。『ほら、早くしないと遅刻するじゃない！』って毎朝起こしに来てほしい。僕幼馴染いない上に早起きだけど」

「ベタだな…。いや、だからいいのか。俺だったらアパートに一人暮らしで、毎朝未亡人の管理人さんが起こしに来てくれたらいい」

「それエロゲじゃないの…？あえての未亡人で来たか…。じゃあ僕は近くに住んでる大学生のお姉さんで。免許もっていて、たまに車乗せて行ってくれたり、彼氏に振られたとか言って泣きついてきてそれに付き合ったり…最終的にいつのまにか身長を追い抜き男らしくなり、お姉さんを女として意識し始めた主人公にお姉さんが『あれ、私…恋してる？』って気づき始めて、それから姉と妹のような

ものから、意識しちゃう関係性になって行く、最終的には思いが通じ合うトゥルーエンドで」

「それはギャルゲか…？じゃあ俺は病弱な妹系で。幼い頃から『お兄ちゃん好き！いつかお兄ちゃんと結婚するの！』って言うてる近所の女の子件後輩。その女の子がある日入院。結構重い病氣らしい。それを知った主人公は毎日病院を訪れるようになり。そこから近づいてく二人の距離。女の子は主人公のことが小さい頃から好きで、主人公は自覚が無い感じ。最終的には手術前に女の子が恐怖で病院から抜け出して、主人公がそれを追いかけて見つけ出す。主人公はそれでやっと自分の気持ちに気づき告白。勇気をもらった女の子は手術に臨み、成功。ってトゥルーエンド」

「対感動モノ好きだよね…。ところで対戯は姉系と妹系どっちが好きなの？」

「ボクっ娘」

「予想の斜め上…、はっ、僕っ娘…？まさか対戯、僕のことを…！」

「うぜえ引き千切るぞ」

「どこをつ…？」

「病院見えてきたぞー。そろそろ黙れ。あと言い訳俺が考えとくから適当に誤魔化しとけよ？」

「…りょーかい…」

盛大にいつの間にかずれていた会話に気づかず、病院の中に入りつていく二人。その姿は病院の中へと消えていく。その姿を見つめる女がいた。

+++++

代夜はしばらく入院、という話になった。

幸いにも傷は浅く、医者には改造した銃を持った不審者に襲われた、とそんな内容の話を説明しておいた。

警察に連絡、という件で、ありもしない不幸話を散々捏造し、同情を誘った結果、通報やらなんやらはなくなった。

あの言霊遣いの男は今頃連絡を受けた警察に捕まってるだろう。さすがにたくさんの一般人相手に簡単に言霊を使うというわけにもいかないはず。

もしこつちが連絡が警察にいけば、自分たちがいろんな説明をしながらはいけないだろう。そうして、必然的に男との関係性が示唆される。

もしこつちが知らないと言い張っても向こうは知っているわけだ。そうなれば、どうやって撃たれたかの話になるかもしれない。

改造された銃と説明したのだ。けれどそれは対戯の嘘。それがバレれば、面倒くさいことになりそうだった。

言霊なんて非現実的なもの。

「ってかあれなんだったんだろな…」

あるとき、どうして効かなくなったのか、と思う。

まさか自分が言霊というものを使えるだなんて思えない。いくら概念を理解したとかどうかで…いきなりそんな風に使えるようになるとか、そうは思えなかった。

動きの方は別だった。手のひらにある鋭い傷跡。対戯はその石を強く握り締め、痛みを感じるによって、—自分の意思と反する感覚を常に浴びせ、あの言霊に操られないようにしただけなのだ。

言霊を使った覚えは無い。

え、いや、自覚ないものなんですかそれ、え、俺使っちゃったんですか？と誰かに聞きたくなる。

やどりと葉桜はもうここにはいない。聞く相手はどこにもいない。いうなればあの男、だけれどそれは却下だ。きつとまた殺されそうになるはず。

とりあえず誰か断言してくれ。俺は言霊を使つてないと。

「つて誰もいねえよな…」

「何が？」

「いやだから…つてえ！？」

返事が来るとは思っていなかった。ぶんと振り返ると、けらけらと笑うサングラスをかけた、対戯よりも随分と背の高い女性が立っていた。

「おっす」

「おっす…つてはい！？どちらさまっ！？」

「あたしとのあの熱い夜を忘れたのか」

「身に覚えが無いっ！？」

「あたしとの関係はあの一晩だけだったっていうのか…！？そこまで…あたしは安い女か…」

「え、悪いの俺？身にまったく覚えが無いんだけど。初めて会った気がするんだけど」

「その程度！？あたしはその程度なのか…！」

「ああもう面倒くせえ…！！」

「まあ今日始めて会ったんだけどな」

「やつぱりかよちくしょう！！一晩もたつてねえよ…！」

「けどあたしは見てたぜ…お前のことをな…！」

「あにそれ怖っ！？え、ストーカー？間に合ってますんで。ぜひともお帰り頂きたいのですが」

「ストーカー！？こんな可憐な美少女捕まえておいてなんていう言い草なんだ！？」

「よしツツコミどころたくさんあるぞお！？まずどこが可憐だ辞書引け、それに美少女って自分で言うな！！そのうえ少女って年でもないだろあんた！！それから俺はあんたを捕まえてない声をかけてきたのはあんただろうがぁ！！」

「よし合格だ…お前に教えることはもうない…」

「何も教えられてねえよ！？てかなんだそのキャラ、どこぞの師範かつ！？」

「お前よく喋るな、疲れねえのか！？」

「あんたのせいだろが！！！」

なんだこれ！？すごく疲れる！？と、対戯は膝に手をついて大声の出しすぎで荒くなつた息を整える。目の前の女性はけらけらと豪快に笑っている。

なんなんだ。なんなんだこの人は。

ふいー、と背筋に嫌な予感が駆け巡った。あれ、この知らない人と変な風に出会うパターン、これで何度目？嫌な予感がした。いや、目の前の人からは嫌な予感と言うか、変人オーラをびしびし感じて出来たら関わりあいたくないタイプだ。

「で、では俺はこの辺で…」

「いや待てよ」

がしり、と肩を掴まれた。ちくしょう、いきなりで不自然すぎたか！！対戯は舌打ちして睨み付ける。すると目の前の女性は一瞬ぽかんとして、やだな見つめるなよ照れるじゃねえか、と頬を染めた。

…勝てねえ。この数分の会話により対戯は直感した。

「まあまず自己紹介からだな。あたしは蘇鉄縁そてつえにしってんだ。苗字だけ

だと男の名前みたいに思われるかな。気軽にえんちゃん、えにぴー、えにえに、えっちゃん好きな呼び方で呼んでくれ」

「わかりました縁さん。帰っていいですか」

「つれないねえもつと女性には紳士的に接するものだよ」

「淑女とはかけ離れたあんたにそんな対応をしろと」

「ったく、ほんつと可愛くないガキだ。まあその方が可愛げがあるんだけどよ」

「言ってることが矛盾してるんじゃない」

「はいはい、じゃあそしらぬフリはそろそろやめろよ」

縁のサングラスの奥の目線がふいに鋭くなる。思わずびく、と肩が小さく揺れた。

「うすうす気づいてんだろ？虚室対戯。あたしがどどういう方面の人間なのかを。お前はそこまで頭が悪いわけでもねえだろ。少なくとも今日はお前にとって信じられねえもんばっかだったもんなあ？」

「な、名前、なんで…」

「まあお前みたいな人間は面倒ごとにより突っ込みたくねえタイプだよなあ？自分の世界観を壊したくないっつー奴。その癖して自分の世界に存在するもんは何が何でも傷つけたくない。いまだきああ珍しいもんだよそんな捻くれたフリした臆病者」

すらすらとそう対戯のことを簡単に語つてのける縁。

何故か吐き気がした。先ほどまでの軽い調子とは裏腹に、どこまでも底の見えないその笑みの奥で、何を考えてるというのだろうか。

「…何が言いたいんですか」

「何か言いたいわけじゃねえよ？お前みたいな奴は面白えっただけ。あたしは気に入ったもんは全部あたしのもんだからな。だから今ここにいんだよ」

「それどういふ俺様発言っすか…」

「くくつ、でも坊ちゃん、知りてえんだろ？お前にとっての疑問。あたしなら教えてやれるぜ？多分お前の考えはあってるからよ。なあ？」

どこことなく悪魔の囁きのような気がする。にやりと浮かべる笑みの奥底には、いったいなんの企みが沈殿しているのだろう。

恐ろしくもあり、好奇心を刺激する甘い言葉。

知りたいだろう？なら教えてやるよ。

多分対戯の考える縁という女性の属するものが何なのかは見えている。そして、縁はそのことに気づかれてると知ったうえで、睦言のような囁きをしかけてくる。

教えてやる。単純な言葉でも、どこことなく深い裏側に通じてる気がした。

「…何を企んでるんですか」

「企んでる？心外だな。親切心さ」

胡散臭さを抜けさせないまま、外面を完璧に貼り付けて、突きつけてくる誘惑の糸。

知りたい。知りたいさももちろん。けれど、今度知ってしまえば、何かが変わる。

もう戻れなくなる。

「言っておくがあたしは悪魔でもなんでもないぜ？そんなとって食いやしねえし、そんな怖い眼で見んなよ。照れるだろ」

「…照れるんですか…」

やっぱりこの人はよくわからない、と対戯は思う。

重い威圧感を湧き出させたと思ったらしいのまにかそれは軽く明る

い雰囲気へと変えている。

「それとさっきのお話ですが…お断りさせて頂きます」

「へえ、なんで？」

縁は値踏みするような視線を向けてくる。

「俺は普通のままでいいんです。知らない世界は知らないままがいい。深く突っ込みすぎてもいいことなんざないんです。何一つだつて」

「言うねえ。でもお前、随分と一般人ながら踏み込んできてるぞ？例えばさっき襲われるくらいには、な。もし言霊の効果が切れなかったら、お前今頃体中穴だらけだぜ？」

「…やっぱり、あのパチンコ玉の効果が切れたのあんたのせいだつたんですね…」

「おや？どうしてそう思う？」

「そうとしか考えられません」

「まあ正解だけどな」

くくつと縁が瞳を細めて笑う。

「あたしがまあ、それで聞きたいことがあつたんだよ。お前もし、あたしがいなかったらあのまま打ち抜かれて血まみれだぜ？んなのになんであんなこと言つたんだ？」

「…なんていうか、血がどんだけ出ようとどんだけ痛かろうと、絶対立つていようって、だけ」

「はあ？」

「なんて言われようとき、あいつ、すごくむかついたから、負けられないって…、そんだけっすよ」

「…案外単純だなお前。さすがのあたしも驚きだわ。わりと熱血な

ところもあんのな」

「…別に、そういう人が、いたから」

ふい、と対戯は目線を逸らす。縁はふーん、と簡単な相槌を打った。それからまたにやり、と怪しい笑みを浮かべる。

「そんな人のいい虚室対戯くんにあたしは、頼みたーいことが、あんだよなあ…？」

「…はあ？」

「お前なーんにも聞いてくれそうにもないし、こうなったら、押し付けちゃえ 的な？」

「はあっ！？んなの嫌に決まってるでしょうが…！」

「まあまあ、諦めろよ」

「っ！なんであんたに勝手に決められなきゃ…！」

つい、と。額に指を指された。

ついびくり、と体の動きが止まる。にたにたと笑みを浮かべていた顔が、その一瞬のうちに冷たく色を無くす。

「あたしがお前に拒否権を与えらると思うか？ペテン使い」

「…っ！？」

なぜその渾名を。口を開きかけたが、すぐに閉じる。

「面白いネックネームだよなあ。嘘^{ペテン}使い。臆病者の嘘つき。情けないよな。嘘をつかないと自分を守れないなんて」

「…っ、」

「内心は弱いくせに。弱くて脆くて壊れやすくて傷つきやすい癖に、嘘で全部を塗り固めて、それでまた嘘をつく。情けねえよな、ペテン使い。お前の本心はどこへ行っただ？」

「だ、まれ…、」

「強い振りして嘘をつき、これまで歩いてきて何を手に入れた？外面だけを取り繕うお前を誰が信じる？…あああの親友くんか。でもあの子でさえ守れたか？その嘘で。生きてたからまだ良かったものの、下手すりゃ死んでたぞ？」

「…」

「いやあ一番わかってるのはお前自身か。いいか、それでもお前にあたしは言ってやるよ。お前はあの子を守れなかった。何一つ、な？」

「…っ！あんた、は…何が、言いたいんだ…！？」

「簡単さ。お前は強くなりたいとは思わなかったな」

「は…」

縁の手が優しく対戯の髪を撫でる。

「お前には、素質があるんだ。言霊遣いの、な」

Episode 5 守るべき者

最悪だ。

最悪、最低、絶望、だ。

メランコリックな感情という程優しいものじゃないこの感覚はなんなのだろうか。

ああ気分が下がる一方だ。

「んー？対戯ちゃん何してんだー？」

「うつわさらに面倒くさい奴がきた」

対戯がぼんやりと窓の外を見ていると、いきなりへらへらと笑いながら、ヘッドフォンを首に巻いた男がとたとたと歩いてきた。

芙蓉京ふぎきょう。どれだけ対戯に騙されても平然と近寄ってくる人間。代夜と違い簡単に騙されるはずなのになぜだか対戯に懐いているようだった。

「アンニユイな気分とかー？対戯にもそんなときがあるんだなー」

「うぜえ近寄るな消えるきもいうぜえ」

「ひどっ！？ってかうぜえって二回言ったし！！」

「はいはい、わかったから消える消える。しっしっ」

「うわお前絶対酷い！俺のこと嫌いなっ！？」

「……」

「なんで黙るのっ！？否定してよ！！うわああん俺一人ぼっちいいっ！！」

「あーほら飴やるから騒ぐな」

「あー飴貰った……って俺高校生だよっ！？いくつだと思ってるの！？」

「……」

「だからなんで黙るのぉ!!」

ぎゃーぎゃーと騒ぎながら、それでも京は対戯の横にまでやってくる。はぁ、と対戯はため息を一つつき、もう特には何も言わない。明るくていい奴だというのは対戯は理解はしていた。けれどそれだからよくわからない。なぜ自分のところに来るのか。

こっちはそれなりに酷いこと言っていたはずだけれど。最近こいつはMじゃないのかって疑い始めてる。

「…はー…」

「ため息つくと幸せ逃げるよー?」

「うざい」

「…ほんとそれしか言わないの…?なんていうか辛辣…」

ため息の原因というのは言うまでもなく、昨日のことだ。

そつえにし

蘇鉄縁と名乗った女性に、散々言われて、最終的には勧誘された。

言霊遣いにならないか、と…。

とりあえずなりたくない、と答えて逃げた。

まあ他にもいろいろ言われたが、全て忘れることにする。

けれど、いろいろありすぎて、忘れられないのが今の惨状。

結局その憂鬱な気持ちをため息に吐き出してるのが今だ。

「なあ、もし…えーと…いきなりお前には勇者の資格があるから勇者になれって言われたらどうする?」

「いきなりだな…、なんだよそれ、RPG?」

「うつせえ」

「なんだよもー…、えーと魔王とかいないの?」

「ん、いない」

「えーと、敵は?」

「特には」

「…それ勇者になる意味あるの？」

「ないから困ってるんだよ。なのに、えーと…長老？が『なるうぜっ！』って結構有無を言わさない感じで脅してくんだよ」

「随分おっそろしい長老だな…それなんのゲーム…？」

「お前ならどーする？」

「かなり答えに困る問題だな…」

「だろ？」

「理由もなんもないのに勇者なんかになれないっしょー」

「…だよなあ…」

「で、対戯どーしたのー？」

「逃げた」

「へ？」

「長老から逃げた」

「ええー…」

「だから追ってくるかも知れない」

「だろうねー…」

理由が無い。そうだ。そうなのだ。

そもそも、言霊遣いになる理由もないし、勧誘される理由も無い。空欄のままで、ただの気まぐれで誘われたとは思えない。

自分はただの嘘つきでしかないのだ。

縁が何を考えているのか、対戯にはさっぱり理解できない。

「んーでもさー、」

「ん？」

「理由無くても、やりたいって思ったならやればいいんじゃないのかな？」

なんてことのないように京が呟く。

「ほら、やって後悔、よりやらなくて後悔の方が辛いつていうじゃん？」

「……」

「そもそも勇者になんないとき、物語始まんないし」

「別にならなくても始まるんだけどな」

「…ねえやっぱそのゲーム何？人生ゲームとかなんかなの？」

京はやはりゲームのことだと思っっているようだった。

やっぱり何も知らない奴に聞いてもな…、とげなりする。

少しでも他者の意見が欲しかった。けれど、例のことはあまり言うわけにはいかない。

非現実なことを、誰が信じるというのだ。

あの親友だけは、対戯の嘘を見破ってしまうので信じてくれるだろう、が、彼をそう巻き込むわけにはいかないのだ。ただでさえ傷つけて。

「はあ…しんど」

「ん、ゲームの攻略上手くないの？」

今こいつをすごく殴りたくなった。

+++++

「よう、昨日ぶり」

「……」

「なんだ？照れてんのか？愛いな奴めー」

予想してた、予想してたさ。うん、もちろん。
名前知ってるくらいだし？俺見てたくらいだし？そりゃあ来るだろ
うなあとかはそう思ってたさ。
でも、でも…

「なんていうかもう来たことはどうでもいいっていうかあんたなん
だよなんでここの制服着てんだよ成人してる癖にいいいいいいいっ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「うるせえな、似合うだろ？」

「せめてならグラサンとって手に持った煙草捨てろ！！」

「無理、グラサンはともかく煙草はあたしの命の糧なんだ、それを
奪うってのか！？」

「ただのニコチン中毒者だろうが！！」

なんだこれ、なんだこれ。本気で頭を抱える対戯。
もう本当全てが夢だと思いたい。

学校が終了し、特に部活には入っていない対戯は、そのまま帰ろう
としたときに、遭遇してしまった、今一番会いたくなかった人。
はつきり言って浮いてる。なんかいろんな人がちらちら見てる。ち
なみにここは学校の敷地内。
なにこれもうやだ。

「ん？あたしと会えて嬉しいかー？この美少女アイドル、蘇鉄縁ち
やんに会える機会はあんまりねーぞ？」

「生憎俺アイドルとか興味ないので」

「なあ、アイドルって、宗教用語で、崇拜するものって意味なんだ
ぜ…？」

「崇拜しろって言いたいのかあんたは！！」

「え、してるだろ？」

「その勘違いを海の彼方に放り投げたい」

「よし、靴を舐めさせてやるよ跪け」

「なんのプレイっ！？俺の言ってたこと聞いてましたかあんたは！
！」

「ん？あたしがいかに素晴らしく美しいかってことだろ？」

「うんわかった何も聞いてないねこの人」

「わかったならよろしい。もうするなよ」

「え、何これ俺が悪い流れなの？おかしくね？」

「さあ！あなたも言霊遣いになりませんか！！」

「ああ何その勧誘ってかやっぱりその話しに行くのかよちくしょ
うううう！！！」

もうやだ、すぐくやだ！！にこにこと笑う目の前の女性を見ると
対戯は泣きたくなってくる。

これ強制イベント？回避無理なの？

「しょうがねーだろー？こちらら人員不足なんだよ、だから少しで
も有能な人材とか有能じゃないけどいると役立つ人材とか、無能な
上に役立たないけどパシりくらいには使える人材とか、」

「ツツコミたくなかったけどあきらかに最後の絶対おかしいだろ！
！！」

「大丈夫だってー、いくらなんでも高校生を殺すような真似しない
ってー」

「今明らかに爆弾発言したこの人！！え、なに、あんたらってそん
な殺されるような物騒なことしてんの？」

「…あ」

「何いかにも口が滑りましたって顔おおおお！！！？断ります
！、全力で俺断るんで！まだ高校生だし、死にたいとか考えてない
ので！」

縁に背を向けて全力で走り出す対戯。だが、それ以上のスピードで縁は追いかけてきて、たやすく対戯を捕まえる。

「まーまー逃げんなよー？なあ？いいじゃねえか？もう少し話し聞いてくれたって、なあ？」

「嫌だ！！命がけとか無理！ってか何あんた、ただの高校生に何させようとしちゃってんですかっ！？生憎俺は非日常とかファンタジーとかあんま興味ないんで！！」

「残念だったな、あたしは興味ある」

不意に縁が声のトーンを落とす。

うぐ、と一瞬対戯の動きが止まった。苦手だった、この声が。全てを見透かし、それでもなお深くまで入り込んでくるこの声が。

「別に無理矢理ってわけじゃねえ。誰だって人権つてもんはあるかな。つまり、あたしはお前に対して、無理矢理はできない…、でも、それだけだろ？」

「…は？何が？」

「つまりお前が望めばいいわけだ。言霊遣いになりたいと。強くなりたいと」

「…？」

言っている意味がわからない、と対戯は首を傾げる。

縁は意味ありげにふふん、と鼻を鳴らした。

「男は誰だって強くなりたいたいって思うときがあるもんなんだよ、ばあか」

それだけ言つと、くるり、と背中を向け、かつかつ、と革靴の音を立て歩いていってしまった。

ひらひらと、振り返らずに、手だけでさよならと言つ縁。残された対戯は、しばらくぽかん、と口を開けていた。

「…なんだったんだ…？」

どうしてもわからない。

強くなりたいたいと思うとき？なんだそりゃ。

それだけじゃない。その言葉を呟いたときの、嫌に、寂しげなサングラスの奥の眼。

わからない。なんであんな顔をしたのか。

ああ、もう、面倒くさい。

「…なんにしたって、言霊遣いになる気ねーし…」

忘れよう、とこれまで何度思ったか。

忘れようと思つても、何も忘れられなかった。

あの鳥の化け物。やどりの笑顔。葉桜の泣き顔。言霊。縁。あああ

ああ、もううざったい。

なんでどうしても、関わってくるんだ。介入してくるんだ。俺はこのままでいいというのに。

生温い日常の中で、日々を変わりなく過ごしていく、それでいい。

それがいい。十分なんだ、それで。

強くなりたいつて思うときがくるときはきっと、それら全てが崩壊してるんだろ？

そうでもしなけりゃ、対戯は言霊遣いになる気はない。

対戯の世界は対戯のものであつて、他のものが干渉していいはずがない。

いろんなものが混ざり合つてしまふ世界だなんて、認めない。自分は自分のまま生きていく。重荷なんてものは背負わずに。そうやって、今まで来たじゃないか。

『 の、めに、私は嘘をつくんだ』

桜の散っていたあの時、あの人だって言っていた。

『傷つけられないために、負けないために、 な を、
くために』

ところどころノイズがかかり、上手くは思い出せないが、自分の憧れだった人が言っていた言葉だ。

あの人からはいろいろ教えてもらった。

丸い眼鏡をかけて、年下の俺にも敬語で喋り、男なのに髪が長く後ろで縛っていて、いつも優しい笑みを浮かべていた、その人。

あの人の言葉通りに今俺はやってきている。

けれどあの人の望んだ形になっているだろうか、と不安にも思う。

自分はその人にはなれない。

対戯の記憶の中に色濃く残る、桜の似合うあの人。

『 対戯くん、君は、』

「対戯 つ、帰ろーっ？」

は、と意識が現実に戻る。振り返ればへらへらとした笑みの京がこちらへ駆け寄ってくるのが見える。

「なにしてたんだ？対戯帰んないの？あ、そうそう俺も代夜のお見舞い行きたいんだよ一緒に行こうぜー？」

「あ、ああ……」

つい返事がしどろもどろになってしまふ。けれどそんな対戯の様子に気づかず、ほら速くー、と気の抜けた声をかけてくる。

日常が、全てを流してくればいいのに。
ため息をつくのを堪えて、対戯は歩き出す。
一瞬視界の端に、桜の花びらが見えた気がした。

+ + + + + + + + + + + + + + + +

「頑張れ私頑張れ私頑張れ私頑張れ私！！きよ、今日こそ……！！」
柱の影と言う、ベタと呼べる位置から対戯の姿を見つめる一人の女子。

ショートカットにカチューシャ、地味な部類に入る少女だが、眼はまん丸と大きく、可愛い普通の女子高生だった。

「湯里^{ゆり}ー、またストーカーしてんの……？」

「え、えみちゃんっ！！ち、違うよ、私はただ、あの、その……ストレッチを……」

「言い訳が苦しいよあんだ……、話しかけるならさっさとすればいいのに……」

「そ、そんな……！用も無いのに話しかけても、変な人になっちゃう……！！」

「……今のアンドの方が変な人だから。……はーっ、あのペテン使いのどこがいいのか」

「ペ、ペテン使いとかいっっちゃだめだよ……ただちょっと嘔吐きなだけ……」

「あんだね……嘔吐きをオブラートに言った渾名がペテン使いだってのに、あんだが嘔吐き呼ばわりしてどうすんの」

「あつ」

「話しかけるんなら、さっさとしちゃんないなさい。ほら、もう行きそ

「うよ？」

「うつうつ　　…、う？」

顔を赤くして頂垂れていた湯里だったが、ふと戸惑いのような声を上げ、キヨロキヨロと周りを見回し始めた。
友達の少女は訝しげに湯里？と声をかける。

「今、着物着た小さい女の子いた気がしたんだけど…」

「はあ？なにそれ」

「いや、なんか細長いもの背負った、髪の毛長い女の子が、走ってた気がするの。どこ行っただろ…」

「…あんだ、もしかしてそれって…」

「へ？」

「あの…この世に、その、生きていないもの、っていうか…実態のないものっていうか…」

さーっと勢いよく湯里の顔が青ざめていく。

「ええええええええ、そんな、まさか…っ！？」

「…」

「う、嘘だよな？わ、私の見間違いじゃ…！？」

「私に聞かないでよ」

「ふ、ふああああっ！！！」

湯里が叫んでる頃、もうすでに対戯は京と共に学校を出ていた。

+++++

「ふ、ふえ？」

大袈裟に仰け反りながら対戯が叫ぶと、やどりが驚いたように身を震わせる。

まじか、まじでか、とぶつぶつと呟きながらがつくりと地面に膝をつく。

巻き込まれるの、けってーい

…ふざけんなああああああっ！！！！！！！

「ど、どうしたのじゃ対戯…？どこか痛いのか…？」

「あ…いや…なんでもないよ…」

そしてどうにも悪いことに、このやどりには何故か対戯は強いことを言えなかった。

幼いながらも名家の娘で、その誇りを貫こうと、どんなに怖くても『逃げる』、と自分に言つてのけた少女を、案外対戯は気に入ってたと同時に、誰かが守らなければいけない存在だと思つていたので、そして対戯自身が、その性格に似合わず子供好きという点も入っている。

「…それで、どうしたんだ？こんなとこまで一人出来て…。葉桜は？あの過保護心配してんじゃねえか？また狙われるぞ」

「むむ…、私は知らぬそんなこと…、むーっ！母上が悪いのじゃー

！！」

「は…母上？」

「見合いしろ、と言われた…」

「へえ見合い…、……………見合い？」

え、見合いって、男女が机を間に向かい合つて、ご趣味は何ですかとか聞くあの見合い？

こんな小さい子が、あの…見合い？

「お前、まだ子供だよな…」

「むう、子供とは失礼な！…でも、最近私が狙われることも多くなつて、その、親が心配してな…。将来のことを考え、許婚と見合いをすることになったのじゃ…。でも…」

「許婚はいるのね…、でもどうした？不安か？」

「…違う。やはり、結婚する相手が決められてる、というのは、少しだけ…寂しい、と思ったのじゃ。…私だって、女の子なのじゃぞ？」

「…お前、」

「まあ不安というものもあるがな。でも、少しくらいわがママを言つたつて…いいと、思ふんじゃ」

少し瞳を揺らしながら、悲しそうにやどりは笑った。

ああ、名家つてのは、そういう思いをしなければいけないんだな、と気分が沈むのを感じた。

「だから、ちよつといたずらをな、しようと思ふのじゃ！」

「んで、一人でここに来た、つてわけ？」

「それだけじゃない。ここに背負つてるものは、言霊刀と呼ばれる代々言霊遣いの家に伝わる名刀じゃ！！無くなつたら多分すごく困ると思ふのじゃ」

「…刀、ですか」

「刀じゃが、でもな、どうにも、抜けない刀なんじゃよ。だから無くては構わないと思ふんじゃが…、昔、私の兄？だった人が使つてた、らしくての？」

「なんで疑問系？」

「私が生まれてすぐ、死んでしまつたらしいんじゃ。覚えていないがの」

「…」

悪いこと聞いたかな、と思うが、やどりは全然気にしていないように見える。

やはり、生まれてすぐだから記憶がなく、知らない人間が死んだと聞かされても、何も実感が沸かないのだろう。それが実の兄だとしても。

「はあ、まあそっちの事情はよくわかんねえけど…、お前がしたいようにすればいいんじゃないか？で、なんで俺のところにきたんだ？」
「…他に近くにいる知り合いがおらんのじゃ…」
「なるほど…」

「それに対戯ならなんとかしてくれと思うての！」

「…なんか信頼されすぎて怖い」

「ふえ？」

「はあ…まあいいか。その刀重いだろ？とりあえず持ってやるよ。」

あと、ジュースクらいなら奢ってやる」

「おお！！ありがとう、対戯！」

「…またありがとうって…」

「対戯？」

「はあ…なんでもねえよ、じゃあ自販機まで行くぞ？」

「じはんき？なんじゃそれ？」

「…まじか」

ため息をつきながら、対戯はやどりが持っていた布に包まれた刀を受け取り背負う。

それで、自販機のある公園まで行こう、とやどりに呼びかけた。

…『言霊』刀が何かってことは絶対突っ込まねえぞ！！！！

「ところで、あの鳥どうなった？」

公園まで歩く途中、対戯はあの鳥の妖怪、江蛾留侘と呼ばれた鳥のことをふと思い出し尋ねた。

「江蛾留侘は強制的に唱えられてた言霊の効力を完全に消したら懐かれたのでな、万葉家の遣いとなってるぞ？ちなみメスで名前はキヤサリン」

「…なんでそんな外国人っぽい名前を…」

「母上がつけたのじゃ」

「母上…おま…」

他愛も無い話をしながら対戯とやどりは歩く。

二人とも、これから何が起こるかなんて、さっぱりわかっていなかった。

二人の話を聞いてにやりと口元を歪めた影。

そして二人より先に進んだ姿。

何も知らなかったし、気づかなかった。

そう、何も。

+++++

血が、溢れた。頭から流れってくる鮮血は、眼の中に入り、視界を赤く染めた。

倒れた対戯を揺さぶりながら、泣き叫ぶやどり。その体は、対戯の血によって赤く染まっていた。

なんで、こうなったのだろう。

周りには、人とは違うモノが、いたるところに存在している。

枯れ木の色とそれに似た姿で、布を纏った鬼の顔。青黒い姿をてかてかと脂っこくぬめった粘液で縄を体に巻きつけた骸骨に似た何か。普通じゃなかった。尋常じゃなくないくらいに、恐怖が沸きあがった。

「対戯……！！対戯っ……！！」

泣きながら、やどりは必死に対戯の名前を呼ぶ。

初めはただ、普通に公園に入ったただだった。

けれど入った瞬間、普通じゃない何かを感じた。

背筋に寒気が走り、鳥肌が全身にたつ。

そして、現れた、化け物。

「しっかり……！！しっかりするのじゃ……！！頼む、頼むから……、死なないで、くれ……！！」

頭が真っ白になったと思っていたら、化け物の持っていた棍棒で殴り倒されていた。ぎりぎりですらに倒れたのだが、額が刀で切りつけられたようにぱっくりわけ、血が溢れ出し、その場に倒れた。

じんじんと熱を灯しながら痛むそれ。真っ赤な視界の中から、化け物の姿が離れない。

この異常な光景の中、人が入ってくる気配も、人が公園前の道を通る様子もなかった。今は学生の下校時刻だというのに。

どうせまた言霊なんだろう、と霞む意識の中で思う。

感じたことの無い鮮烈な痛みが、体中を支配し、体を動かさなくする。

助けを呼ぼうにも、ここは対戯の日常とは切り取られた世界らしかった。ここには、自分と、化け物と、やどりしかない。

どうにもできない。

けれどやどりは叫んだ。

「対戯は弱くなんか無い！！私を守ろうとしてくれたのじゃ！！お前に対戯を馬鹿にする権利なんて無い！！」

涙でぐちゃぐちゃの顔で、それでも、凜と言い放った。

対戯の手に、力が籠る。

「私なら着いていく。だから、だから対戯は……！！対戯だけは帰してくれ……！！」

だけってなんだよ。

お前はどうすんだよ。

「……まあいいでしょう。他ならぬやどり様の？頼みですしねえ。いくら僕でも関係もない人間に関わってる暇も無い」

さあ、こちらへ来てください、と言い、手を差し出す男。

やどりは、もう涙を零さぬかというように、唇を噛みながら、男に近づいていく。

だめだ。

行ったら駄目だ。

対戯の手に、さらに力が籠った。

駄目だ。

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ駄目だつ！！！！！！！！！！

「待……てよ……！！」

ん？と男の視線がこちらを向く。やどりが驚いたようにこちらを振り返った。

考える、考える、考える。

お題は揃った。『言霊』に『万葉家』に『従者』。

そして背に負う、『刀』。

勝てるとは思えない。むしろ死ぬんじゃないか、と対戯は心の片隅で思っていた。

言霊遣いでもなんでもない自分。

化け物に囲まれ、手も足も出せずに、ただ倒れた自分。

頭にずんと、重く熱い痛みが走って、役に立たない自分だけれど、ここでただやどりが連れられてくを見過ごすわけにはいかなかった。

俺はやどりを守った？まさか。

やどりが俺を守ったんじゃないか。

情けないままペテン使いは終われない。

『男は誰だって強くなりたいて思うときがあるもんなんだよ、ばあか』

今更わかったよ。でも結局、日常は壊れた。

死ぬかもしれない、けれど、ここで逃げる方が嫌だった。

所詮嘘しか自分はずけない、と思う。

なら、嘘を吐き抜いて見せましょう。ペテン使いの名にかけて。

演じて見せましょう。言霊遣い^{ペテン}を。

「お前、本当に、俺が、関係ない、ただの人間だって、思ってるのか…？」

「…？」

背に持った布に包まれた刀を杖のようにしてのろろと立ち上がる。

痛みが頭から駆け巡り、今にも倒れてしまいたくなる。けれど、出来ない。

「本当に、従者じゃ、ないんでも…？」

「な、何を馬鹿なこと言ってるのじゃ対戯！！」

「もう演技はやめようぜ、やどり。いくら俺を逃がすためといって、お前がそんなことをする必要は無いんだぜ？」

「な…っ！！」

「普段はやどりに着き従ってるわけじゃない…、ましてや万葉家のものでもない。けれど、俺たちは代々万葉家に仕えるべき者…、ここでやどりを守らずに、どうしろというんだ？」

「…へえ」

適当に喋った言葉を聞き、男の顔が、面白いものでも見たかとも言うように、にやりと歪む。

もう、ここまで来てしまえば、逃れることなんて出来ない。

正直、怖くて怖くてたまらない。

震えるのだって我慢してだし、今すぐ逃げ出しそうになる足だって必死に耐えて押しとどめた。

「それで、君はどうするつもりだい？」

「やどりを…連れて行かせるか、バーカ」

布に包まれた刀を取り出す。

やどりの言う、『言霊刀』。

ペテン使いを舐めるな。

勝てなくても、守りきってやるさ。

対戯は挑戦的な顔で笑った。

E p i s o d e 5 守るべき者（後書き）

万葉つてのは万葉集からとりました。
…知らない知識…。

Episode 6 言霊刀、桜、アルビノ

目の前には化け物がいて、化け物よりも恐ろしい人間がいて。意味がわからなかった。けれど、頭をフル回転させて、やどりを助けることだけを考える。

なんでこんなことをしているのだろう、と対戯は思う。見捨ててきたことなんてたくさんあった。

例えば不良に絡まれてる気の弱い人間。

学校でいじめられてた人間。

いまこの状態に比べれば、それらはなんて自分にリスクの少ないことか。

今、このとき、対戯は絶えず命の危険があった。

次の瞬間には、化け物たちが襲い掛かってくるかもしれない。

わかっている。自分は馬鹿なのってことくらい。

酷い偽善者だ、と自嘲する。本来ならば、こんな人間ではないはずなのに。

中途半端な人間なのだ。結局のところは。

優しくするのは苦手だ。自分と言う人間を勘違いされるから。

「対戯っ！！！」

でも、泣きそうな、目の前の少女を見ると、それでもいいかな、と思えてくる。

布から出した刀はやどりの言ったとおり抜けなかった。

抜けない刀。どうせなんかの力がどうたらこうたら、とでも言うんだろ。

その刀は黒色の鞘に、桜のような花が彫られており、その刀身は十分に長かった。

何物騒なもん持ってた俺、と対戯の冷静な思考が呟く。

「無理じゃー！その刀じゃ何も出来んっ！頼むから…、頼むからやめてくれ…！もともと家をでた私のせいなんじゃ…、頼む、対戯…！」

「はいはい、うつせーな。姫さんは黙って待ってる」

一応刀を引っ張っては見るけれど、少しも動かない。接着剤でこれでもかっつくつつけてるみたいだ。

これであの化け物倒せねえのか。少しだけ考えて、思いつく。ならもう、抜かなくてもいいんじゃない？

「最後の対話は終わりましたか？従者さん。じゃあ、死んでくれますか？」

にこり、と笑った男。その次の瞬間、一斉に化け物が襲い掛かってきた。

ここでもし、ヒーローみたいな奴だったら、なんか力が覚醒したりして、あっという間に敵を薙ぎ倒すだろう。

だけれど生憎、自分にそんなヒーロー性は持っていない。

でも、やらなければいけない。

対戯は刀をしっかりと握り締めて、強がるように口元に笑みを浮かべた。

ケンカは弱い方じゃない。

足も遅い方じゃない。

運動神経も悪い方じゃない。

でも、負けられない。

「う、おりゃあああああっ！……！」

一步地面を踏み出して、刀を、鞘がついたまま敵に切りかかった。驚いたようなやどりの顔が視界に映る。

せめて棒の役目でも果たせればいいと思ってた、けれど、案外敵が真つ二つにばっさり斬れる。

「…あれ？」

なんだ、斬れるじゃん、と思つてると、後ろから、自分を殴りつけようとしたあの化け物が棍棒を振り上げ襲い掛かってきた。横薙ぎに払ってくるそれをしゃがんで避け、刀をそのまま立ち上げると同時に突き立てる。

化け物は、ぐおぁ、と低く人間の声帯では出せないような声を上げると、細かい粒子になって消え失せた。

「…まじでか」

十分戦えるじゃないか、鞘でも。見ればやどりが瞳を真ん丸にしてるのが眼に入った。

にかり、と笑ってみせる。そうすると、やどりが泣き笑いのような表情になった。

化け物は次々やってくる。

剣を突き立てたり、そのままぶった斬ったり、ただがむしやりに刀を振り回す。

生と死と、ぎりぎりの境目で、ひたすらと。

ときおり化け物の爪が肌を掠った。だけれど、怯んでいる暇なんて無い。

「対戯…」

やどりが呆然と対戯を見ていた。どうして、と小さく口から漏れる。

なぜあの人は自分のために戦っているのだろう。やどりの瞳が潤み始める。

「もう…やめるのじゃ…」

ぼろり、と大きな瞳から透明な雫が零れる。

タキシードの男は化け物がどんどん倒されていくというのに、にこにこと笑ったままだ。むしろ楽しんでる様子さえも伺える。

化け物の腕がついに対戯をとらえ、そのまま吹っ飛ばされる。やどりは小さく悲鳴を上げた。けれど対戯は、それでも立ち上がる。

「もうっ！！もういいのじゃ！！お前がそんな怪我してどうする！！頼む、頼むから、もう、やめて…」

そう言ったときだった。ふ、とやどりの体に影が出来た。え、と思わず顔を上げる。そこには、大きく腕を振りかぶる、化け物が。

「ひ、ああっ！！！！」

やどりの体に重い衝撃が走る。息が一瞬止まった。

腕の勢いのままに、地面をざざ、と擦りながら少し離れたところまでやどりの体が吹き飛ばされる。

「あ、うう」

酷い打撃の痛みと、擦れた肌。また、近づいていく化け物。やどりは、震えた声を上げる。

「…っ」

刀を持ち、化け物を切っていた対戯は、ちょうど視界に映ったそれをスローモーションで見ている気分だった。

代夜のときのように。

傷ついてく、者が。

頭に、血が、上った。

だめだ。

これは、だめだ。

対戯は眼を見開きながらすごい勢いでやどりの方へ向かった。途中、化け物が立ちふさがってきたが、対戯は無言のまま、高く飛び上がりその化け物の脳天に突き立てる。

小さい化け物は薙ぎ払い、大きい化け物は突き立て、他に何も見えてないという状態で、やどりの方へ駆け寄る。

やどりはすごい速さでやってきた対戯に抱きつく。対戯は片手でやどりを抱えた。

化け物からは悪臭が漂い、口元からは涎に似た液体をばたばたと垂らしている。

けれど、それでも対戯は眼を大きく開きながら、ただ化け物を見つめる。瞳孔も開いているようだった。無表情、無言のまま、ただ、見つめる。

恐怖なんてものはどこにもなかった。

ただ、腹の奥から酷く冷たい怒りが湧き上がってくるだけ。

殺したい、壊したい、崩したい、殴りたい、蹴りたい、刺したい、打ちたい、潰したい、沈めたい、落としたい、千切りたい、抉りたい、そんなただの、怒り。

化け物が腕を振りかぶる。そんなようすを、やどりは怯えながら、対戯は、ただ冷たい眼で見ていた。

それが、振り下ろされそうになったとき、対戯の口が、小さく、動いた。

「『一失せる』」

ただ、その一言だった。

その瞬間、化け物は粒子になって消え去った。

どくり、と対戯の内部が脈打つ。

次の瞬間、額の傷なんて比じゃないほどの痛みが、体中を駆け巡った。

「う、ぐう……!!」

それを唇を噛むことで必死に耐える。全身を鋭い刃で斬りつけられたかのようにじんじんと痛むそれ。

けれど、対戯は倒れなかった。口の中に血がせり上がってきて、それを地面にぺっと吐く。

頭の中がくらくらとした。今、自分が何をしていたのかもわからなかった。

ただ、目の前の化け物が消え去ったという現実のみしか、頭の中に入らない。

「く、はは、ははははっ……!!」

男が腹を抱えて笑った。ゆらり、と対戯が男の方を向く。素晴らしい、と男が呟いた。

「言霊を使えないかと思っていたのに、まさに危機一髪、ですねえ」
「こと、だ、ま……」

「でもなんですか君のその言霊は。言葉として曖昧なはずなのに、
どうして、君の思うように言霊を放つことが出来た？本来、言霊と
は、意味を持つ言葉を正しく使うことによって意味を成すはずなの
に。そこがわからない」

「……」

「答えない、ですか？まあそれもいいでしょう」

ぱちり、とウィンクして男は一步後ろに下がった。

「君は面白い。多大な可能性を秘めている。これは万葉家にちよっ
かいをかけるより、面白そうですねえ」

「な、にを……」

「ここは見逃してあげましょう。まあ案外人を殺すというのはいい
気分がしないものです」

先ほどもで本気で殺そうとしてきた人間がなんというか。

対戯は瞳孔の開いたままの眼で、今にも飛び掛りそうな様子だった。
正気が失われたかのような状態で、それでも片手でやどりを抱きし
めている。

「この世界の人間というものは、酷く面白い。もがき苦しむ様、絶
望しきつたその顔。それでも諦めようとしなない愚か者。不安定なく
せに一定のバランスを保ちながら生きていく、なんて滑稽で醜い。
けれどどうしようも愛しく思えるのですよ、その姿は」

くすり、と男が笑う。

「……
まあ、人間を捨てた男が言ったとしてどうなるのでしょ
うか？」

瞬間、対戯の意識が正気に戻る。

冷や汗が止め処なく流れていくのを感じた。

人間を、捨てた？

なんだこいつ、なんなんだこいつ。声を発しようとしたけれど、対戯の喉が乾いて張り付き、上手く出すことが出来ない。

「おおっと、勘違いされたは困るのですが、私は人間ですよ？正真正銘、四肢の揃った五体満足の愛しき人間。けれどですね、どうしようもなく私は人間という枠から外されてしまったのですよ。結果的に私は人間と区別することが出来なくなってしまった…、いいえ、させられなくなってしまったのでしょうか？愛しき人間は私というモノを人間と分けなくなってしまった」

「なんだよ、それ、意味わかん、ねえ…」

「意味なんてものはわからずともよいのです。そもそも理解させようとしていませんから。でもたまに考えるのですよ。私という人間だったものが愛する人間というのは、自己中心的なエゴイストばかりだった…、とね。だからこそ欲してみたくなのです。私の考える、本当に、面白い人間というものを。だって考えても見てください。人間と化け物の違いとはなんですか？人間こそ化け物の素質を持っているというのに、圧倒的な線引きで分かれた世界を、否定して否定して否定して。なんてつまらない。面白くもない。でしよっ？」

同意を求めるように男は対戯に問いかける。対戯は無言のまま、男を睨み付けた。

「その中で、私は君を面白いと思った。従者だなんて嘘でしょう？いくらなんでも、この子に敬語を使わない従者なんているものですか。万葉家というのはそれほどの力を持っているのですよ？従者と名乗るからには、せめて敬語を使ってくれませんか」

「……」

「まあいいでしょう。別になんだって構わない。でも、その行動に私は目を引いた。あなたは見たところ事情を知っているだけの一般人にしか見えなかった。けれどどういうことでしょうか。命を賭けてまで、万葉家の子を守ろうとし、仕舞いには言霊を使って見せた。予想外ですよ。面白い。とても面白い。だから、いいでしょう。私はもう貴方たちを狙う真似をしません」

は、と一瞬だけ息が止まる。対戯は呆然とした表情で男を見た。男は表情が何一つも変わらないままで、ただ、笑う。

「そうだ、私のことは入鹿^{いるか}とお呼びください、また会うときが来るので」

そんなときは来なくてもいい、と思うが、その願いは叶うことがなさそうだ、とほぼ確信的に思う。

そんな対戯の心情を見透かしたかのように、それでは、と演説の終わりのような声を上げる。

「行くも逝くも貴方次第。面白いものには愛の手を。それでは失礼またいつか」

帽子を脱ぐ仕草をして、サーカスの団長のように片手を前、片手を後ろ、と片足を軽く下げてぺこり、とお辞儀をする。

しゅんかん、ぼふん、と大きな音がして辺り一面白い煙に包まれた。視界が煙るが、すぐにそれは消え去る。

そこにはもう、誰もいなかった。化け物も、あの、化け物に似た人間も。

「あ……、」

対戯の視界がぐらりと揺れる。
暗転していく世界。

気の遠くなっていく意識の中、やどりの声が響いた。

+ + + + + + + + + + +

桜が舞っていた。視界が桃色で埋め尽くされ、淡い木漏れ日の中、そこは優しい匂いがした。

相変わらず世界は綺麗な振りをしているけれど、ここは本心から綺麗だ、と思える場所だった。

『ここは秘密の場所です』

さんが言う。

『ここでも自分に素直にいていいのですよ。ここは人が人であることを、全て赦す場所ですから』

さんはにこり、と笑って俺の頭を撫でた。

俺はなんだか照れくさくて、つい俯いた。その手を振り払うなんてことはしなかったけれど。

父のような、兄のような　さんは舞い散る桜を見上げ、呟く。

『もし悲しいことがあっても、泣くな、とは言いません。けれど、忘れてはいけないのです。貴方が零す涙の分だけ、心を痛める人が』

いるということ』

『そんな人、おれに、いるの？』

『ええ、現に、今だって目の前にいるじゃないですか』

ほらね、と優しく笑う。

『
...』

ああこんなにもきれいなひとがいるのか、と思う。
悪意も憎悪も、この人からは自分から逃げていく。

人の痛みを自分の痛みともとれるこのひと。

世界はこういうひとを愛するんだと、なんとなくそう感じていた。
人を引き寄せる力をもっていて、人の心を暖かくする力を持っている。

すごく、強いひとだ。

泣きそうな心で、そう思ってた。

『対戯、』

『なに？』

『貴方の、幸せとは、何を指しますか？』

『しあわ、せ？』

『そう、幸せ』

『…おれには、ちょっと難しい』

『なら、いつか見つけてください』

『どうして？』

『いつか、それが、貴方の力に、なりますから』

そう、-さんが言った瞬間、俺の視界は淡い桃色に全てが染まった。
世界がぐら、と揺れる。

優しい世界が、暖かい世界が、あの人が、崩れていく。

必死に手を伸ばした。
やめろ、行くな、行かないで、置いていかないで。
ひとりに、しないで。

+ + + + + + + + + + +

「あ……」

薄ぼんやりと、意識が覚醒していく。
そこには、桜も、あの人も何もない、見慣れぬ天井が対戯の眼に映った。
無意識のうちに手を伸ばしていたらしく、微かに眼の端がじわりと濡れていた。

「生きてる、のか……」

伸ばしてた手で、そのまま眼の周りを拭う。
だんだん思考がはつきりしてきたのを感じ、辺りを見回した。
障子、畳、掛け軸、など、いわゆる和風と言うべきものが一通り揃っている。

悪くない記憶力の中辿っても、こんな家、見たことがなかった。

「あれ……」

よく見ると、視界の端に動くものが。
それは暖かくて、小さくて、生きている、もの。

「やどり…?」

そう名前を呼ぶと、むむ…と微かに身じろぐだけで、その他に反応はなかった。

もしかして、と思って重い体を上げると、そこに対戯の布団に寄り添う形ですやすやと眠るやどりが。

微かに瞼が赤く腫れていて、泣いていたんだな、と簡単に想像がつく。

少し申し訳ない気持ちになりながらも、優しくやどりの頭を撫でてから、起こさないようにそり、と布団からでた。

先ほどより痛みは引いていたものの、まだじくじくとしつこく痛んでいて、体を動かすのも少しだるかった。

どうやら体には包帯が巻かれているようで、服の下に微かな違和感を感じる。

忍び足で部屋から出ると、そこは縁側のような場所で優しい光をその場所に差していた。

庭はよく手入れされているようで、落ち葉はほとんどない。

「…どこだここ」

少なくとも安全な場所だろうが、見慣れない場所なぶん不安感がかなり強い。

やどりがいるのだから、多分そういうところだろう。

本能的に、ここからすぐ離れた方がいい、とそんな気がする。

あのときの痛みが、微かにぶり返すように疼いた。

変えれも帰れもしないあのとき。間違ったことはしなかった。けれど、自分に合っていない行動だった、とつい苦笑する。

まったく、可笑しすぎる。

「誰だ」

不意に鋭く、冷たい声がどこから聞こえた。
対戯がえ？と周りを見渡せば、不意に首元に冷たい感触。

振り向けば視界に映える白と赤。え、と考える前に、首筋のものを考える。

ナイフ。

は、と掠れた声が口から漏れた。

「…お前は、誰だ。なんの目的で、ここにいる」

「いや、あの…」

「答えろ」

ぐいつと冷たいナイフを押し付けてくる人間。

やべえこれどうしようか、と思いながら、相手のことをまじまじと見てみると、あれ？と違和感。

よくよく見れば、その人間は、対戯と同じくらいの歳で、そして、白い髪をしていた。その上赤い眼。

間違いない、アルビノ美少年か。

…混乱しているのだろう。家にあるゲームの情報が雪崩れ込んでくる。

綺麗だなー、と半ば現実逃避しかけたところで、慌てて思考を回復させる。

どういう状況だ、これは。

「えーと…あの、どちら様、ですか？」

「ボクが聞きたい」

ですね。

なんだろうか、と対戯は頭を抱えなくなる。

多分こいつはこの関係者だ。いや、違ったら怖い。
んで、自分は、本来ここに在るべきではない人間。
…。

怪しさからいつて対戯のほうが分が悪い。

ここ最近自分はどれだけ命の危険にあっているんだ、とげんなりするが、どうもこうも言っていられない。

「俺、特に怪しい奴でも危険な奴でもないし、ただちよつと嘔吐き
なだけのお茶目さんです」

「刺されたいのか」

「…少しフレンドリーに言っただけなのに…、俺は別に悪い奴でも
なんでもねーぞ。ただちよつと気がついたらここにいただけで。そ
んだけ」

「…」

「そんな睨み付けられても困るんだけど…、つてかナイフ下ろして
くれね？俺別にどうこうするつもりも何も無いから」

「…信じられると？先ほど自分のことを『嘔吐き』と自称したお前
が？」

「ああ…」

「答えろ」

これはどうするべきか。大きな声で部屋に在るやどりを起こすのが
手っ取り早いのだが、そうした瞬間このアルビノ美少年に喉を搔っ
切られない。

…なんか感覚が麻痺してきてないか…？と最近起こった尋常でない
出来事を思い返す。

対戯は一つ小さくため息をついて、まっすぐ目の前の人物を見る。

睨み付けないように、と気をつけながら、小さく息を吸う。

そうして、にっこりと、笑った。

ぱちり、と目の前の赤が瞬く。多少驚いた様子を見せているその様

子に、内心対戯は喜んだ。

やべえ表情筋辛え、などという考えはおくびにも出さず、きわめて落ち着いた風を装い、それをわざとらしくあるようにだしてみせる。予想通り、微かにアルビノ美少年の顔が僅かに強張った。ナイフが少し喉の方に近寄る。

「一作り話だけれど」

「……？」

「あるところに、一人の男子高校生がいて、なんでだかそいつは訳のわからないことに巻き込まれて、訳のわからないことをやるはめになって、訳のわからない化け物とか力とか、その眼で、その身で体験してきたのよ。そしたら、なんやかんやで空から降ってきた幼女を助けちゃうし、その帰り道変な男に襲われて、親友が病院送りになったと思ったら、グラサンかけた変な女に勧誘されて、仕舞いには公園で幼女と一緒に化け物オンパレードってかフルボッコにあつたのね？わかる？」

「……」

「つまりまあ、普通の人は体験し得ないことが奴に降りかかった。なんか幼女には懐かれるし、その従者には結構酷いこといったのに感謝されるし、本当意味わからないことばかり。少なくとも速く忘れちまおうってことが、いつの間にか忘れてくてもうんざりするくらい忘れられなくなった。まったく酷い話だよな？日常を俺は信じてたんだよこれでも。俺が信じるとか信じないとか言うの似合わねえけど、このありふれた毎日が壊れるとかそんなことも考えてなかったわけ。こりゃあ馬鹿らしくなるほどちつとも。不変な毎日を今日も明日も明後日も明々後日も変わらずに進んでくって思ってた。だってそうだろ？まず空から幼女が降ってくるなんてことからありえねえ。あんな化け物だってありえねえ。言霊だってありえねえ。そもそもそんなこと頭の中になかった奴が、いつの間にかここにいるんだぜ？」

すらすらと。そりゃあすらすらと。
こちらを疑ってくる奴にはそれ相応の対応を。混乱するくらいに言葉並べる。

「さて、じゃあ聞くけど」

勤めて、笑顔で。

「嘔吐きな俺は、どこに嘔を吐いたでしょう？」

「はあ…？」

ナイフの力が緩む。

よし、今だ。

「もし、あんたがこの人だったとして、万葉家の次期当主、やどり様にどう思われるかな？自分を助けてくれた人間が、他の奴に物騒なもん突きつけられていたんなら」

「…っ！！」

ようやく意味に気づいたらしい。嫌悪感と微かな同様が、赤い眼に走る。

対戯はそれを見逃さない。嘔を吐くとき、相手をよく見ることが大事なのだ。僅かな隙に、言葉を捻りこむ。

まあこの話は嘘でも何でもないんだけどな、と内心舌を出す。
けれど言葉に、少しやどりを利用してる気がして、なんだか悪い気になる。

「はっ、そんなの…、」

「嘘だと思ってる？」

「…、」

「最初に言ったよな？—これは作り話だって」

「っ、」

「さて、嘔吐きで捻くれものの俺が、作り話をわざわざ作り話というでしょうか？かといって、あんたの言うように俺は嘔吐きです。醜く卑しく愚かなペテン遣いです。けれど、もし、嘔じゃなかったら、あんたはどうするつもりですか？」

「なっ…！！」

驚いたようにアルビノは眼を見開く。

成功、と対戯は心の中でガッツポーズをする。

多分このアルビノは、従者か、それに近い何かだ。

だから、やどりの名前を出され、対戯がそのやどりを助けたことが本当だとしたら、自分のやっていることは万葉家にとっての行為として最低なことだ。

それにすぐ気づいたらしく、アルビノは強い視線で射抜かんばかりに対戯を睨み付ける。その上小さく舌打ち。しぶしぶといった具合にナイフを下げた。

おいおい柄悪くねえか…？つい文句を言いたくなったがそこは堪える。

ここは上手く切り抜けることが大事なのだ。

葉桜のとき思ったが、従者というのは妄信的にやどりを信奉していた。

もしかしたらあれは葉桜限定だったのかも知れないが、一人でもそんなことがあるというなら、無論目の前のアルビノだって例外ではない。

「…誰だ？」

すごく不機嫌そうな顔でナイフを下げたアルビノは、先ほどの質問

をまた対戯に繰り返し問うた。

「人に名前を聞くときは最初に自分の名前を名乗れって教えてもらわなかったか？」

「…」

「すいません調子に乗りました」

無言でナイフ向けられた。まじ怖え。

「えーと…虚室対戯、普通の一般的で日常的な高校生です」

「…普通の高校生がここに来るとでも？」

「…ですよー…」

「…」

「あのさ、俺教えただからお前も言えよ」

「なんで？」

「なんでって…それが礼儀だろ普通」

「なんでボクが君に礼儀を向けないといけないの？」

「…」

うん、こいつ俺のことすげえ嫌いだ。

てかもともしかしい奴だと思われてた上に、まあ、いろいろ言っただから、果てしなく嫌われた。

「おい　　っす！んー？何やってんだー？」

元気な女の声。え？と振り向くと、そこには予想通り女が。

スポーツ少女のような爽やかな笑顔で駆け寄ってくるその人。

多分年上だ。そして美人で。

金髪で特攻服で木刀を抱えていた。

「……！！！！！！……？……？……？」

思考一時停止。

思わず顔が引きつる対戯。ちら、とアルビノを見れば、半眼でその女性を呆れたように見ていた。

……なんで言霊遣いやらそれに関係する奴らはみんな変な奴が多いんだろ……！！

軽く絶望のような感情が湧き上がるのを感じた。

Episode 6 言霊刀、桜、アルビノ（後書き）

新キャラ続々投入です。

対戯くんの『あの人』のこと、早く書きたいなー…。

Episode 7 青き葉に、祝うは楔へと

前略。海外の父さんと母さんへ。

息子は巻き込まれました。

「おおーっ！？あんなになに？やどり様が言ってた子？」

慣れなれしく、木刀で特攻服を着た女が、すごくにこにここと気味が悪いくらいの笑顔でこっちに近寄ってくる。

なんですかあれー。不良ですかー？

泣き出したくなったのはきつともう今までの変人の方々にさんざんな目に合わされたせいだ。

降ってきたり刃物向けられたり殺されかけたり勧誘されたり死にかけたりまた刃物向けられたり。

対敵は全力で逃げ出したくなっただが、そしたらそれでこのアルビノ美少年に不審がられ刺されるかもしれない。

どっちにしろ平穩の道はないのか。

「んー？なかなかの可愛い顔じゃねーか、ちょっとあたしとデートでもしにいかねーか？」

「全力で断ります」

「まあ遠慮すんなよ。おねーさんが奢ってやつからさ？」

「いやあの…、どちら様ですか」

「ん？あーそうか、言ってなかったよな」

にかり、とそれはもう純粹に眩しい笑みを浮かべる。これで服装があれじゃなかったらドキッ みたいなことになってたんじゃなかるうか。

…服装以前にここにいる人間にそんなラブコメはあるのだろうか。家にあるアレなゲームがなんだか愛おしくなってくる。

「あたしの名前はー…」

「姉さあああんつつー!!」

あーまた聞き覚えのある声がー。

すごく対戯は振り向きなくなかったが、しょうがないので首だけ向けると、全速力で走ってくる黒髪ポニーテールの大人びた顔の中身中学生のあの子。

「おおー葉桜ー」

「まったく！対戯様になに絡んでるの！！失礼なこと言っでないでしようね！」

「まったくよお、葉桜は真面目すぎんだよ。近くにイイ男がいるんだったら誘惑しろ誘惑。お前のその見た目ならオールオッケーだつて」

「姉さん!!」

会話を聞くに。

聞きたくないけど聞いた結果、この時代遅れのヤンキーみたいな人は、

「あ、自己紹介まだだったな！あたしの名前は楠木青葉あおば言っただよ！よろしくな!!」

あの真面目っこの、姉、とか…、

「この展開ゲームで見たことある…」

対戯は深くため息をついたのであった。

「ああああ、そうじゃなくて！対戯様に用があるのでした！！」

ひとしきり姉に説教をしていた葉桜。真面目に聞こうとしない姉にまた腹を立て、その無限ループに陥ろうとしていたが、自分のすべきことを思い出したようで、近くにいた対戯に大きく声をかけた。

ああやっぱり俺に来るのね、と半ば諦めのように苦笑する。ほろりと涙が零れそうだった。

ちなみにあのアルビノ美少年はいつの間にか消えていた。対戯のことは葉桜とのやり取りで危険人物ではないと判断したのだろう。ああ名前聞いてないな、と後から思い出す。

「こちらです」

それから、葉桜に案内され、この大きな屋敷の中を歩いている。どうやらここはやはり万葉家の屋敷らしく、先ほど大きな、と言ったとおり、でかい。それなのに埃一つない。高そうな掛け軸や壺がいたるところにあり、なんというか…金持ちの屋敷の雰囲気をぶんぶん漂わせている。

「この部屋にどうぞ」

葉桜が対戯に声をかけ、扉を横にすつと開く。対戯がそこに入れば、中には、一人の女性と若い男が。

女性の方はそれはにこにこ笑っている。けれど男の方は、すごく対戯を睨み付けている。

…なんで俺男の方には嫌われるのかな…。

先ほどのアルビノ美少年のときといい、どうにも万葉家の男は自分が嫌いなのだろうか、とぼんやり思う。もういつそどうだっていいのだけれど、ついため息を吐きたくなる。

「あら、あなたが対戯くん？やどりがお世話になってますねー」

「あ、ああ、はい…」

やどり？呼び捨てってことは従者じゃないのだろうか。対戯が首を傾げると、続けて女性は言う。

「初めまして、やどりのやどりの母、祝いわいと申しますー」

あーなるほど母親母親ねえ…、…ん？母親？

改めて対戯は母親と名乗る女性を見る。

長い髪は緩やかにカーブしており、白髪のようなものは無縁に思える。

肌も白く綺麗で、しわ、シミ、たるみ一つもない。

その体も同様。胸大きい。

確かやどりには兄がいたと聞いていた。

それで、二人の子持ちと仮定して、

「…嘘だろ」

「あら？」

「こんな若くて綺麗な人が母親なわけあるか！！」

…盛大に突っ込んだ。

その瞬間、その部屋の中にいた男に強く睨まれた。けれどその男は、いかにもな麻呂眉に、侍のように、短い髪ながら高く括っており、大きめの目なので、それほど怖くもない。どうにも同年代のようだ。

「あらあらあら、若くて綺麗？嬉しいわぁー」

「奥様、喜ぶんじゃなく、注意した方が…」

「奥様っ！？違っだろ！？子持ちに見えねえっ！！絶対詐欺だ！」

「あらあら、もしかして私口説かれてるのかしらー」

「奥様…」

対戯は若干の混乱で、自分が恥ずかしいことを言ってることに気づいていない。

けれど目の前の奥様といわれた人は、20代…いや、20歳程にしか見えない。

若くして奥様？二人の子持ち？

「もう、しょうがないわねー？ちよつとこっちにいらっしやい？」

「へ？」

「耳貸して？」

「はぁ…」

対戯は言われたとおりにする。そしたら、祝が近づき、耳元に吐息を混ぜ込みながら何かを呟いた。

…。
…。
…。

「…人を見かけで判断するもんじゃありませんね。すいませんでした」

「わかってくれればいいのよー」

何を言われたか知らないが、急に対戯の口調が改まり、もう騒ぐことはなかった。

それを葉桜はどこか達観した様子で眺めている。
慣れているのだろうか。

「それで、俺がここに呼ばれた意味ってなんですか？」

「あ、そうそう、そうよねえ。まずはねえ、お礼を言いたい。やどりを助けてくれてありがとう」

「…いえ」

「それで、言霊遣いになる気はない？」

「いきなり話が飛躍した気がするんですけど」

あの怪しげに笑うサングラスの女性の姿が脳裏を過ぎる。いやいやいや、とそれを振り払った。

女の人はいまだにことにこと笑っている。いや、そんな笑顔になられたって、そんなの…。

「お断りします」

「どうして？」

えー。

「いや、言霊遣いになれと言われましても、俺、一般人ですし、ただの高校生ですし、」

「ただの高校生が言霊を使えるかしらー」

「いや、あれは…」

「たまたまとか、偶然であるものなのかしらねえ」

顔は笑顔のままで、こちらに迫ってきている気がする。

あ、この人強いわ。直感的と言うか確信的というか、そう対戯は思う。

…なんでこう面倒くさい女ばかりなのか…。

「まあ、その話はひとまずいいわー、でも、やってほしいことがあるのよー」

「やってほしいこと…ですか？」

「そう身構えなくてもいいの。ただねー少し実験？というか…、リトマス紙って知ってる？」

「…はい？」

「まあねーそれみたいなものよー。葉桜ー」

「はいっ！ー」

どうぞ、と葉桜が対戯に渡してきたのは一枚の正方形の白い紙。和紙のような手触りだが、なんとなく違うような気がする。なんですかこれ、と視線だけを祝に向けた。

「これねー、性質を調べる紙なのよー」

「…？酸性とか、中性とか、ですか？」

「違うわよー、言霊遣いとしての性質」

「…なんでそんなこと、」

「いいじゃない！お試しよー。やって損はないわー」

「…はあ、どうすればいいんですか？」

「あのねー、その紙を両手に挟んで強く念を送るのよー、そうすればいいのー」

「強く念って…」

言われたとおり対戯は、両手に紙を挟み、強く目を瞑る。

念…、念ってなんだよ。どういふもんだよそりゃあ。言われた言葉を対戯は考える。

強い念…、強い感情？良いものだから悪いものだからわからないけれど、そういうものが念と呼ぶのだろうか。

感情…、念…、…………。

『対戯』

…あの人。

「そろそろいいでしょう。開いて見せてください」

しばらくたつてから、そう祝が言った。対戯は言われたとおり、両手を開き、中の紙を見えるように出す。

え、と後ろで小さく戸惑った声を上げる葉桜。祝もぱちくり、と大きく目を瞬かせて、部屋にいた麻呂眉の男も、驚いたように眉毛を吊り上げた。

桜。

紙一面が桃色に染まり、桜が描かれていた。うわ、まじでか、と息を呑む。

紙を触っていただけで、本当に記憶の深くに根付いてるあの光景が反映された。改めて、現実的でない力を目の当たりにして、思いっきり現実逃避したくなる。

「…予想外ねー」

「はあ…何がですか？」

「だって、普通紙には、文字が浮き出るはずなのに、あなたの紙には、絵が浮き出たのですから」

「えー…と、おかしかった、ですか？」

「ええ。そもそもその文字で判断するものだけれど、これはどうすれば…、あの子以来ねえ。絵が浮き出たの…。あの時も困ったわあ」

昔も自分のように絵が出た人がいたのか。なら別に、おかしくはないのだと…思いたい。

いやいやいや、普通は文字が出るとかいったて知りませんよこっちは。

「ますます言霊遣いにしたくなつたわあ」

えええええ。

「勘弁してくださいよ…、そろそろ帰りたいんです」

「あらあら、確かに親御さんも心配してるでしょうねえ」

「いえ…親は今海外出張中なんで…」

「あらーならまだここにいてもいいわよねえ」

しまった、墓穴掘った。どうもこの人だと調子が狂う。

にこにこと絶えず笑みを浮かべてるのを見ると、敵いそうにないんじゃないか、と思えてくる。

「…奥様」

ここで、今まであまり喋らなかつた男が、口を開いた。

鋭い眼光で対戯を睨みつけながら、丁寧な口調で祝に話しかける。

「なあに？^{みそぎ}楔」

「わざわざこのものに執着する意味がわかりかねます。このような

やる気のないものに任せるより、この家のものでさらに鍛錬をしていくことの方が大事だと思われるのですが」

グッジョブ。とりあえず楔と呼ばれたあの男に親指を立てたい。

いくら内容が、こいつやる気ねーから俺らでやっちまおうぜ、みたいなものでもすごく嬉しい。

…なんだかやるせなくなってきた。

「でもねえ、わかってるでしょう？ 長い年月、万葉家は言霊遣いの名家として繁栄してきた、けれどねえ、時は変わらずに過ぎて行き、対戯くんのように、言霊遣いという存在を知らない人間ばかり。不思議な力というものは科学とかいろんなものに押しつぶされて、忘れ去られていくの。だから、私は少しでも他の人に理解ある人間がほしいの。面白可笑しく広めるような人間とは違い、意味を正しく理解し、私たちの生きている証を後世に語り継いでくれる人が」

「…奥様、それは…」

「確かにねえ、言霊と言うものは大きく広めてはいけない。言霊と言う概念を理解してしまい、間違った使い方を、特に鍛錬もなく、無意識、無自覚のうちに発してしまう人が出てきてしまうから、そういう決まりを作った…、けれどねえ、それは時としてむなしく感じるものよ。私たちがいるということを、言霊遣いという人間がいることを、誰も気づいてもらえないのだから」

「あ、あの、ちょっといいですか？」

「あら、なあに？ 対戯くん」

「いや、あんたたちがそこまでいう…言霊遣いって、いったいなにをしてるんですか？」

「あら、知らなかったの？」

「え、ええ、まあ…」

「そうねえ、説明しなくてはねえ」

対戯の疑問に快く答える祝。
楔はむすつと黙っている。

「しいていうなら…鬼退治かしら」

「…は？」

「だから、桃太郎でいう、鬼退治をしてるのよあ」

「……」

「あ、でもねえ、宝は貰えないのよ、残念ねえ」

「…はい？」

「奥様！俺が説明しますから！」

我慢ならなくなりました楔さん。

嫌われているけれどこの人はいい人だな、と対戯は思う。絶対いい人だ。すごく嫌われてるけど。
まあ嫌われるのは慣れてるし。

「鬼退治、…まあ間違っではない。むしろ、スズメバチを駆除するようなものだ。鬼と言う存在は…、知らないか？」

「…鬼、といわれても、そんなの昔話の中でしか…、」

「見た目は鬼に似てない。総称してそう呼ぶだけだ。あいつらは人の感情。闇。そのものだからな」

「…？どういうこと？」

「人の感情の塊なんだよ、鬼という存在は。嫌悪、憎悪、殺意、嫉妬、悲愴、崇拜。まあ、強い、…強すぎる感情が鬼を作り出す」

「いまいちイメージできないんだけど…」

「つまりだ、よく言うだろう？人を憎しみにより殺す人間は、それ相応の感情があったわけだ。自分の手首を切る人間はそれ相応の悲しみがあつた…、それほどまでに強い感情には、何かしらの力が宿る。それが鬼だ」

鬼。…鬼。

対戯は顎に手を当てて考える。強い感情。
今更もう、嘘だとか、妄想だとか、本来の自分であつたら信じよう
もないものが、すんなりと体に浸透する。

これはもうしょうがない、と諦めを持って、今の楔の説明を吟味し
た。

あの紙みたいなものだろうか。

強く念じればあの紙に桜の絵が描かれた。つまり、強い念や、感情
と言うものはなんらかの感情を及ぼす。

つまり、あの紙が鬼として、考えてみればいい。

…強い、感情？

いや、と対戯は考える。

知っている。強い感情を、俺は、この目で、目の当たりにした。

つまりどういうことだ？それは、つまり、鬼と言う存在が、作られ
ていたんじゃない？

「…俺、そういう鬼がでてるの、見たことないんだけど」

「当たり前だ。鬼は言霊遣いしか見ることが出来ない。もし常人に
見えていたら今頃町中は大混乱だ」

「結構そこらじゅうにいるもんなの？」

「否定はしきれない」

髪を真ん中に分けていて額が広がったので、説明中、思わずそのデ
コをつつきたくなるのを耐え、鬼と言う存在を改めて考える。

考えてみれば見るほど、まさにありえないと言いつがなない話だ。
鬼？なんてファンタジーな、と一笑できたらどれだけいいか。

一般的な俺の感性よ、カムバック。いい子だから戻ってきてくれ。

はあー…と大きく息をつき、対戯は祝に向き直る。

「知りたいことも知れたことだし、俺、帰ります」

「あらー、こちらの情報を与えるだけ与えて、タダで返すとても？」

え、？そういう展開？」

「まあ冗談なのだけど」

「冗談なのかよ！」

「そんな怖いこと私に出来るわけじゃないー」

「その割にはすごく似合ってたんだけど…」

「何か言ったかしらー？」

「いえ、別に」

「でもねえ、帰ってもらわれると困るのよー？」

「はあ…、なんですか？」

「あなた、言霊を、使ったでしょう？」

ここで初めて祝から笑顔が消え、困ったような顔になった。

「もし、無意識に、無自覚に、一般的な場所で使われてしまうと、それはすごく困ることなの。こちら側にも、あなたにも…」

「いや、まさかそんなこと、」

「あるのよねえ。あなたは無いと言い切れるのかしら？」

う、と対戯は言葉に詰まる。

あのときは、無我夢中で、とにかくやどりを守らなければいけない、
思っていた。

けれど、それこそ、無意識であり、無自覚である。

言葉は武器だ。それが具現化してしまう力、言霊。

誰かを傷つけてしまわないといえるのだろうか？

「正直ねえ、こちらとしても予想してなかった事態なのよ。やどりの話を聞いてもねえ、そうそう考えないわ。いくら概念を理解したからといって、言霊を遣えるようになる人間はごく少数。私たちは代々言霊遣いの血統だから、そういう人をあまり見ないのよ」

「つまり俺は…結構はた迷惑な存在ってことですか」

「なんだ自覚はあったのか」

「黙れ楔」

「なっ…！？お前！敬語を使え！」

「あ、悪い。あんたどうにも童顔だから」

「ぬなっ！？人が気にしてることを…！！ば、僕は15歳だ！ちゃんと15歳だからな…！！」

「あ、俺と同じ年だろ。敬語いらねーじゃん」

「貴様！お前その態度は…！！」

「あらあらすつかり仲良しさんねえ」

「奥様、なぜそう見えるのですか…」

「葉桜、用意お願いねー」

「了解いたしました…」

やれやれ、と首を振りながら葉桜は部屋を出て行く。

あれー、と対戯は微かな暗雲に似た何かが背後から迫ってきているのを感じた。

…用意とは、なんでしょうか。

聞きたくない聞きたくない。対戯さんは聞きたくないよー。けれども、目の前の掴みどころのない女性には、勝てない気がする。これこそある意味絶体絶命というんじゃないでしょうか？

「ちようどねえ、今日は土曜日でしょう？ラッキーねえ。今のうちに言霊の制御と叩き込んでおかないと」

「あ、あの、俺の選択肢は…？」

「学校の友達にふとしたときに言霊で傷つける可能性があるとしても、貴方は拒否するのかしらー」

「う、」

「楔ー、頼んだわよー」

「…やはり僕ですか僕なんですか奥様。話を聞いてるうちにまさかと思っていました、僕なんですな奥様」

「あら？貴方も拒否するの？」

「滅相もございません」

即答。やはりこの女性は最強だ。もうほぼ諦めきつた頭の中でそう思う。

わかった、もう降参だ。おとなしくいうとおりにします。ええしますとも。

きつと外堀から埋められてくんだ。逃げられないんだ。

グッバイ、俺の日常。

+++++

「しろやん調子はどうお？」

「んー、よくわからないけどなんか今一瞬盛大に突っ込みたくなつたんだけどなんだろうね」

「んー？なにそれ」

「ところで君また来たの？」

「そりゃー友達が入院してるんなら来なきゃねー」

「友達…？」

「うんともだ…え？もしかしてそう思ってたの俺だけってパターン？え、なにそれ辛いんだけど、え？」

「対戯は来ないのかなー」

「無視っ！？無視なの！？」

となりでぎゃんぎゅん騒ぐ京を無視して、代夜はふう、とため息をついた。

最近、対戯の様子がおかしいことには気づいていた。

長い付き合いだ。気づいてはいたが、わかっていた。自分に知られたくないものだったことに。

この親友は、危険なことには決して自分を関わらせようとはしない。嘘で平気で人を傷つけるくせに、その嘘で平気で傷つけた人間を守る。

そんな対戯だからこそ、自分は友人でありたいと思ったのだ。

そして、自分は、彼の嘘がわかる。いや、彼だけではない。人の嘘がわかる。自慢できるような特技ではないが、それだからこそ、気づくものがあつた。

けれど彼だけは、嘘吐きでありながら、他の人間と違っていた。

わかるからこそ、代夜は、対戯を理解している。

でも、だからこそ、辛いこともあるのだ。

この怪我も、彼は気にしてしまっているようで。

「大変だなー…、」

「なにがあ？」

「いいや、なんでもない」

おそらく、だけれど。おそらく、自分の推測であるが、対戯は、変なことに巻き込まれている。

あのひねくれものの癖に、いやに優しいところがあるあのペテン使い。

話してはくれないんだろうなあとはぼんやりと思う。

さすがに嘘は見抜けても心を見ることなんて出来ない。でも、わからないからこそ、もどかしい。

「なーなーしろやん、悩み事か？」

「んーそうだねえ」

「対戯もなんか変な感じだったしー、なんか悩み事でもあるのかなー。俺またぼっち？辛いうえに寂しいんだけどー…」

おや、と代夜は京をまじまじと見た。

なんでか対戯に懐いてるのは知っていたけれど、ちゃんと理解してくれてたんだなあとここで思わず実感する。

…自分は彼の母親か？と苦笑もしたが、それでもやはり、嬉しいと思う。

そのうえ京は案外自分のことも好意的に思っているのも確かだ。この少年は本当に素直に喋る。それはもうたまにイラっとくるほどに自分は嘘をつかないが、そのぶん本音を隠す。言わないけれど、自分も、対戯も、京を好ましく思っているのだ。たまにうざいのは確かだけれど。

「…んー？今しろやん腹の中で黒いこと考えてなかったー？」

「あはは」

「え、なんで笑って誤魔化したの？え？え？」

「あはははは」

「しろやんんんっ！？」

「あー隣のベッドに眼帯美少女とか来ないかなー」

「うわああああ誤魔化されたああああ」

「病院では静かにしなよ」

「うつつ諭された…。それにしてもしろやんも、対戯も結構ギャルゲ好きだよね…、キャラに合わないんだけど」

「失礼な。エロゲも好きだよ」

「うん、真面目に言われても困るな…」

呆れたような顔で返された。いいじゃないか別に。好きなんだから。そう言おうとした瞬間につきん、と頭が痛んだ。あー、いつもの。と慣れた痛みに半ば諦めに似た気持ちを持つ。これが案外痛むのだからたちが悪い。

「ん？しろやん頭痛いの？」

「え、あ…まあ、うん」

え、気づくの？

慣れすぎて頭痛が起こってもすっきり顔に出さなくなっ、対戯以外気づかなくなったのに…、気づいた、だと？

京という男はそういうことに鋭いんだな、とつい感心する。

「いつものことだから平気」

「え、頭痛もちなの？大変だなーしろやん。痛いの痛いのとんでけーっ、てか？」

「どうせなら美少女にやってほしい」

「…顔に似合わずしろやん女の子好きだよね…」

「君、男にやられて嬉しいの…？」

「あ、俺の方が失言だった。女の子がいいです。心配そうな顔で、一生懸命言ってほしいです」

「いい線いってるじゃないか」

頭はずきずき痛むけれど、原因もわかっているし、特に気にすることもない。

酷いときは吐き気もするし、倒れた時だってあったけど、それはもともとの病弱さも原因だと思う。

情けないが、自分の体は病弱な上に貧弱で貧相で…あれ？なんか泣きたくなってきた。

「体の方は大丈夫なん？」

「うん、そこまで深い傷じゃなかったからすぐ退院できそうだよ」

「不審者に襲われたんだって？怖いなー世の中は。対戯は無事だったらしいけどさ、もしかしたら、明日二人ともに会えなくなるかもしれないかったじゃん。おっそろしーわ、そんなの」

「ほんと君僕らのこと大好きだよねえ…」

「おう！！」

「…そうはつきり言われると照れるんだけど」

光は輝き空は青い。当たり前前の当たり前で当たり前でしかない目の前の光景。

ふとたまに考える。僕がそう思い込んでいるものは、他の人にとっては、まったく違うように見えるのではないかと。

昔の絵描きたちがそうだった。彼らには、彼らの見え方があった。彼らには彼らの世界があった。

そう考えてみると、僕のこの目の前にあるものが、全て偽者のような気がした。

頭の中に降り積もっていく、偽者かもしれないもの。輝く光も、青い空も、もしかしたら酷く汚れたものかもしれないと。

だから、けして、目の前にはないものを否定してはいけない。そう、この場所にいない彼のこと。

「はあ…」

京が帰った後、病室で代夜は顔ごと枕に沈めた。

頭がずきずきと痛み、苦しかったが、それでも思考の海へと身を投じる。

代夜は対戯と違い嘘をつかない。
だから隠す。

それが、なににもならないとしても。

『黙れ。代夜、…関係ない一般人巻き込んだ拳句どういっつもりだよ。狙うのが俺だけならまだ良かった。それなら、まだ良かった。むかつくけど、イラつくけど、俺だけなら、まだ、良かったんだよ』

『ああ俺のせいだ。俺が変なことに関わったからこうなった。俺のキャラじゃないことをやって、俺は何やってたんだろうな。…でも、こいつは、代夜は、何も関係なかった。俺一人だけ、関わったのに、なんで代夜まで巻き込まれる必要があるんだよ、どうして、』

「…いたいなにしてるんだよ、対戯」

小さな呟きは、そのまま静かな病室内に溶けて消えた。

Episode 8 言葉は鬼と成りて

「では今から非常に不本意だけれども、この白樺^{しらかば}楔^{くわ}が、お前の鍛錬をつけることにする」

「わーぱちぱちー」

「…やる気ないのか」

「…あると思うのか？」

「……奥様に悪気はないんだ」

連れてこられたのは道場のような場所だった。周りの壁は木の板で張られており、床は畳。掛け軸には一球入魂と書かれていた…あれ？おかしくね？

少なくとも、柔道や空手の練習をするのには最適な場所だろう。俺何しに来たんだっけ、と一瞬対戯は思う。まあわかつている。わかっているのだが、こうもほとんど拍子に自分の望まぬ話が進んでいくと、どうもこうも現実逃避以前に思考が遮断されていく。

知っているさ、無駄だということに。なんだこれ、泣けてくる。

「では、まずは簡単な言霊の出し方だ…、ほら」

「ん…紙？」

「そう、それを浮かせる」

「え、なんだよそれ、超能力？」

「こ・と・だ・ま・だ！！言霊のことは知ってるだろう？意味を持つ言葉は力となる。言葉の力は外部にも作用する。そういうことだ」
「俺にはさっぱり理解できねえんだけど…まあいいや、つまり浮か、とか言えればいいのか？」

「そうだ。まあだが、言葉の中に意味を持たせないと作用しない。

考えるんだな」

つまり浮けって考えながら言葉を発せってことだな、となんともなく理解して、対戯は口を開く。

「うけ」

しーん。

…。

……。

「この紙おかしいんじゃない？」

「んなわけないだろうが！！」

ぺっちーん、と良い音をたてて対戯の頭が叩かれる。

いつてえな！と対戯が文句を言えば、お前が可笑しなことをいうからじゃないか！と怒られる。

「あのなあ、言葉の音は確かに『うけ』、となるがな、言葉は意味を持つと言っただろ？うけにもそれぞれの意味がある。『浮け』だけでなく、『受け』、『請け』、『享け』…。これほどまでにたくさんさんの意味を持っている。言霊遣いはそれを正しく理解し、言葉を遣わねばならない」

「ええー…めんどくさ…」

「もし言葉が、…傷をつける言葉が、力を持ったとすれば、どうする」

「……」

「大切な人を、傷つけることになるんだぞ？」

そう言った襖の顔は、どこことなく暗く、何かを堪えているような気がした。

はあ、と対戯はため息をつきなくなる。だから嫌だったんだ。重いもんなんて、背負いたくねえんだよ。

「…『浮け』」

ふい、と紙が音も立てずに目の前に何の支えもなく浮き上がる。

正面の襖が微かに目を見開いた。

それに対戯は特に感情の籠もらない目で見つめながら、内心舌打ちをする。

…面倒くせえ。

言霊にも、結局のところ甘い自分にも。

「…ふん、出来るじゃないか。じゃあそれを前に進ませろ」

「え、あー…っと、『前へ進め』」

と、見せかけて後ろののにバックしたり。とか。
なんてな。

ビュッ

「え」

「あ」

前に進むはずだった紙は何故かすごい勢いで逆方向へと進み、壁に突き当たり、へらりと情けないような姿で地面に落ちた。

…あれ、俺前に進めっていつてなかったっけ？

「…もう一回だ」

どこから取り出したのか、また紙を取り出して渡してくる楔。
どことなく、顔が引きつってるように見えるが気のせいなんだろう。
そうに違いない。

対戯はその紙を持ち、先ほどと同じように浮かせて見せる。
それからまた、前に進むべき言葉を…。

「『前へ進め』」

の振りして後ろへ行けばいいのに。

ビュッ

「…」

「…」

「あはは…」

「…あえて言おう」

ぴくぴくと、眉間に皺を寄せながら、楔は言う。

「な・ん・で！！また後ろに行くのだ！！！」

「えーと…浮けと見せかけて後ろー、とか思ってたから…？」

「ただ捻くれてるんだ貴様あ！！！」

盛大にツッコミを入れていただきました。

いやいやいやいや、と対戯は思わず自分でも脳内でツッコミを入れる。

確かに嘔吐きですよ俺。ええわかってます。

だからといって…言葉まで？

先ほど意味を乗せて放つ言葉が言葉として成り立つとか、そんな感じのことを言ってたけど…、それ正しく言わなくてもいいの？

「どんだけ性格歪んでるんだ…。普通言霊は言葉に沿って出てくる。なのに、お前は…言葉じゃなく、思った本当の意思に沿って言霊として反映された。なんていうか…本当性格悪いな」

「うっせーよ、そこまで蔑むな馬鹿」

「っていうか性根捻じ曲がってる。普通ならありえない。なんで言葉通りに言霊が作用しない。どんだけおまえ捻くれてるんだ。思春期なのか？」

「お前も同じ年だろ」

「あー…はあ、もうどうでもいい。それはそれでいいでしょう。お前はかなり性格が悪いからな、とりあえず制御についての訓練を行う」

諦めたように怒っていた声を落ち着かせ、改めて懷から紙を取り出した。

「いったい何枚持ってるんだ、と突っ込もうとしたがやめる。どうせ何言っても無駄だ。」

「ならやるだけのことはやって、さっさと帰ろう。」

ふと、祝の食えない笑みが脳裏を過ぎったが、気のせいだと自分に言い聞かせて目の前のことに集中した。

+++++

「よーよーその坊ちゃん」

「はい？」

代夜のお見舞いの帰り道であつたので、特にこれからの用事もなく、いつも首にかけているヘッドフォンで音楽を聴きながら、ぶらぶらと散歩でもしようとしていたころだった。

人通りのない道、どこからともなく人の声が聞こえたので、自分のことか？と思い京は思わず返事をした。けれど、振り返っても、人の姿はない。

「あれ？聞き間違い…」

そう呟いて前を振り向いた。

瞬間、先ほどの光景とはかけ離れてものが。

「こつちだ」

「え、えええええっ」

すぐ目の前に巨大なサングラス。思わず京はよろけるように二、三歩離れる。

「驚きすぎだろーが」

「お、驚くんですけどそりゃっ!？」

京が怯えながらまじまじと目の前の女性の姿を見る。

すらりと高い背に、ウェーブした黒髪。大人びた色気を放ちながらそこに立つ存在。

おや、と京は目をぱちくりさせる。

めっちゃ美人だ、この人。

「ところで綺麗なおねーさん俺になんの御用ですかー？」

がらりと態度を変えて笑顔で話しかける京。そんな姿に明らかに呆れの色が女性から浮かんだが、構わずに京はにこにことしている。

「もしかしてお茶のお誘いとかー？」

「いや、悪いけどあたしはガキには興味ねえんだよ」

「そんな、俺もう高校生ですよー？」

「あたしからみたら情けねえヘタレにしか見えねーよ」

「ひどっ！？」

俺泣くよっ！？とたいしてショックでもない風で大袈裟なりアクションをする京。京自身も冗談のつもりだったのだろう。けろっとした顔でへらりと笑う。

今までつけていたヘッドフォンを外し、ちゃんと女性の話を聞くような姿勢を見せた。

「それで？道案内かなんかですか？綺麗なおねーさん」

「いんや、聞きてーことあつただけだよ」

一瞬間を置いて言う。

「お前虚室対戯を知ってるか？」

「ん、対戯？」

「まあ知ってるよな」

「はい、友達ですけどー、対戯がどうかしたんですか？」

首を傾げながら京はあの嘔吐きの友人のことを思い出す。

「んまーちよつとあいつに興味があつてなあ」

「え！？さっきガキには興味ないって言ってたじゃないですか！！」

「あのなあ、そういう意味じゃないっての」

懐から煙草を取り出して口元に銜え、ライターで火をつける女性。京は、体に悪いですよ、と言ったが軽く一睨みされ、困ったように笑う。

「対戯のことを知ってるんですか？」

「ああ、ちよつとな。面白い奴だな、と思って」

「ええ、対戯はほんつと面白い奴です！」

「おや、」

女性がやり、と口元に嫌な笑みを浮かべた。

いまだ純粹ににこにこ笑う少年へと、軽い悪戯心が生まれた。

「随分あいつのこと気に入ってるんだな」

「そりゃ友達ですから」

「あいつは嘔吐きなの？」

「はい？」

「あいつの言葉全てが嘔ても、お前はあいつを信じられるか？」

きよとん、と驚いたように京から笑顔が抜け落ちた。

ばちばち、と二、三度大きく瞳を瞬かせながら、女性の姿をそこに映した。

にやり、と女性は、…縁は笑う。

「あたしはあいつが嘔吐きだって知ってる。そりゃあ見事な嘔吐きだ。けれどさ、お前嘔吐きつてのを信用できるか？嘔吐きつて奴は甘い言葉で囁きかけて落とすところまで墜とす。這い上がれないくらいまで深くな。あたしはそういう奴らをたくさん見てきた。それでも信じられるか？」

悪魔の睦言。人を迷わせる。

何かを試すような輝きをその瞳に宿しながら、あくまで楽しそうな笑みを絶やさな

縁^{えん}。人と人との縁。それは本当に存在し、ここに在ると証明できるものであるのだろうか。

あの嘔吐きの少年が、そんなものを作れると、

「…何言つてんですか？」

けれど、心底わからない、とでも言いたげに、純粋な疑問の言葉が、ただ当たり前のように京から零れる。

「信じるとか信じないとか、それ以前ですよ」

「は？」

「俺、あいつのこと好きですし、嘔吐かれても、友達だと俺は思ってます」

につこりと、笑う。

「信じる理由なんて、そのくらいで十分じゃないですか」

そこには表も裏もなく、ただ、当たり前で、日常的で、不変的で、真実のように。

それこそが濁りもなく、京の一部の縁として、ただ繋がっている。悪魔の囁きなんて気にもしないで。

嘔吐きと言つことを気にも留めないで。

たった一つ変わらないことのように。

「あいつが俺のことどう思つてようが、俺はあいつを友達だと思つてる。これ以上に、信じる理由がありますか？」

「……」

信じきっている。あの嘔吐きを。

予想外の答えに縁は一瞬呆けたが、すぐに口元に、面白いものを見たかのようなあの笑顔を浮かべる。

けれど、どこことなく優しげである気がした。

虚室対戯と言う人間は、漫画の主人公のような人気者のような人間ではない。

けれど、近しい間のものは、これほどまでの信頼感をみせる。

これじゃあの襲われたという親友君も似たような答えが返ってくるかな、と縁は煙草の煙を吐き出しながら考える。

先ほどまで、対戯の、学校での交友関係を縁は辿っていた。対戯のこと聞き込み、それからあの親友とやらに会いに行こうとおもったが、

「その必要はなさそうだな…」

「あれ？何か言いましたか？」

「いんや、あたしは帰るよ。ありがとな」

「ええー…行っちゃうんですか綺麗なおねーさん…」

残念そうな顔の京を尻目に縁は悠々と帰路に着く。

ああ、そういえば、と思考の淵で考える。そういえば、あいつの記憶を『消して』なかったな。

怪しまれないように証拠は残さないつもりだったが…、まあ面白いにやり、と笑う。

せいぜい焦るがいいさペテン遣い。

+++++

男が悪い男が悪い男が悪い男が悪い。

そうだ、全て男が悪いのだ。

そうだ、そうなのだ。男という存在全てが悪いのだ。殺してしまおう。

それがいい、それでいい、そうしなければならぬ。

憎い。男が憎い。

鈍く赤い光を灯した瞳が、横になった三日月型に歪む。

壊れた人はもうヒトして生きれるか。

言葉に壊れ、崩れた心。溢れた感情は声に乗り鬼と化す。

「ヴアアアあああ嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼！……！」

黒い霧が立ち込める。叫んだ痛みによる声は、一つの形を成す。憎い。憎い憎い憎い憎い。冷たき感情の伴う声は、その体と共に、現れる、鬼。

殺せ、男ヲ。

++++++

「あーあ、綺麗なおねーさん行っちゃったなー」

残念そうに唇を尖らせて、京はため息をついた。

お近づきになれるチャンスだったのにーとぶつぶつ独り言をしながら、散歩をするという言葉のまま、周りの景色を見ながら歩いていた。

ちょうど空は雲一つなく晴れの、良い天気だった。うん、と伸びをする。

「でも綺麗なおねーさんに会えたし、今日は良いことあるかなあ
ー」

少し気分を上げながら、大きく空を仰いだ。

暗いのは苦手だ。明るい方が良い。

だから、早く対戯の悩みが解決して、代夜も退院すればいい。

ヘッドフォンの音量を上げる。最大音量まで合わせて、音楽をがんと響かせた。

凄まじい音が流れているのに、特に辛そうな顔もせず、悠々と歩く。代夜いわく『今時の子は…』なのだが。

ロックバンドの演奏と溢れてくる英語。それを聞きながら歩く京にはわからない。

後ろから来るものに。

ゆっくりと、後ろから、向かってくるものに。

+++++

「もうさ…やめていいか…？」

「だ・め・だ」

「あのさあ…そのさ、制御の練習さ、なんで…、針に系通すことなの？」

「無駄口叩いてないでやれ」

「納得いかねえ…」

一方その頃対戯は、いまだ楔と制御の特訓を続けていた。

その内容は、小さな針に糸を通すというだけである。特にどうしてなのか理由も教えてもらっていないので、手先が特別器用でもない対戯は、イライラしながら精神をすり減らし、この行為を繰り返している。

通した針も20本越えた。ねえこれ無駄じゃね？帰ってよくね？

「ほら、早く続けろ」

冷たい目で楔は対戯を急かす。

20本。20本だ。この面倒くさくその上役に立つかわからない行動をもう一時間も続けてきた。指に針が何回も刺さった。

もうイライラも最高潮に達してきて、ぷつん、とどこかでなにかが切れる音を聞いた。

何遠慮してたんだ俺。帰ればいいじゃん。

ぴりりりりり…

「…ん？」

急に室内に携帯の音が鳴り響いた。

対戯がおや、と懷を探ると、ぴかぴかと光を発しながら鳴り響くそれがあつた。

楔が電源を切つとけ、と言わんばかりにわかりやすく眉間に皺を寄せたが、お構いなしに対戯は電話に出る。

もしもし、とお決まりの言葉を言ってから黙り込み、時折頷きながらしばらく話を聞いている様子だったが、その顔がだんだんと強張っていく。

そろそろバレてる頃だろうか、と能天気を考えながら、携帯の通話ボタンを長押ししてみる。

するとぴりり、と発信音が、まるで電話のかかってきたときのよう

に流れた。

「こういう機能って便利だよなー」

それはこういうときのために作られたものではないのだが。

「でもなんだかまだ嫌な予感がすんだよなー」

こういうのってよく当たるから嫌だ、とぶつぶつ呟きながら家への進路をとる。

あの時間から開放されたことによって、少しだけ対戯の気分は上がっていた。

なんで針に糸通すのを延々続けなければならないんだ、ふざけてんだろ。

もういつそ、帰って寝よう。そうして頭の中を整理しよう。

今日のことはやはりあまりに鮮明すぎて忘れることは出来ないかもしれない。またあの言霊遣いとかなんやらがやってくるかもしれない。

けれど、やはり自分には平凡が一番なのだ。だからひとまず家に帰ろう、と思う。

いや、その前に親友のお見舞いにも行こうか、と考え直し、進行方向を変えようとした、そのとき、

ぞくり

背中に悪寒が走った。え、と立ち止まる。

なんかやばい、と、ただそれだけの『予感』が瞬間的に体の中を駆

け巡った。

いや、気のせいだろ。

どうせ気のせいだ。

そう自分を納得させて、先に進もうとした、が、どうにも体は動かない。

…悪い予感ほどよく当たる。

そして、ここ最近の出来事を思い返し、嫌な予感、と考えて、思いつくのはそれはただ一つのことだ。

不可思議な体験をしてきて、言霊をなぜだか使えて、限りなく科学じゃ説明できないことを何度も経験したばかりだ。

予感だって、気のせいにしたらいけないんじゃないか。

「…ちっ」

今日はやめよう、と決める。そうだ、やめておけばいい。
面倒ことはもうたくさんだ。

ぴりりりりり…

「…ん？」

今度は本物の電話。嫌な感覚が脳裏を掠めたが、開いてみれば【芙蓉京】という名前が出ていた。

なんだ、と安心のために舌打ちをしてから、あいつなら別にいいかと電源を切ろうとした、が、なんとなく、また背筋に冷たいものが走るのを感じた。

…なんだよ。

「はいはい、なんだよー…」

別に、いつもだったら切っていたかもしれない。でも、なんとなく
だけど、切ったらいけない気がした。
今、話さないと、後戻りできないような、そんな事態になる気がし
て。

「…？おい、京？」

電話に出ても、何故かしばらく無言の状態だった。微かな息遣いと、
走るような音だけが響いている。
おい、と再度対戯は呼びかけた。小さな声が、電話の向こうから漏
れる。

『…あ、……………け、て…』

「は？聞こえねえぞ？」

『…て、……………い…』

「…は？」

『たすけ……………いぎ…』

「っ、」

今、なんて？

『た、いぎ…』

「おい！…お前今どこだ！…」

『わかん、ない…、おれ、追いかけて、られてるのに…、おん、なの、
人…なのに、違う…、それ、だれ、もいない…！』

「京！」

『こわい…なんか、ちがう…おと、が…、こえ、が……………』

何を言っている？何を言ってるんだ？
追いかけてる？女？違う？怖い？

…嫌な、予感？

いつの間にか対戯の足は駆け出していた。逸る気持ちが頭の中を蹂躪し、吐き気がする。

電話口では、ひたすら京の名前を叫び続けた。

「京！返事をしろ！京！」

『お…なの人…こわい…、まるで、おに、みたいな…』

…鬼？

怖い、女？

『おこつてる…よく、わかんない、けど、怒ってる…』

怒ってる？

感情？

「まさか…」

そんな、こんなに、『都合悪く』、あるはずが…。

嘘だ、ありえない。まさか、そんな…、

対戯の頭の中で、入りたての知識が限りなく循環しながら悪い予感を引き立てた。

冷たいものが這い上がってきて、その気持ちの悪さに膝をつきたくなる。

「おい！お前本当にどこにいったよー！」

『わ…かな…、めちゃくちゃに、走って、だから…』

「…っ！じゃあ何か目印は！？」

『え…あ…、なんか、薄暗い…』

「暗さでわかるかー！」

『あつ、…え、と……、青い、ベンチがあつて、黄色い、滑り台の公園……』

「…、そこなら知ってる！とりあえず気張って逃げろ！！」

『対戯いー…』

「大丈夫だ！！必ずそっち行く！！」

俺は何でこんな必死なんだろう。

何で誰かのためにこうも全力で走ってるんだろう。

面倒くさいのには関わりたくないと思っていたばかりじゃないか。

こんな、万葉家で聞かされた『あのこと』ともいえないはずなのに、確証もないはずなのに。

偽善者染みた行為をして、なん利益があるんだよ。

「どうなつてんのか知らねえけど、絶対無事でいろよ！待ってる！」

けれど、満足にも喋れない中、一番に電話してきて、一番に助けを求めて。

俺のことを、友達だと、当たり前のように、そう言った、あいつが。

「絶対、助ける」

『……うん、信じてる』

何一つ疑わず、このペテン使いを信じるという。

京は馬鹿だ。間抜けだ。お人よしだ。けれど、嫌いにはなれない。

あんなに、ぐちゃぐちゃな喋り方なのに、その言葉だけは鮮明に、明確に、はっきりと、言う。

対戯はひたすら走る。走る。走る。走る。早く見つけなければいけない。

助けるなんて大見得張って、自分に何が出来るといふ。
嘘しか取り柄のない自分が。

…けれど、嘘しか取り柄のない自分が、やどりを助けることができた。

それだけは、真実なのだ。

走っているうちに息が上がってくる。苦しくなる。足も疲れのための痛みを放つ。

けれど止めてはいけない。止めてはならないのだ。

「このやろ…!!」

間に合え。間に合え。間に合ってくれ。

+++++

意味がわからなかった。なんで自分が追いかけられているのか。なんで、自分が、包丁を持った女性に追いかけられてるのか。

女性は、目をぎらぎらとさせながら、狂気に塗れた顔で自分を追ってくる。

よくわからない。耳が痛い。怖い。怖い。怖い。

いいことなんか、ぜんぜんなかった。

涙を堪えながらただひたすら走る。数十分も走って、息も苦しくてもう倒れてしまいたい。けれど、倒れたらきつと自分は死ぬ。

ありえない、なんでこんな目に合うんだ。

女性は叫び声を上げながら、京をひたすら追いかける。

その目は血走り、理性などというものを遠くに捨て去ってしまったみたいだった。

「憎イ、憎イ憎イ憎イ憎イ…!!!男ガ憎イ!!!」

重く冷たく感情の強く籠もった言葉、：『籠もりすぎた』言葉は、
大きい『何か』の力を得る。

人が鬼と為す理由。ヒトが鬼を生み出す理由。
言葉は人を殺す。その意味のままに。

一色に染まってしまった言葉は、その方向にしか動くことが出来ない。
なぜなら、そうするしか生み出された意味はないからだ。

京は言霊遣いではない。だから、見えるよしもない。
女性の背後にあるものを。

微かに輪郭をぼやかしながらも、確かにある、それを。

E p i s o d e 8 言葉は鬼と成りて（後書き）

とばっちり京くん。

多分可哀想な役回り。

Episode 9 生まれし心の成れの果て

鬼。人はその感情により、鬼と成り、その感情に満ちた言葉は、その形を作る。

鬼は人から作られる。かくいう、人を殺す人間もそう呼ばれる。殺人鬼、と。

白いカーテンがふわり、と揺れる。淡い光が、窓ガラスを通して病室全体に降り注いだ。

つん、と鼻につく病院特有の臭いもう慣れた。代夜はただぼう、と窓の外を見ながら、その双眸の視線をどこか遠くに宿していた。窓は開いていて、外からの風が代夜の色素の薄い髪をさら、と揺らす。

「きつと、話してくれはしないんだろうね」

小さくぼそり、と呟いた。

呆れや、諦めに似た笑みが、八の字に垂れ下がった眉と共に顔に出る。

「そんなの、寂しいだけなのになあ」

そう零した言葉は空気を微かに震わせただけで、静かにこの病室内に溶けていく。

代夜は悲しそうな顔で、しょうがない、という顔で、親友のことを思い浮かべる。

この傷を負ったあの日。

自分は気を失ってなどいなかった。

全て覚えていた。

けれど、言わない。代夜は嘘をつかない。だから隠す。だから、誰にも知られることはない。

きっと彼は、自分を巻き込むことを恐れているんだろう。

あのペテン使いは、そういうところで、人の気づかぬところで優しさを見せるから。

だから、聞くこともできない。彼のために。彼が自分に秘密にしようとしていることだから。

聞けない。知らないでいることしかできない。そうすることしかできない。

『あんな』親友の姿を見ながらも。

不意に、窓からなんだか生暖かく、嫌な臭いのする風が吹いた。一瞬のことだったが、それは鮮明に代夜の脳内に焼きつく。

あれ、と首を傾げたが、あまり気にすることじゃない、そう考え、ぼすん、と体をそのままベッドに倒す。その瞬間じくり、と傷が痛んだが気にせずにただ、目を閉じた。

+++++

「アア嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼っ！！！！」

「ひいっ！！」

後ろから追いかけてくる女性の叫び声を聞いて、思わず京は情けない声を上げた。

ちら、と後ろの様子を伺って後悔する。異様な光景を目に焼き付ける羽目になった。

長い黒髪を振り乱しながら、ひたすら包丁を京に突き立ててしまおうと、それだけを考えているかのように、その目線は京を捉えて話さない。

（なんで！なんでなんで！なんでこんなことになってんだよ！！）

当たり前のように、京の中には疑問が湧き上がる。

（代夜のお見舞いに来ただけなのに！！）

泣きそうになるのを堪え、必死に走った。

（今日はいい天気だと思ったのに！）

息が苦しくて、渴いた喉からときおりヒュー、と音が鳴る。

（『明るく』で、いい日だと思ったのに！）

がんがんと、あまりの出来事に、酷く頭が痛んだ。痛むというより、嫌な音が耳元で騒いで、きーん、とした深いな金属音が響いている感じた。

「く、そお！！」

京は公園の中を、追いつかれないようにひたすらぐるぐると走っていた。

このまま知らない道を走って行き止まりの道に出してしまうより、ここで助けを待つ方が余程良いと思ったからだ。

これだけの叫び声を上げてるのに、誰も気づかない。そんな確かな『異常』をひしひしと感じながらも、京は走る。

待ってろ、と言われたのだ。だから、自分は待たなくてはいけない。

「ああアアアア嗚呼嗚呼嗚呼！！」

「うっさい！！」

京は地面にあった石を通り過ぎながら拾い、それを女性に投げつけた。これで少しは怯んでくれたら、と思ったのだが、何故か石は女

性のすぐ手前で弾かれる。

はあ！？なんで！？と声をあげる京。弾かれた石は地面に転がり、ぱきり、と半分に割れた。

おかしい。ひやり、としたものが背筋を凍えさせる。いくらなんでも、何も触れずに石を弾き返すことなど不可能なはずだ。しかも、二つに割ってしまうほどの。まるで、人間の力じゃないみたいなの…。

…人間の、力、…『じゃない』、みたいなの…？

待てよ、それじゃ、なんなんだ。ばくばくと脈打っていた心臓が、さらに音を立てて加速する。

もう一度確かめるように、近くの石を拾い、思いっきり女性に投げつけた。勢いよくその石は女性に向かうが、やはり、女性に届く手前で弾かれる。

おかしい。絶対に、これはおかしい。

ありえないんだ。こんなこと。

「ぬわあ！！」

石に氣をとられていたら、京の足首がぐきり、と曲がり、体が傾きそのまま地面に倒れる。右半身をそのまま叩きつけ、一瞬だけ頭の中が衝撃に支配される。

けれど、あいつは、と京が女性のほうを向く。そこには先ほどよりもぐん、と縮まった距離にいる女性が。

口元に歪んだ笑みを貼り付けて、包丁をその手に、ゆらゆらと体を左右に揺らしながら、近づいてくる。走るのをやめて、ゆっくりと近づいてくるその様は、京の恐怖を増させた。

…でも、待ってろって、言われたんだ。

唇を噛み締めながら、恐怖により固まる体に鞭打ち必死に立ち上がる。

もう諦めたかと思っていたのか、女性は驚いたように一瞬体を固めてそれから憎々しげに顔を歪めさせる。

足が震えて、正直立っているのさえ辛かった。いっそ、もう諦めた方が楽なのではないかと。

でも、待つてろって、待つてろって、対戯が、言ったんだ。

だから、待たなくちゃ、いけない。

待つてろって、言うてくれたから。

「く、るな!!!」

無駄だと知っていながらも、地面に落ちているものを必死で投げつける。

かくかくの足も引きずって、必死に逃げた。

けれど、次の瞬間

ドガァッ

「あぐ!!!」

横から、いきなり強い衝撃が起こる。なにか、『大きなもの』に殴られた感覚が体中を支配した。急激な痛みに頭がついていかない。

地面にそのまま叩きつけられて、腹の空気が一気に漏れる。頭も打ち付けたようで、意識が霞んだ。

ぽたり、と。

赤色が地面に落ちる。

「...あつ...」

どうやら額が切れたようで、頭から血が流れてきている。右目にそれは入り込み、片方の視界を赤く染めた。

頭を打った衝撃はまだやまず、こちらへ歩いてくる女性の姿が二人にも三人にも見えた。

これは本格的に、やばい。

きいん、と耳鳴りがする。口の中で血の味がした。

「ア、ハハハハッ！！アハハハハ！！」

もう、目の前に女性が来ていて、包丁を振りかざしている。刃の部分が太陽の光を反射して鈍く光る。

女性の顔は狂気に歪んでいて、もう人間の顔とは思えなかった。

…いや、それこそ、『人間らしい』顔、なのかもしれない。

「男八、排除、されるべき、男は、死すべきイ！！！」

女性が、包丁を、振り下ろした。

けれど、ぎりぎりで京は体を捻らせ、それを避ける。

ざくつ、と地面に刺さった包丁は、その半分まで体を沈めている。

なんていう力だ。

抜き出そうとする女性を横目に、なんとか立ち上がり、逃げ出そうとするが、数歩歩いてすぐ、よろめいて倒れる。

先ほどの吹き飛ばされたダメージが体を思っように動かせてくれなかった。

「うう、う…」

逃げなきゃ、逃げなきゃいけないのに、体がもう、動かない。

腕も足も頭もずきずきと痛んで、意識が遠のくのを必死に堪えた。

（待たなきゃ、いけないのに）

視界がぼやける。

（ちゃんと助けに来てくれる、人がいるのに）

何してんだよ俺、と小さく1京は呟いた。
諦めたら駄目なのに、もう体が動かない。

「逃がサナイ…！」

包丁を抜いた女性が、左右に揺れながら、こちらへ向かう。
逆手に持った包丁が、いやに生々しく感じた。

「来る…なよ…」

なんとか起き上がろうとするが、体に力はもう入らない。きつとも
う、包丁を避けることもできないだろう。

右目に入った血で見る赤い世界は、絶望的で、壊れたように見えた。
今度こそ、女性は包丁を突き立てようと、包丁を振りかざす。

そして、勢いよく、振り下ろした。

空は青くて、雲は白くて、明るくて、優しい日だと、思ってた。
暗いのは苦手で、光が差す場所にいるのが、好きだった。
きっと、そんな日は、いい日になると、そう思っていた。

「っ…！！！！！」

ガキイツ！！

高く鳴る金属音。

「っ！？」

高く飛び、遠くに落ちる包丁。

女性の顔が、驚きに染まった。

京の目の前に立つ、後姿。

両手で鉄パイプを握り締めて、そこにいる、待ち望んだもの。

「っ……！！対戯……！！」

微かに声が震えた。どっと安心感が噴き出した。

顔だけこちらに向けた対戯は、にかり、と笑って見せる。

「遅くなつたな」

「……ううん、信じてたよ」

対戯が女性の方に顔を向ければ、憎々しげにこちら睨み付ける姿が。そして、その背後に浮かぶ、大きな『それ』を見た。

全体的な茶色い体に、大きな鬘を生やし、ぎよりと緑色の目を光らせ、両手が異常なほど大きい。その口には、大きな牙をつけていた。

「これが、『鬼』、か……」

鬼・感情量中の下級【憎悪】

知らず知らずのうちに対戯の頭の中に流れ込んできた。

うわまじで普通じゃなくなってきた、と小さく零す対戯。

「対戯、あれは……」

「ん、大丈夫だ。よく頑張った。褒めてやるから感謝しろ」

「なにその上から目線……」

「お前は寝てろ。俺がなんとかしてやつから」

「なんとかかって……あれ相手に……？よく、わかんないけど、あれ、普通じゃ……ないよ……？」

「わかってるさ。包丁持ってる時点で危険確定だ。これなんの火サスだよ、つかホラーだ。恐えよ」

「そんな…」

「まあでも、俺も普通っていえるかわかんねえし」

とりあえず寝てろ、と対戯が言う。なにそれ、と京は思わず笑みを零した。

安心やら、嬉しさやらで、京の張り詰めていた緊張が一気に解ける。かくり、と意識が遠のき、京の視界が霞んでいく。

大丈夫だ、と確信できた。彼は、嘔吐きだけれど、だけれど、信じることが出来た。

だって対戯は、嘘をつくけど、歪んだ人じゃないから。

ぼやけた視界の中でも、対戯の姿は、いつも通りに余裕たつぷりで、微笑みながら、京の意識は暗転した。

「…よくもやってくれたな」

自分でも驚くくらいに冷たい声だった。

鉄パイプを強く握る。酷くぎらついた目で女性を睨み付けた。

後ろには頭から血を流し、体に傷をつけた京。

「…ぜってえ許さねえ」

人の二倍ほど大きい『鬼』は、その体に十分にその威圧感を纏わりつかせその存在を主張する。

ふと、それは、あの『入鹿』と名乗ったあの壊れたような男の周りにいた化け物に酷似している、と気づいたが、そんなこと考えてる場合じゃない、と思考を打ち消す。

どうやって、あの鬼を倒すのか。
溢れすぎて壊れた感情の成れの果て。その叫びが命を灯し、『鬼』
と為す。

哀れだとは思う。だけれど、同情する気なんかさらさらない。

「男、憎イ…、殺セ殺セ殺セ殺セ殺セ、死ンでしまエばいい」

「…てめーの親父今頃泣いてるぞ」

「男、男男男男男男男。男男男男男男男！！！！！！！！」

「…きめえよお前…、男男男…執着しすぎだつての…」

「男なんテ、死ねバいいイ！！！！！！」

女性の、喉が潰れそうなほど甲高い叫び声に反応して、鬼が襲い掛かってくる。

そんな姿を、くだらない、と対戯は吐き捨てた。

振り下ろしてくる鬼の手を避け、対戯は女性のすぐ横を通り抜ける。少しでも、とこちらの方に意識が向くように、わざと、あからさまに鼻で笑ってやれば、簡単に怒りをこちらに見せる。

「男男男男…欲求不満か？みつともねーなあ」

「……っツツ！！！！？」

「はしたないぜ？いい大人が」

女性を見て、そんなことではないの是一目瞭然だ。長袖のシャツに長袖のズボン。けれど微かに見える痣。少し考えて、だいたい夫が何かのDV被害にでもあつてたのだらう、と対戯は思う。

男というものを恨むのはわかる。けれどだからといって関係ない人間を巻き込むのはお門違いだ。

どんな理由があつたって、どんなに同情されることがあつたって、それで京を傷つける理由にはならない。

こんなの自分らしくない行動だ、ときつと誰かは言うだらう。淡白

で、冷めてて、そんな普段の自分を知る人間は。

けれど、駄目なのだ。そのことを甘さだと対戯自身は言う。自分の世界を壊されたくない。ありふれた、自分が生きているこの場所を。そこには、京だつて、もちろん代夜だつてゐる。それを傷つけるつていうのなら、それなら。

俺だつて、容赦しない。

「口を開けばその単語しかでねえ、なんてそんなのが鬼生み出したやつ？その執着ぶりにはある意味敬意持てるよ。ちいっとも尊敬は出来ないけどな」

「なにヲ……！！男ガ！！男ガ！！」

「じゃあ聞くけどさ、ここにいる京はあんたに何かした？蹴った？殴った？酷い言葉でも吐いた？つは、ありえねえ。自慢にもなんにもなんねえけどこいつひよろつちいぜ？体力ないし貧弱だし音楽ばつかガンガン聴いてる馬鹿だ。でもこいつの人の良さだけは保障する。こんな俺みたいなペテン使いに飽きずに話しかけてくるなんてほんと人だけはいんだよ。こいつが誰かを傷つけるなんてありえねえ。んで、あんたは、そんな京をここまで傷つけたわけだ？なんで？こいつ何もしてねえよな？男だからって？はあ？馬鹿だよな、あんたそんな性別以前の問題で、人として最低なことしてる。俺が言うのもなんだけど、けれどお前、自分がやるのは許されるとても？男に酷いことされたから？ふざけんなよな、あんたは低俗であり愚劣で、人間として恥ずべき醜態を晒してる女だ」

「つ……！！」

相変わらずの空言。^{ペテン}ぐらり、と女性の感情の昂りに、一瞬だけ鬼の姿が歪み、それから肥大する。その大きな腕を振りかぶり、強く対戯に叩きつけようとする、がすんでのところかわし、その手に強く鉄パイプを打ち込んだ。

少しだけ鬼が傾くが、あまり効いたとは思えない。

言霊。

ふと、それが頭を過ぎる。使えるかもしれない、が、使いたくはなかった。

もし、使ってしまったら、もう、何一つ戻れない気がした。常にある日々も、ありふれたものも全て手の届かない遠くへいつてしまうような。

けれど、鉄パイプだけで勝てると思えない。ここに来る途中の空き地で捨てられていたものを一本取ってきたが、あいてはなにしろ人外だ。

「どうすつか…」

そう零してから、ふと女性の様子がおかしいことに気がついた。瞳孔が大きく開き、ぶつぶつと何かをしきりに呟いている。なんだ、と対戯は耳を澄ました。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す…」

聞かなきゃ良かった。

「やるしか、ねーのかな…」

このままじゃ京共々この殺気に満ちた女性に、鬼に殺されることは確かだ。

かなり危機的状況なのに、どうしてこんなにも落ち着いていられるのか、自分でも不思議でならない。もう、慣れてしまったんだろうか。日常ではないそれに。

「…あーもう！！やればいいんだろ俺が！！この俺が！！それかねーんだろ！！」

半ば切れたように叫び、それからきつ、鬼を睨むように見た。もういい。もうしょうがない。もう、やるしかない。

それしか、『勝てる』方法は、ない。
やるしかないのだ。

「……『動くな』あ！！」

一瞬だけびくり、と鬼の動きが止まる。

けれどそれは一瞬だけで、すぐにこちらへ攻撃をしようと腕を振りかぶる。

対戯が逃げるのを邪魔するように女性がこちらへ突っ込んできた。

「『邪魔すんな』！！」

がしゃん、とどこかでガラスの割れるような音が内側で響いた。

女性は大きな音を立てて少し離れた地面へと言葉の発したとおりに吹き飛ばされ、叩きつけられた。

邪魔をするな。そう吐いた。けれどその本当の意思に従い、言霊は遣われる。

「ちくしょう！！成功しやがって！」

しかもやはり捻くれている自分の言葉。発したとおりではなく、結局のところ本心が曝け出される。いつかすごい失態をおかしそうな気がして、ぶるりと体が震えた。

[illegible]

「あ、」

口から呻き声が漏れる。目の前がちかちかして、頭がぐるぐる回る。落ち着け。痛みに支配されてるだけじゃあ、死ぬ。おそらく、確実に。

俺は誰だ。ペテン使いが泣き言をいうものか。負けない。負けてはならない。

痛くない。

こんなの平気だ。

「つく」

鬼が両手を握って、こちらへ振り下ろしてきた。それを寸でのところで避けて、いつの間にか手元から離れ地面に落ちていた鉄パイプが目映る。

きしむ体に鞭打つて、その場所に駆け寄つた。それを手に持ち、すぐに鬼のほうへ振り返る。

また殴るようなポーズの鬼のほうに、鉄パイプの先端を向け、もう片方を地面につけ、それを抱え込むようにして固定した。

タイミングを合わせろ、とバクバクと耳の奥で鳴る心臓の音に気をとられつつも念じるように口の中で呟く。

鬼ががっ、と地面を蹴って、すごいスピードで対戯の目の前に来る。いまだ。

「『伸びる』!!」

ぐさり、と。何かが潰れるような音をあげながら、その身に鉄パイプが突き刺さる。

さながら如意棒のように鉄パイプが伸びたことによつて鬼の腹に穴が開いた。

鬼は酷く汚い、言葉にならない声をあげながら口から緑がかつた青い色の液体を出した。鼻につんとつく嫌な臭いがするそれは対戯に頭からかかる。

「気持ち悪いん、だよ!!!」

鉄パイプを抜き、鬼から出る体液を浴びながら、対戯は飛び上がる。その鬼の腹からも血に似た、けれどおかしな色の液体が流れ出ていた。

汚い、と思う。これが、人間の感情の末路なのだろうか。

「…何が男、だよ。結局男でも女でも、おんなじくらいの心を持つてるんだよ…。それを、ただの性別の違いのせいにしやがって」

ちり、と熱い何かが頭を過ぎった。考えれば考えるほど腹立たしくなる。

「殴られるのが嫌なら抵抗すればいいじゃないか。抵抗するのが怖いなら助けを求めればいいじゃないか。そんなことさえ弱い人間はできないんだ。それを、そんな自分の弱さを…他人のせいにしやがって!!!」

鉄パイプを握り締め、鬼の脳天に叩き落した。ごり、と低い音がし

それらは空に向かいながら、シャボン玉のように消えていく。

「…心が死んでいくのか」

がくり、と力尽きたように片膝を地面につけながら、言葉を零す。その目は焦点を定まらずも、確かにその消えていく粒子を映していた。

そのぶれる視界の端で、ばたり、と倒れる何かに気づいた。あの女性だった。

「馬鹿なもんだよ」

その女性をで見た。

それは怒りや憎しみの顔ではなく、呆れや困ったような表情だった。ちっ、と舌打ちをしながら、呟く。

「…たく…もう、疲れ…た」

先ほどから、息を吸ったたびに、少しでも体を動かすたびに、体が悲鳴を上げるように痛んだ。

意識が本格的に朦朧としてくる。

ぐらり、と頭の奥が揺れた。気持ち悪さが一気に押し寄せ、眩暈がした。もう、意識を保っているのも辛い。

ばたり、と対戯は倒れた。土の匂いが鼻につきながら、そのまま暗転し意識は深い闇の中に消えた。

+++++

「君が端渡代夜くんですか？」

え、と代夜が振り向くと窓の淵に腰掛けている、黒髪で驚くほど顔の整った少年がいた。

「…ここ、八階なはずですけど」

「知っています」

「…誰ですか、人呼びますよ」

「怪しいもんじゃないんですけど」

「僕には十分怪しいようにしか見えない」

「まあ当たり前ですよね」

「…誰、ですか」

何かやばい、と自分の中の警報が鳴り響いている。それはただの勘に近いけれど、自分の場合、悪い勘は良く当たった。

少年はにこにこ笑ったままで、表情を崩す気配はない。それがさらに不気味さを漂わせた。

「…君の『体質』のことでなんですけれど」

「……っ!？」

思わず息を呑む。なにを、なんで、と冷たいものが背筋を過ぎった。このことは人に知られてないはずなのに、と内心焦る。それを見透かしたように、少年は笑みを深くした。

「実は、僕たちに協力してほしいんですよ、ねえ」

「…は、なにを…」

「それはこちらに来ていただかないと」

「なんだよそれ、僕『たち』って…、もしかしてなにかの宗教ごと
？悪いけどそんなの興味な…」

「君の親友は、君に隠し事していますよね」

「っ…！？」

なんでそれを、と言いたげに代夜は少年を見つめた。少年の瞳がゆ
らりと細まる。

「多分遠くに行つてしましますよ、彼。あなたとは違う道へ」

「…なにそれ、そんなの僕は…」

「信じません、か？嘘か本当かなんて、あなたにはわかるはずでし
よう」

「…っ」

ぐるぐる、と得体の知れない恐怖が押し寄せてくる。

少年はその代夜の様子を見て、ふう、と息を吐くと、近くにあった
メモ帳を取り、一枚千切った。

そこにペンで、さらさらと数字を書き込んでいく。

「一応僕の連絡先です。決まったらどうぞ。僕たちは歓迎しますの
で」

「……」

そう少年は言つて、また窓から飛び降りた。え、と驚きながら窓の
下を覗き込むが、そこにはあの少年の姿はなかった。

さっき代夜が言っていたように、ここは八階だ。

もう、なにがなんだか、わからなかった。

「…ふざけんなよ……」

酷く、泣きたい気分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9946v/>

ペテン使いは言霊遣い

2011年11月17日19時07分発行